はじめに

平成２９年４月２８日、特別支援学校幼稚部教育要領小学部･中学部学習指導要領が公示され、平成３１年２月４日に特別支援学校高等部学習指導要領が公示されました。

本校においても各学校と同様に、改訂された学習指導要領に基づいて教育課程や指導の形態の見直し、授業の改善等に取り組んできました。

知的障害教育における「学習指導要領の着実な実施」は、全国的な課題でもあります。学習指導要領の「基準性」としての位置づけを考えると、「社会に開かれた教育課程」や「育成を目指す資質・能力の明確化」、「『主体的･対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進」、「カリキュラム・マネジメントの推進」等の改訂の基本方針を「各教科等の見方・考え方」や「学びの連続性」、「内容のまとまりごとの評価規準」等のキーワードとなる視点から紐解き、理解を深め実践していかなければなりません。

本校では、令和２年度から「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」を主題とし４年計画の研究を進めてきました。１年目から２年目は、副題を「学習評価に基づく主体的・対話的で深い学びの実現」としました。１年目は前研究の成果を生かしつつ、学習評価を踏まえた学習指導案と子供の学びに迫る事後研究会を重点として研究をすすめました。２年目は、学習評価の視点から主体的・対話的で深い学びを検討し、授業改善の方向性を探るとともに、子供の学びを効果的に授業づくりに生かす手続きを検討しました。３年目からは新たに「指導と評価の一体化のための授業づくりのプロセス」を副題とし、現在に至っています。「『学びの履歴シート』に基づく実態把握」や「『単元シート』を活用した授業と評価の改善」等、少しずつ具体的な成果を積み上げ、発信することができました。

本研究での成果を踏まえながら、根拠に基づいた教育課程と授業づくりを目指し、次年度からの新たな研究に全職員で取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、本校の研究や授業づくり等において多くの方々から御指導、御助言をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

令和５年１０月

校長　川田栄治

目　次

はじめに

Ⅰ　研究概要

１　主題設定にあたって　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

２　研究内容・方法及び研究計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５

３　研究組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

４　研究の取組

１年次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

２年次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　６

３年次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７

４年次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

協働参画者との取り組み　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

Ⅱ　研究実践

授業実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

Ⅲ　研究のまとめ

４年次の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６８

本研究のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６８

Ⅳ　特別寄稿

共同研究者より　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７２

あとがき

研究同人

Ⅰ　研究概要

◇　研究のあゆみ（令和2年～令和5年）

研究主題

「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」

副題

学習評価に基づいた主体的・対話的で深い学びの実現

（１年次、２年次）

指導と評価の一体化のための授業づくりのプロセス

（３年次、４年次）

研究主題
一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて

１　主題設定にあたって

（１）主題設定の背景

本校の研究主題「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」は、学習指導要領、本校の前研究までの成果と課題、これからの社会の大きく３つの背景を踏まえ設定した（図１）。特にこれからの社会と子供の未来の在り方については、平成２９年４月の学習指導要領の公示に際し、社会情勢の大きな変化と予測困難な時代を生きていく子供たちの姿を見据え、子供一人一人に学校教育を通してどんな力を育成したいのか、どんな教育を行っていくべきかについて全職員で話し合った。そして、一人一人が自分らしさを発揮し、生き生きと生活するための様々な力を育成していくことが大切であることを確認した（図２）。このことは、学習指導要領が示す、自立と社会参加に向けた資質・能力の育成という考え方とも合致していると考える。学習指導要領を踏まえ、学校教育目標「みずから学び、かかわり、はたらく人」の具現化を図っていく上で、学びの主体、未来の創り手は子供自身であることを全職員で確認し、本研究をスタートした。

図１　主題設定の背景

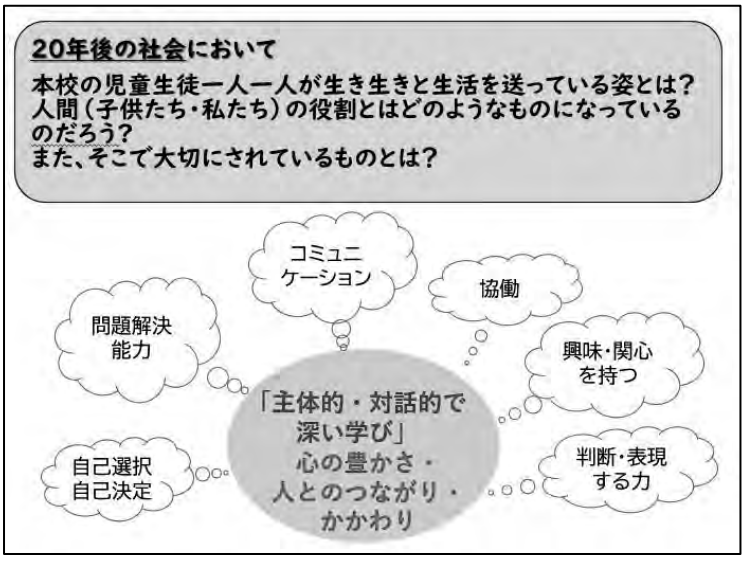


図２　これからの社会と子供の未来の在り方

（２）主題の捉え

本研究において「自己の学びを実感し」とは、「子供が自ら興味・関心等の実感を持って学習活動に取り組み、達成感や満足感等の実感を持つ中で、学びが深まっていくこと」と捉えている（図３）。授業づくりにおいては、子供が興味・関心、学ぶことの面白さや自分の学びを実感できる学習活動をどのように設定し、授業の中で子供が学びを実感できたことをどのように評価していくのかが重要であると考えた。また、「生活していく姿」とは「子供が次の学びに向かっていく姿、学んだことを生かそうとしている姿」と捉えている。授業での姿を丁寧に見取ることで子供が授業を通して何をどのように学び、何が身に付いたかを捉えながら、学んだことが現在及び将来の生活にどのように生かされるかを踏まえた授業づくりが重要であると考えた。

（３）副題について

「学習評価に基づいた主体的・対話的で深い学びの実現」として研究をスタートさせ、実践を行った。研究の成果と課題を整理する過程で、より研究主題に迫るために３年次より新たに「指導と評価の一体化のための授業づくりのプロセス」を副題として設定し、現在まで実践を進めてきた。

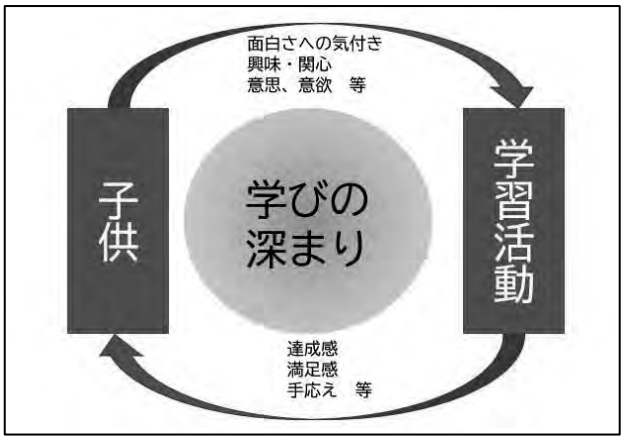


図３　主題の捉え

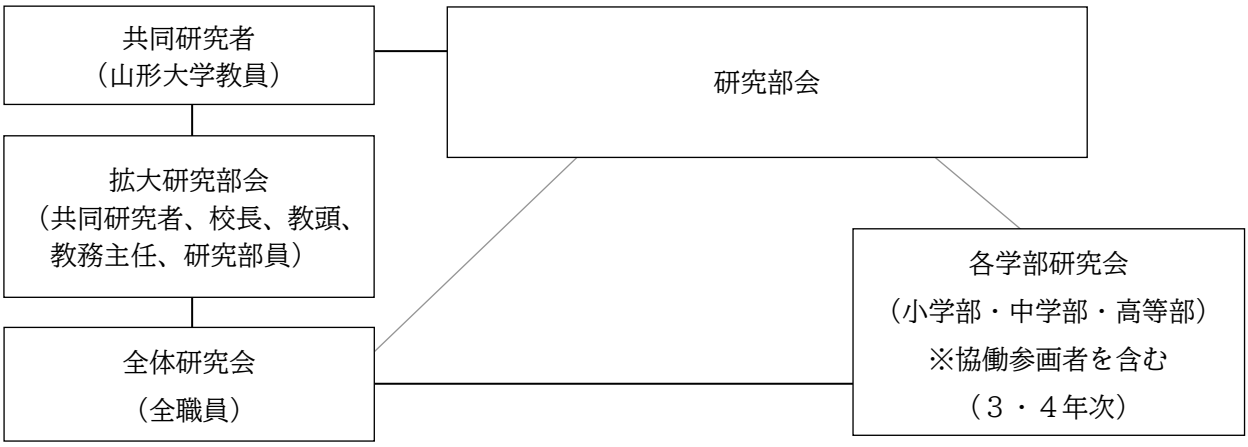
２　研究内容・方法及び研究計画

本校では研究主題に迫るために、表１のように研究内容、研究方法で授業実践を積み重ねてきた。また、年度毎に重点と具体的な取り組みを定めている。４年間の研究を通して、研究の日常化を目指して実践を行ってきた。

表１　１年次（令和２年度）から４年次（令和５年度）の研究計画

<table>
<tr><td colspan="4">研究内容（１）知的障がい教育における主体的・対話的で深い学びの在り方を探る。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">研究方法</td><td colspan="3">①一人一人の実態を基に、育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿った目標を設定する。</td></tr>
<tr><td colspan="3">②目標設定においては、教科の目標を意識し、各教科等合わせた指導においては、関連教科等を明確にし、教科等横断的な視点を持つ。</td></tr>
<tr><td colspan="3">③主体的・対話的で深い学びを進めるために、子供の内面の見取りをより一層行い、日々の授業、授業づくり研修会を実施する。また、子供の内面を多面的に見取り、学部間のつながりを踏まえた資質・能力の検討につながるように、縦割グループにおける授業づくりを実施する。</td></tr>
<tr><td colspan="3">④「主体的・対話的で深い学び」を実現する手段の一つとして、ＧＩＧＡスクール構想の取り組みと関連させながら、ＩＣＴ機器の活用も行っていく。</td></tr>
<tr><td colspan="4">研究内容（２）授業実践と学習評価の手続きを明確化する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">研究方法</td><td colspan="3">①目標達成に向けた指導・支援の手立て、評価方法の具現化を図り、研究サイクル確立に向けた組織的・体系的な学習評価の在り方を整理する。</td></tr>
<tr><td colspan="3">②研究のＰＤＣＡサイクルにおける、Ｃ：チェック（評価）からＡ：アクション（改善）の過程において、評価を踏まえて単元計画や年間単元題材一覧等の見直しを行い、授業改善及び教育課程の編成へ反映させていく。（カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた取組）</td></tr>
<tr><td colspan="4">各年次の位置づけと研究の重点内容</td></tr>
<tr><td>１年次［令和２年度］
【試行】</td><td>２年次［令和３年度］
【基礎】</td><td>３年次［令和４年度］
【定着】</td><td>４年次［令和５年度］
【深化】</td></tr>
<tr><td>・新研究についての共通理解
・学習評価に関わる研修
・学習評価を踏まえた授業づくり（学習指導案による検討、事後研究会）
・ＣＡミーティング試行</td><td>・学習評価の視点からの「主体的・対話的で深い学び」の検討及び実現する学習活動と支援の在り方を探る
・子供の学びを効果的に授業づくりに生かす手続きの実践と考察</td><td>・学習評価と個別の指導計画の関連を図り、PDCA サイクルを日常的に回す取り組みの実践
・現在及び将来の生活に生きる資質・能力を育成する授業づくり（学習活動、単元計画）の蓄積（ＩＣＴの活用を含む）</td><td>・継続的・持続的に PDCA サイクルを回すための組織的取り組みの推進
・現在及び将来の生活に生きる資質・能力を育成する授業づくり（学習活動、単元計画）・PDCA サイクルの実践と蓄積（ＩＣＴの活用を含む）
＜研究のまとめ＞
・知的障害教育における主体的・対話的で深い学びの在り方について
・授業実践と学習評価の手続きの在り方について
・新研究構想</td></tr>
<tr><td colspan="4">４年間の研究を通して、児童生徒が「自己の学びを実感し生活していく姿」を追求していくと共に、研究の日常化を目指して実践していく。</td></tr>
</table>

３　研究組織



※協働参画者とは、３年次よりオンラインを活用して本校職員と共に授業づくりを行う他校教職員である（後述）

図４　研究組織図

４　研究の取組

（１）１年次（令和２年度）

重点内容	・新研究についての共通理解 ・学習評価に関わる研修 ・学習評価を踏まえた授業づくり（学習指導案による検討、事後研究会） ・ＣＡミーティング試行

研究初年度にあたり、新研究についての共通理解や、学習評価に関わる職員研修を行った。学習指導案では前研究の成果を引き継ぎ、資質・能力の三つの柱で目標設定を行い、単元における主体的・対話的で深い学びの視点を記載した。学習評価に関する新たな記載内容として、本時指導案では本時に関連する目標について、評価場面と評価方法を明記した。事後研究会では、評価場面を中心に、子供の姿とその時の子供の内面についての見取りを多面的に協議し、対象児童生徒の学びに迫った。評価を踏まえて単元計画や年間単元題材一覧等の見直しを行い、授業改善及び教育課程の編成へ反映させていく取組（CA ミーティング）については、年間単元題材一覧に単元の振り返りをメモする形で、学部毎に実施した。

＊CA は、PDCA サイクルの Check（評価）、Action（改善）の頭文字を意味する。

成果として、子供の多面的な見方や多様な授業の検討ができたこと、目標と授業の整合性を図られ授業内容が明確化したことが挙げられた。課題として、全ての授業において各教科等との関連を押さえ、授業で育成する子供一人一人の資質・能力を明確にすること、学習評価については一教時の学習過程内のみでなく、単元全体における評価を見通した学習計画を検討していくこと、各種指導計画（Plan）、授業（Do）、学習評価（Check）、改善（Action）がサイクルとして連動するためのそれぞれの在り方について検討する必要があることが確認できた。

（２）２年次（令和３年度）

重点内容	・学習評価の視点からの「主体的・対話的で深い学び」の検討及び実現する学習活動と支援の在り方を探る ・子供の学びを効果的に授業づくりに生かす手続きの実践と考察

単元を通した評価を見通し、指導と評価の一体化を図るために、学習指導案の単元計画に併せて新たに評価計画を記載した。また CA ミーティングは、学級や学習グループごとに対象児童生徒と対象の各教科等を設定し、単元毎に振り返りを記入する書式に統一した。学部毎に毎週水曜日の「研修の日」を活用

し、２ヶ月に一回程度の頻度で計画的に実施した。成果として、資質・能力の三つの柱を育成するにあたり、学習活動を設定する際、学習指導要領の「知的障害教育のある児童生徒の教育的対応の基本」を踏まえた活動を設定することや、思考力、判断力、表現力等については知識及び技能と関連させた単元計画が必要であること、学びに向かう力・人間性等については、他の資質・能力とともに、児童生徒一人一人の学習上の特性を意識した指導が大切であることが再確認できた。課題としては、①授業づくりの前提として、個別の教育支援計画、個別の指導計画を活用し、児童生徒一人一人の現在及び将来の生活を見据えた育成する資質・能力の捉えとともに、各教科等の内容に基づく実態把握の双方を的確に行うこと②資質・能力の育ちを評価し、さらなる育成につなげるために、学習評価を充実させ、指導と評価の一体化を図っていくこと。そのための評価の在り方や評価方法を踏まえた授業づくりについて実践を積み重ねていくこと③学習評価と個別の指導計画の関連を図り、授業づくりに関わる PDCA サイクルを日常的に回していくこと④「附属学校園の将来構想」（山形大学附属学校園教育振興計画＜令和４～９年度＞）に示された、「ＩＣＴを活用した探究的な学び」について、ＩＣＴを活用した授業実践を積み重ねていくことで、授業における効果的な活用方法について検討していくこと、の４点が挙げられた。①、②については、授業における学習評価（何が身に付いたか）を個別の指導計画の評価に反映させた記載内容について教務部と情報交換しながら進めていくこととした。

（３）３年次（令和４年度）

重点内容	・学習評価と個別の指導計画の関連を図り、PDCA サイクルを日常的に回す取り組みの実践 「何を学ぶか」の明確化と「何が身に付いたか」の把握・活用 ・現在及び将来の生活に生きる資質・能力を育成する授業づくり（学習活動、単元計画）の蓄積（ＩＣＴの活用を含む）　「どのように学ぶか」の事例の共有と発信

重点内容の１つ目として、学びの履歴を踏まえ児童生徒に「何が身に付いているか」を把握して授業において「何を学ぶか」を明確にした授業実践を行い、授業後の学習評価で「何が身に付いたか」を個別の指導計画に反映すること、学びの履歴や学習計画に生かしていく PDCA サイクルを日常的に回す実践を行うことに取り組んだ。重点内容の２つ目として、児童生徒にとって現在及び将来の生活に生きる資質・能力を育成する学習活動や単元計画について、校内及び校外で共有・発信していくことで「どのように学ぶか」の在り方を検討していくこととした。２つの重点を踏まえた具体的な取り組みとして、「授業づくりのプロセス」「単元シート」「事後研究会」を設定した（図５）。

「授業づくりのプロセス」は、授業づくりに関わる取組（個別の指導計画、学びの履歴等）の関連を図式化して職員全体で共有し、それを基に実践を行った（図６）。「単元シート」は、各教科等の段階の目標、内容を基に、単元目標、単元の評価規準、学習計画と評価計画、を全ての授業で作成するもので（図７）、「単元シート」の内容・項目等は、学習指導要領及び学習評価参考資料における考え方を踏まえ、本校で作成した。

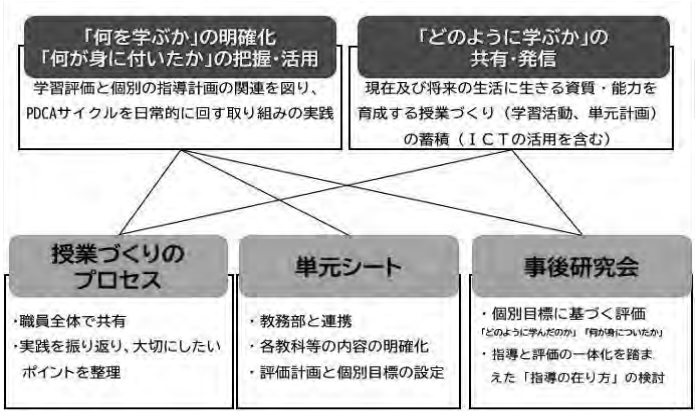


図５　３年次の重点と具体的取組み

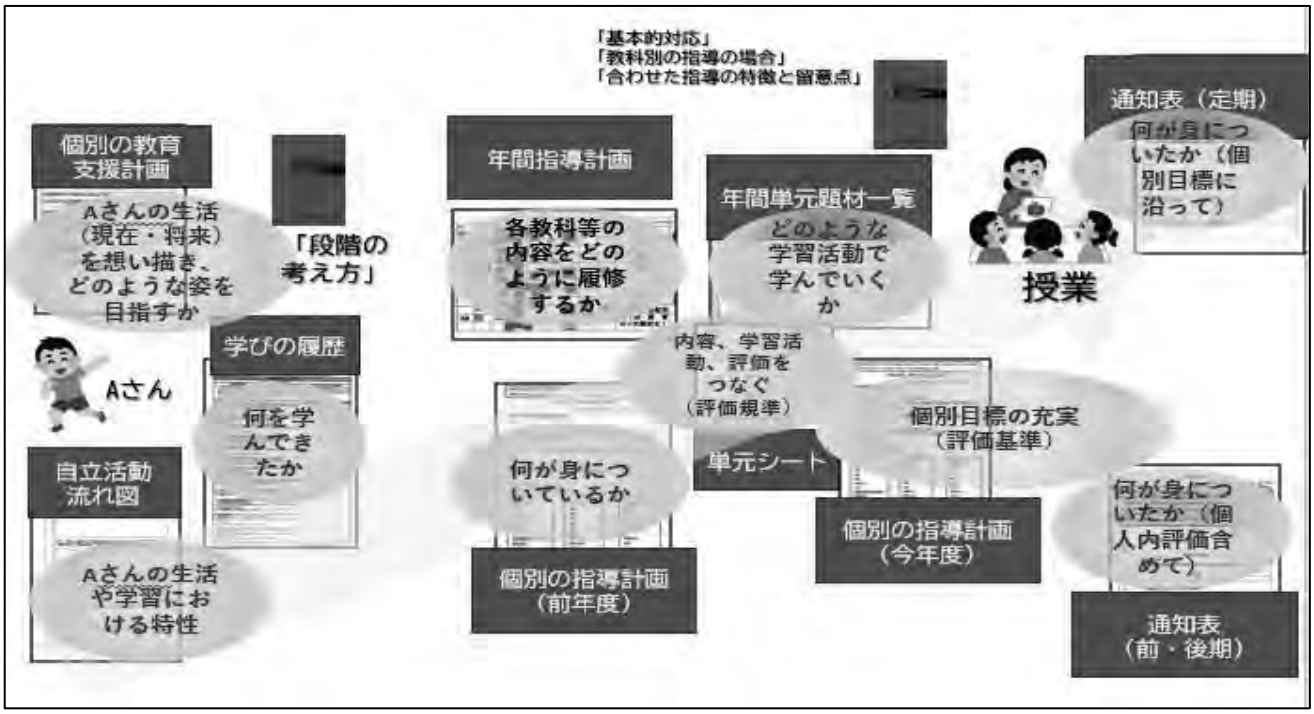


図６　授業づくりのプロセス

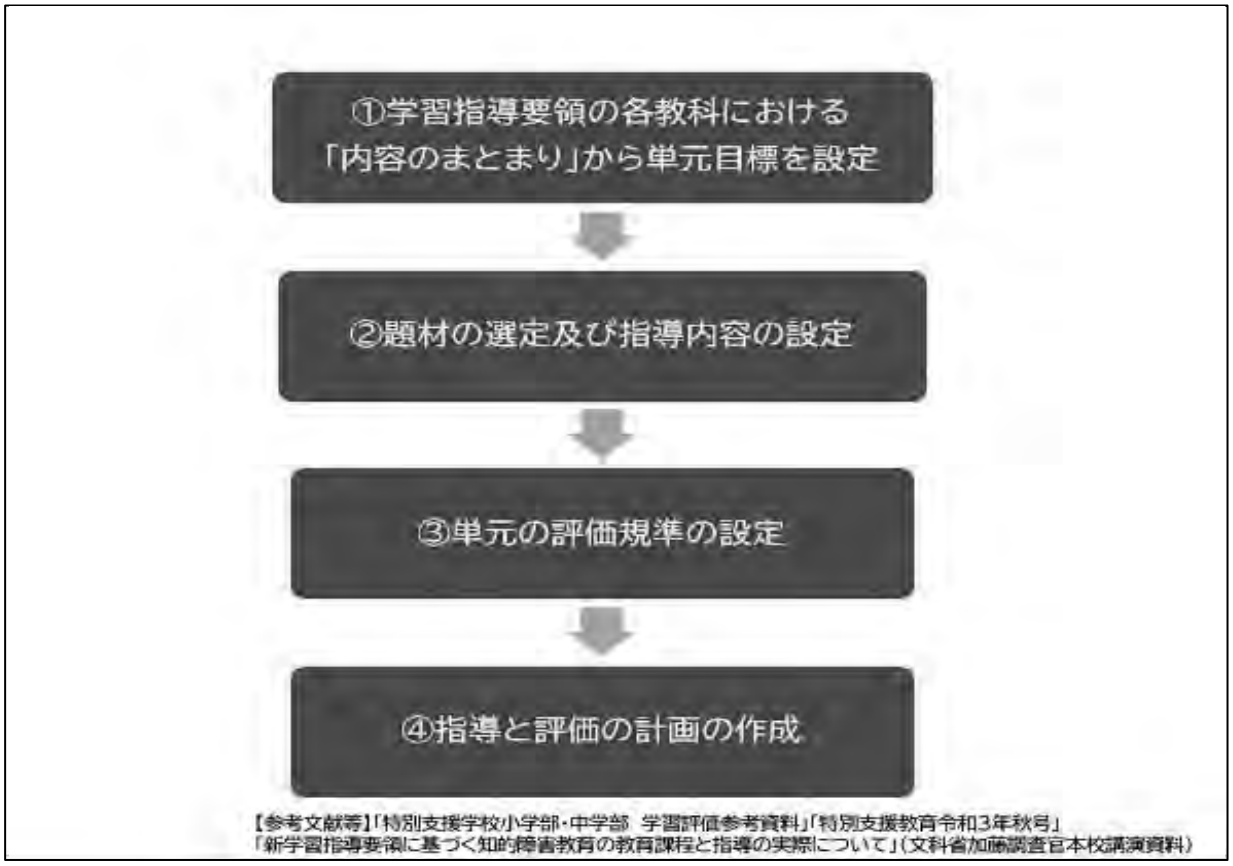


図７　単元シート作成手順

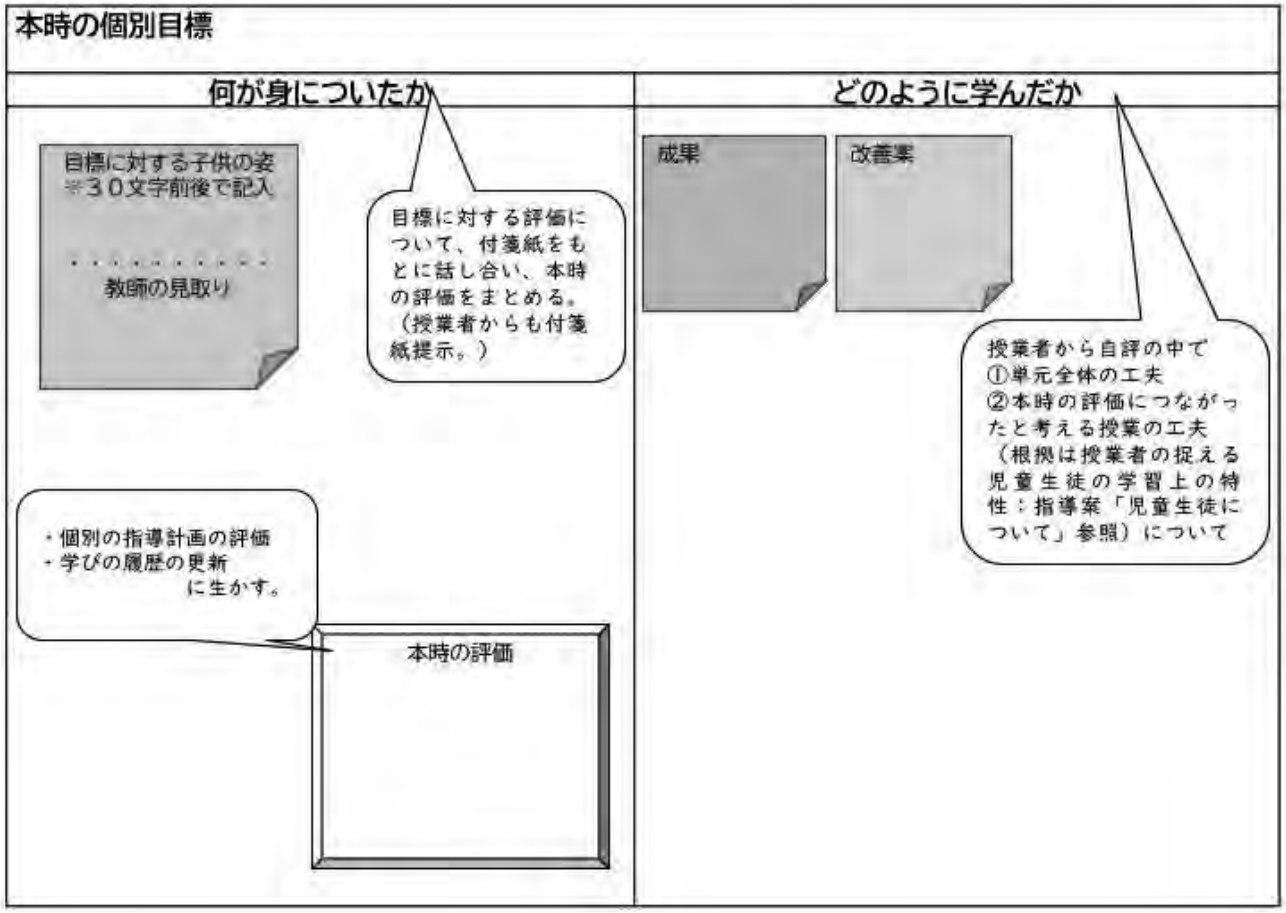


図８　事後研究会の話し合いボード

「事後研究会」は、授業の参観者からの付箋紙（目標に対する子供の姿と教師の見取りを記入）を活用した話し合いの中で、本時の評価と対象児童生徒の学習上の特性を明らかにし、授業づくりのプロセスや研究主題で目指す子供の姿について検討した（図８）。

以上の重点を踏まえ、各学部ごとに校内授業研究会を実施し、取り組みを進めた。その後、校内授業研究会（高等部）、学習指導研究協議会（小学部、中学部）において、各学部で授業検討・実践を積み重ねた。日々の授業づくりにおいては全ての授業について「単元シート」を作成し、実践を行った。また、特に「『どのように学ぶか』の共有・発信」に関わって、協働参画者の取り組み（後述）を設定し、外部の方々と共に本校の授業づくりのプロセスに沿って検討し、授業実践、振り返るまでの取り組みを学習指導研究協議会で発信した。

成果として、「学びの履歴」（福島県特別支援教育センターの様式を参考に本校用に作成）により学習段階を把握し、それぞれの授業で取り扱う各教科等の「内容のまとまり」を基に、「単元シート」を作成する過程で、「何を学ぶか」の根拠を明確にした単元目標の設定ができ、「学習計画」と「評価計画」が一体化した授業づくりを意識して実践することができた。このことは、授業のねらいが焦点化され、「何を学ぶか」が明確になった授業づくりにつながった。また、「授業づくりのプロセス」の一つとして「単元シート」を活用した授業づくりに取り組んだ。児童生徒の個別の指導目標を設定するまでの過程を一つのシートにまとめ、構造を“見える化”し、共有しながら実践を積み重ねることで、授業づくりの手順や関連する諸計画の目的とつながりについて整理することができた。一方で、単元目標や評価規準の作成から個別の指導目標の設定までのプロセス（Plan の部分）、また、授業後の評価（個別の指導計画への記載等 Check の部分）に労力が割かれたため、授業検討や教材研究等に十分な時間を確保することの難しさが課題として考えられた。持続可能な質の高い授業づくりを目指すために、①PDCA サイクルを効果的

に回す組織的な取り組みの工夫、②児童生徒が「何ができるようになるか」の視点から、一人一人の実態に応じた「どのように学ぶか」の蓄積をどうしていくかが課題として考えられた。

（４）４年次（令和５年度）

重点内容	・継続的・持続的に PDCA サイクルを回すための組織的取り組みの推進 「授業づくりのサイクル」の活性化 ・現在及び将来の生活に生きる資質・能力を育成する授業づくり（学習活動、単元計画）・PDCA サイクルの実践と蓄積（ＩＣＴの活用を含む）「どのように学ぶか」の工夫と発信・共有

前年度までの課題を受け、重点の１つめは「授業づくりのサイクルの活性化」とした。単元目標の設定、個別の指導計画につながる評価サイクルの効果的・効率的な取り組みを実践していく（図９）。具体的には、「単元シート」を見直し、機能的な作成と活用を図った。単元目標・指導目標設定までの作成方法・作成時期・作成者を整理するとともに、個別の指導計画に生かす評価の記載の工夫を実践することとした。「単元シート」は、国立特別支援教育総合研究所の「単元作成支援シート」を本校用の書式に整理したものを新たに作成し、活用した。また、目標設定にあたっては教務部と連携し、小学部６年間・中学部３年間・高等部３年間の１２年間を見通したカリキュラム表や年間指導計画を基にして「何を学ぶか」を明確にした。

重点の２つめとして「『どのように学ぶか』の工夫と発信・共有」を進めることで、現在及び将来の生活に生きる資質・能力を育成するための授業改善に努めた。前期を通じてグループによる授業実践を行った（各学部２～３グループで合計７グループ程度）。この実践で、一人一人の授業者及び授業検討者が、

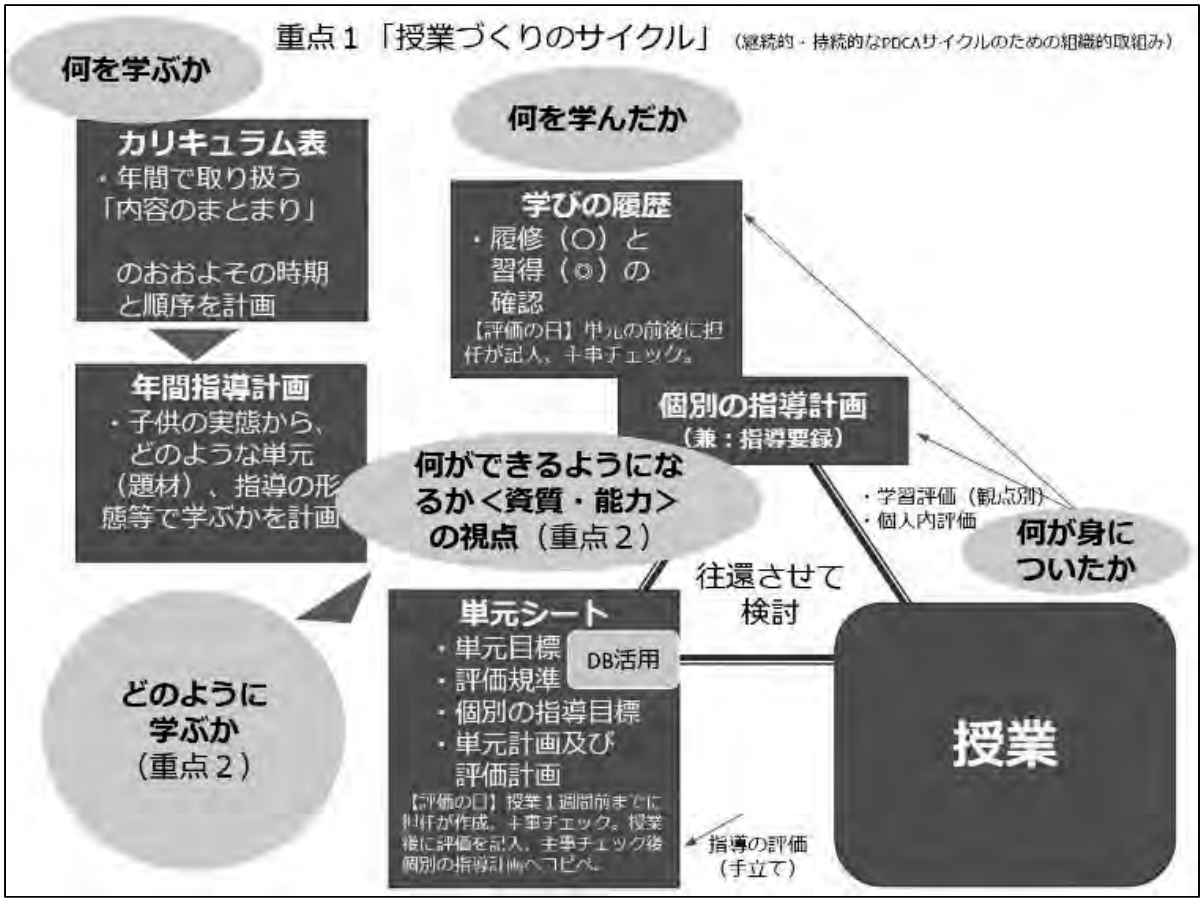


図９　授業づくりのサイクル

児童生徒の実態から単元構成を工夫し、実践しながら各教時レベルの改善をし、単元の振り返りを今後に生かすために実践資料として残すまでの取り組みを発信・共有（対話による学び合い、プレゼンテーション）ができるようにしていくこととした。具体的には、単元シートを活用した授業検討と実践、評価、振り返りまでの実践を実践報告１６号（本紙）にまとめ、学習指導研究協議会で発表することに取り組んだ。授業検討の際には、児童生徒一人一人の「何ができるようになるか」の視点から指導目標及び指導内容を検討し、「自己の学びを実感できる授業づくり」の視点から、４年次研究でも協働参画者（後述）と共に授業を検討、実践、振り返りを行った。

(5)協働参画者との取り組み・オンラインを活用した授業研究会について(3・4年次)

本校の「授業づくりのプロセス」に沿った授業づくりを他校の教職員の方々(協働参画者)にも体験いただいた。アイディアやご意見を参考に、共によりよい授業づくりについて考え、深められる場を目指した。コロナ禍・働き方改革への対応が求められる中での新しい現職教育(OJT)の在り方として、モデルとなる取り組みの提案も兼ね、3年次(令和4年度)より実施した。各学部で「授業検討の視点」を設定し、実際に本校で使用している資料や、オンライン(Zoom)を活用した動画等による実態把握、授業検討を行い、本校職員が実践したものを学習指導研究協議会や校内授業研究会で発信した。事後研究会についても、昨今の社会状況について、オンラインを活用することで遠方の先生方にも参加していただきやすくなるチャンスと捉え、本校が従前より大切にしてきた参加者の方々との対話による事後研究会を実施した。

【参考文献】

・外務省(2020)「持続可能な開発目標(SDGs)達成に向けて日本が果たす役割」
・国立教育政策研究所(2019)「学習評価の在り方ハンドブック　小・中学校編」
・国立特別支援教育総合研究所(2016)「知的障害教育における学習評価の実践ガイド」
・髙木展郎(2017)中教審初等中等教育分科会教育課程部会児童生徒の学習評価に関するWG資料「学習評価の現状と課題」
・三宅芳雄・白水始(2018)「新訂　教育心理学特論」, 放送大学教育振興会.
・明官茂(2020)「学習指導要領 Q&A 特別支援教育[知的障害教育]」, 東洋館出版社.
・文部科学省(2018)「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編(幼稚部・小学部・中学部)」
・文部科学省(2019)「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)」
・文部科学省(2020)「特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」
・文部科学省(2020)「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての1人1台端末環境～≪文部科学大臣メッセージ」
・奈須正裕(2017)「『資質・能力』と学びのメカニズム」, 東洋館出版社.
・西岡加奈恵・石井英真・田中耕治(2015)「新しい教育評価入門」, 有斐閣コンパクト.
・佐久間亜紀・佐伯胖(2019)「現代の教師論」, ミネルヴァ書房.

Ⅱ　授業実践

◇　実践紹介

実践①　中学部　数学科
「　加法･減法　」
実践②　中学部　職業･家庭科（家庭分野）
「　衣服の着方と手入れの仕方　」
実践③　中学部　保健体育科
「　陸上運動（小型ハードル走）　」
実践④　小学部　音楽科
「　はっぴょうかいをしよう　」
実践⑤　小学部　算数科
「　ならべよう　」
実践⑥　小学部　体育科
「　はしろう　とぼう　」
実践⑦　中学部　音楽科
「　音楽で世界を旅しよう　～日本編～　」
実践⑧　高等部　国語科
「　生活に生きる言葉『ことわざ』」
実践⑨　高等部　国語科
「　伝える力『私の実習』」
実践⑩　小学部　数学科
「　分数　」

授業実践 ①	中学部　学習グループ別授業　数学科 「加法・減法」【中1段階イ(ア)㋐㋑(イ)㋐　中2段階イ(ア)㋐㋑㋒(イ)㋐】

授業者	鈴木貴文　加藤ちひろ
授業検討者	石山秋子　柴田雄一郎　山科友理恵　加藤ちひろ　佐藤朋大　山口眞緒　渡辺一恵

◇　生徒の実態

中学部Ｂグループは中学部３年が３名、中学部１年が２名のグループである。「数学科」に関する学習状況等を踏まえた段階については、特別支援学校学習指導要領における各段階の内容を参考に、中学部１段階、小学部３段階の生徒が学習している。

学習の様子については、少しでも難しいと感じると取り組めなくなることもあるが、意欲的に学習しようとする生徒がほとんどである。分かったことを実感したときは、理解したことや気付きを発言し合うことが見られる。

「整数の表し方」の単元では具体物を使って数を数える学習をしてきた。数を数える時に、指さしでは数え間違いが起きることが多いが、具体物を操作することで正確に解ける姿が多く見られた。また、カードをめくって出た数を並べて数の大小を判断する学習では、数直線を用いることで３桁の数字の大小を判断することができた。

◇　何を学ぶか

本単元では、年間指導計画を踏まえ中学部数学の「Ａ数と計算イ整数の加法及び減法」の内容を取り扱う。３年生は中学部２段階の内容を、１年生は中学部１段階の内容を取り扱う。

生徒が、具体物を操作しながら数の大きい加法・減法に取り組み、お金の模型を使って計算する学習活動を設定する。金種の弁別から始まり、金額に合ったお金を準備したり、１００円と１００円を足したり２００円から１００円を引いたりするような、既習事項を活用できるような学習をすることで、自信を持って学習に取り組むことができるようにする。それだけではなく、小学部３段階の加法が用いられる合併や増加の場合の立式や「１０といくつ」という計算（１０のまとまりについて、１０と３を合わせると１３とすぐに求められるなど）を通して、さくらんぼ計算などをする際に、なぜ１０のまとまりを作るのかを考える活動なども取り入れ、形式的な計算や技能の獲得だけにならないようにする。この単元を通して、どのような場面で加法・減法を使うのか、加法や減法の性質についても理解を深めたい。

◇　目標と評価規準

（単元の目標）
中学部２段階

知識及び技能	・３位数や４位数の加法及び減法の計算の仕方について理解し、計算ができる。また、それらの筆算についての仕方を知る。 ・加法及び減法に関して成り立つ性質を理解することができる。
思考力、判断力、表現力等	・数量の関係に着目し、数の適用範囲を広げ、計算に関して成り立つ性質や計算の仕方を見いだすとともに、日常生活で生かすことができる。
学びに向かう力、人間性等	・数量に進んで関わり、数学的に表現・処理するとともに、数学で学んだことのよさを理解し、そのことを生活や学習に活用しようとすることができる。

評価規準　※（１）知識・技能　（２）思考・判断・表現　（３）主体的に学習に取り組む態度

（１）・３位数や４位数の加法及び減法の計算の仕方について理解し、計算ができる。また、それらの筆算についての仕方を知っている。
・加法及び減法に関して成り立つ性質を理解している。
（２）数量の関係に着目し、数の適用範囲を広げ、計算に関して成り立つ性質や計算の仕方を見いだすとともに、日常生活で生かしている。
（３）数量に進んで関わり、数学的に表現・処理するとともに、数学で学んだことのよさを理解し、そのことを生活や学習に活用しようとしている。

中学部１段階

知識及び技能	・２位数の加法及び減法について理解し、その計算ができる。また、それらの筆算の仕方について知る。 ・簡単な場合について３位数の加法及び減法の計算の仕方を知る。 ・加法及び減法に関して成り立つ性質について理解することができる。
思考力、判断力、表現力等	・数量の関係に着目し、計算に関して成り立つ性質や計算の仕方を見いだすとともに、日常生活で生かすことができる。
学びに向かう力、人間性等	・数量に進んで関わり、数学的に表現・処理するとともに、数学で学んだことのよさに気付き、そのことを生活や学習に活用しようとすることができる。

評価規準　※（１）知識・技能　（２）思考・判断・表現　（３）主体的に学習に取り組む態度

（１）・２位数の加法及び減法について理解し、その計算ができている。また、それらの筆算の仕方について知っている。
・簡単な場合について３位数の加法及び減法の計算の仕方を知っている。
・加法及び減法に関して成り立つ性質について理解している。
（２）数量の関係に着目し、計算に関して成り立つ性質や計算の仕方を見いだすとともに、日常生活で生かしている。
（３）数量に進んで関わり、数学的に表現・処理するとともに、数学で学んだことのよさに気付き、そのことを生活や学習に活用しようとしている。

小学部３段階

知識及び技能	・加法が用いられる合併や増加等の場合について理解することができる。 ・加法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができる。 ・１位数と１位数との加法の計算ができる。 ・１位数と２位数との和が２０までの加法の計算ができる。 ・減法が用いられる求残や減少等の場合について理解することができる。
思考力、判断力、表現力等	日常の事象における数量の関係に着目し、計算の意味や計算の仕方を見付け出したり、学習や生活で生かすことができる。
学びに向かう力、人間性等	数量の違いを理解し、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学習や生活に活用しようとすることができる。

評価規準　※（１）知識・技能　（２）思考・判断・表現　（３）主体的に学習に取り組む態度

（１）・加法が用いられる合併や増加等の場合について理解している。
・加法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりしている。
・１位数と１位数との加法の計算ができている。
・１位数と２位数との和が２０までの加法の計算ができている。
・減法が用いられる求残や減少等の場合について理解している。
（２）日常の事象における数量の関係に着目し、計算の意味や計算の仕方を見付け出したり、学習や生活で生かしている。
（３）数量の違いを理解し、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学習や生活に活用しようとしている。

（対象生徒の個別の指導目標）

生徒名	実態	目標
Ｊ男３さん	（１）１００までの数について、数詞を唱える、個数を数える、書き表す、数の大小を比べることができる。繰り上がりのある１位数と１位数の加法の計算ができる。繰り上がりや繰り下がりのない２位数と２位数の加法・減法の計算ができる。（繰り上がりや繰り下がりなし）３位数や４位数の計算は本単元で初めて学習する。	（１）・２位数や３位数の加法及び減法の計算の仕方について知る。 ・加法及び減法に関して成り立つ性質について理解することができる。
	（２）個数を数えるときに１６個を８個と８個に分けて並べて数えた。友達が１０個と６個に分けて数えたことを知り、その方が数えやすいことを教師に伝えた。数を１０のまとまりとして数えたり、１０のまとまりと端数に分けて数えたりすることはできる。	（２）文章を読んで加法や減法のどちらを使うか判断して解くことができる。
	（３）周りの友達の様子に気持ちが左右されたり、少しでも難しいと感じてしまうと取り組めなくなったりすることがある。しかし、できたことを視覚的に確かめられるものを用意したり（できたときのシール）解くためのヒントを伝えるようにキャラクターをプリントに配置したりすることで意欲が高まり、プリントに取り組んだり、気付いたことを発言したりできることが多い。	（３）加法や減法を筆算で解く良さを感じながら学習に取り組む。

◇　どのように学ぶか（単元における主体的・対話的で深い学びの視点）

（関連項目・下線部：ＩＣＴ）

主体的な学び	・既習事項や前時の復習を取り入れながら学習を進めることで、解法を再確認し、加法・減法の学習に自信を持って取り組んでいけるようにする。 ・お金の模型を使う等、具体物の操作を取り入れることで自分で計算に取り組めるようにする。
対話的な学び	・全員で集まって同じ課題に取り組む活動を行い、その際気付いたことを自由に発言できる場面を設定することで、自分から気付いたことを伝えたり、友達の意見を聞いて新たに気付いたりできるようにする。
深い学び	・加法や減法の性質を知った後、実際の場面でどのように使っているのか考える機会を設定することで、数学で学んだことの良さに気付き、生活に活用することにつなげる。

◇　単元計画

教時	月日（曜日）	学習活動	評価計画
1	6/7（水）	・お金を使った学習（加法の準備）。 ・お金の模型を使って金種を弁別する（１円玉、１０円玉）。	（1）
2	6/8（木）	・お金を使った学習（加法の準備）。 ・お金の模型を使って金種を弁別する（１円玉、１０円玉）。 ・１円玉が１０枚で位が変わることを知る。	（1）
3	6/9（金）	・お金を使った学習（加法の準備）。 ・お金の模型を使って金種を弁別する（１円玉、１０円玉、 １００円玉、１０００円札）。 ・１円玉や１０円玉や１００円玉が１０枚で位が変わることを知る。	（1） （2）
4	6/21（水）	・加法（小３段階）。 ・おはじきを使って合算の意味を確認したり立式したりする。 ・お金を使った学習（加法の準備）。 ・金額に合った枚数の硬貨を用意する。 ・お金を使った加法の計算をする。	（1）
5	6/22（木）	・加法。 ・おはじきを使って増加の操作を行ったり立式したりする。 ・０の含んだ加法の計算をする。 ・計算カードを見て気付いたことを伝える。 ・お金を使った学習。 ・金額に合った枚数の硬貨を用意する。 ・お金を使った加法の計算をする。	（2） （3）
6	6/23（金）	・加法。 ・１０から２０までの加法において、１０と端数に分けて考える。 ・お金を使った学習。 ・金額に合った枚数の硬貨を用意する。 ・お金を使った加法の計算をする。	（1） （2）
7	6/28（水）	・加法（小３段階）。 ・１０と端数でいくつ。 ・２桁＋１桁（１２＋４など）。 ・筆算。 ・加法（中１、２段階）。 ・２桁＋２桁、３桁＋３桁のお金の計算をする。	（1） （2）
8	6/29（木）	・加法（小３段階）。 ・足して１０になる式のフラッシュ計算（１０は４と□など）。 ・繰り上がりのある１桁＋１桁の計算。 ・加法（中１、２段階）。 ・２桁＋２桁、３桁＋３桁のお金の計算をする。	（1）
9	6/30（金）	・加法（小３段階）。 ・足して１０になる式のフラッシュ計算（１０は４と□など）。 ・２桁＋１桁の計算（３０＋４など）。 ・加法（中１、２段階）。 ・２桁＋２桁、３桁＋３桁のお金の計算をする。	（1）
１０ 本時	7/5（水）	・加法（小３段階）。 ・フラッシュ計算（１桁＋１桁）。 ・２桁+２桁の計算（３２+１４など）。 ・加法（中１、２段階）。 ・好きな駄菓子２つを合わせた金額を求める。	（1）
１１	7/7（金）	・減法。 ・おはじきを使って求残や求差を表したり立式したりする。 ・減法（中１、２段階）。 ・２桁－２桁、３桁－３桁のお金の計算をする。	（1）
１２	7/12（水）	・減法。 ・１桁－１桁の計算。 ・減法（中１、２段階）。 ・お金を使った減法の計算、筆算。 ・減法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすること。	（1）
１３	7/13（木）	・減法。 ・２桁－１桁の計算（くり下がりなし）。 ・減法（中１、２段階）。 ・お金を使った減法の計算、筆算。	（1）
１４	7/14（金）	・減法。 ・２桁－１桁の計算と筆算。 ・減法（中１、２段階）。 ・お金を使った減法の計算、筆算。	（1）
１５	7/19（水）	・加法・減法のまとめ。 ・普通の計算をするときと筆算を使ったときの違いを考える。 ・計算機を使った計算。	（2） （3）
１６	7/20（木）	・加法・減法のまとめ。 ・文章題を見て加法・減法のどちらを使うか考えて立式する。 ・普通の計算するときと筆算を使ったときの違いを考える。 ・計算機を使った計算。	（2） （3）

◇　本時

対象生徒の単元目標

知識及び技能	・２位数や３位数の加法及び減法の計算の仕方について知る。 ・加法及び減法に関して成り立つ性質について理解することができる。
思考力、判断力、表現力等	・文章を読んで加法や減法のどちらを使うか判断して解くことができる。
学びに向かう力、人間性等	・加法や減法を筆算で解く良さを感じながら学習に取り組む。

２　対象生徒について　対象生徒：Ｊ男３さん

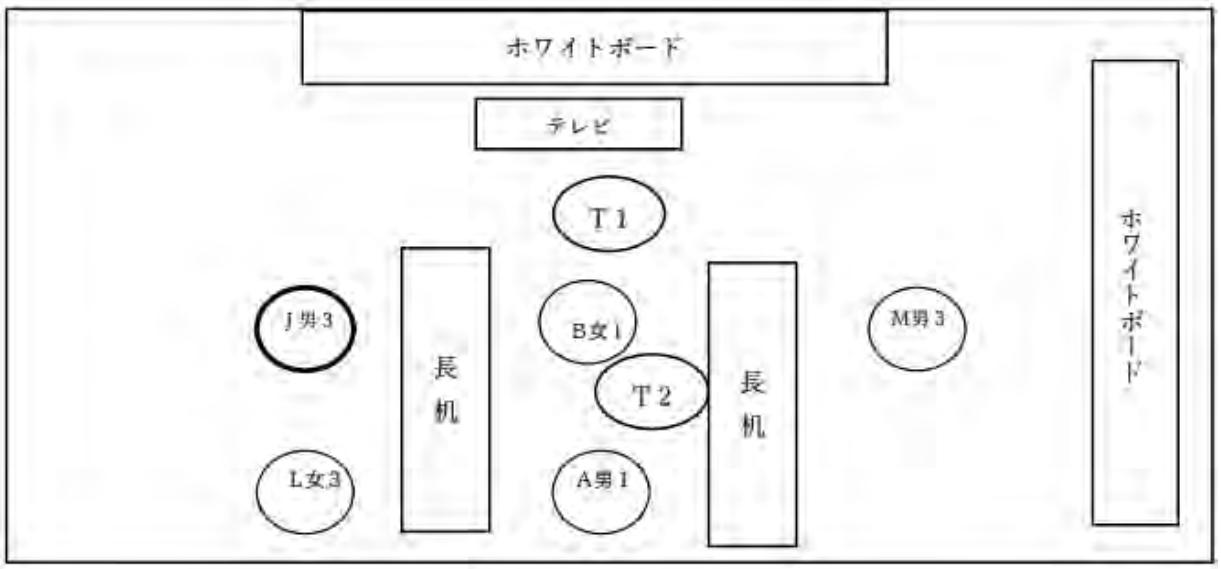
これまでの実態	本時の個別目標	指導・支援
・半具体物を操作して数を数えたり１位数や２位数の加法の計算を解くことができた。 ・さくらんぼ計算を使って繰り上がりの計算を解くことができた。 ・繰り上がりや桁が多くなってきたり、初めての学習のときに難しさを感じ、活動に向かえないことがあるが、既習事項の復習を取り入れ、自信が持てると学習に向かうことができる。	・駄菓子を二つ選び、２位数、または３位数の加法の計算を使って合計金額を求めることができる。	・加法の筆算をする前に、足し算が合わせることや増えるというときに使う計算であること、１０の合成、分解、１０のまとまりと端数、筆算の仕方などの基本的な学習も同時に復習していくことで、既習事項を思い出したり、数をイメージしたりしながら計算できるようにする。 ・座席の横に長机を置き、お金、お金を操作するシート、筆算をするためのプリントを整理できるようにする。 ・学習に取り組めた時に、シールを貼って、視覚的に頑張ったことを感じられるようにする。

３　本時の学習活動

時間	学習活動	全体にかかわる指導・支援（〇）、留意点（・）、評価（☆）
9:45	１　始めの挨拶をする。	
9:47	２　本時の活動について確認する。	〇本時の活動をホワイトボードに記入して伝える。。
9:52	３　フラッシュ計算をする。	〇テレビ画面に映された計算を見て答えられるように数字の下にその数分のキャラクターを並べておき、一人ずつ指名して答えるようにする。
10:05	４　２桁＋２桁、３桁＋３桁の筆算の解き方を確認する。	〇本時５の学習で筆算が使えるように十の位と一の位をそろえて書き、縦に計算していくことを確認する。
	５　好きな駄菓子を２個選んで、金額を計算する（２桁＋２桁、３桁＋３桁）	・ホワイトボードに駄菓子の写真と金額を準備しておく。お金を計算するためのシートを使ってお金を操作したり、別のプリントで筆算の計算をしたりして二つの駄菓子の金額を計算できるようにする。

10：30 10：35	6　片付けをする。 7　終わりの挨拶をする。	＜学習活動５＞ ☆自分の好きな駄菓子を二つ選んで金額を計算する学習で、自分が選んだ駄菓子の金額を、筆算を使って求めることができる。

◇　場の設定



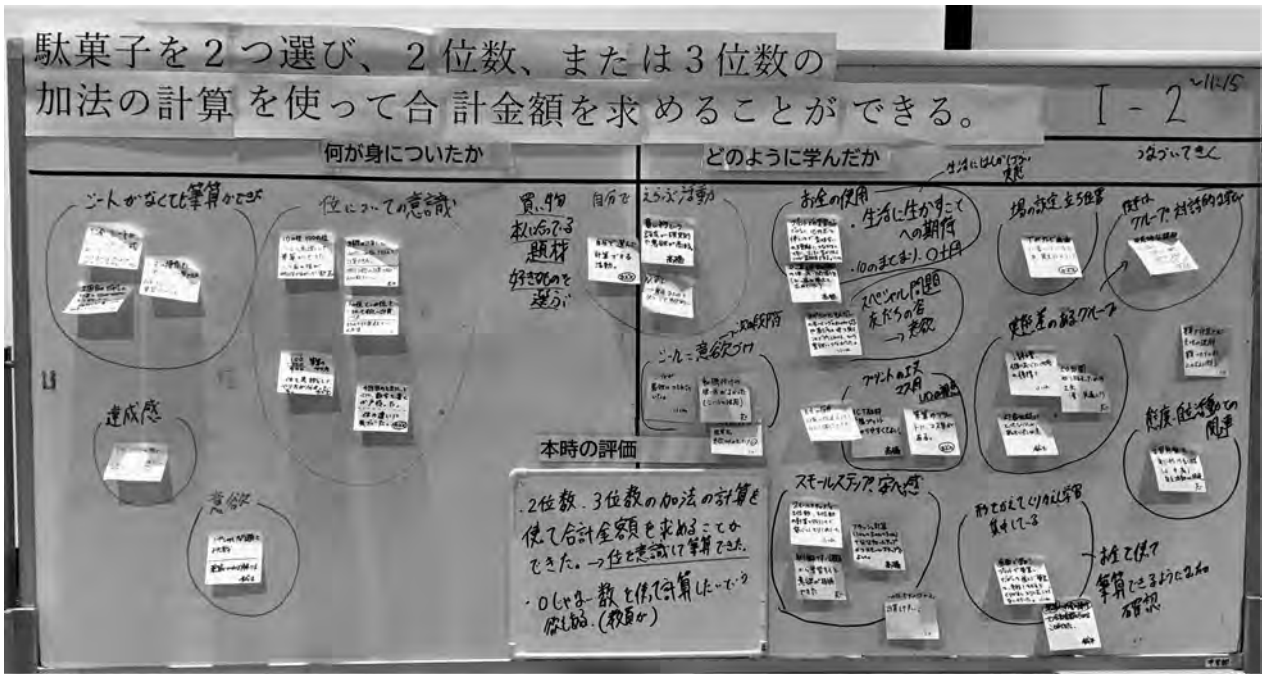
◇　本時の授業の様子

（模型を使い計算している様子）

（筆算に取り組む様子）

◇　事後研究会の記録

（２グループの記録）



（各グループのまとめ）

	本時の評価（対象生徒）
１グループ	・既存の知識（筆算、１桁＋１桁）を使って、３位数同士の加法を正しく計算することができた。
２グループ	・２位数、３位数の加法の計算を使って合計金額を求めることができた。位を意識して筆算できた。

（指導・助言）　山形県立米沢養護学校　長井校　教頭　　森　豊　先生

・机上の計算だけでなく、応用として実際の生活場面の内容も入っていたので基礎と応用の学びの往還がなされていた。
・教員は教えたいことを教えるようになりがちである。特に算数・数学科においては、前に学んだことを生かしながらどう積み上げていくか、自分が学んだことを使っていく（自分が知っていることを応用していく）ことが重要。そのためには、生徒が何をどこまで分かっているかを把握する必要がある。
・状況理解が伴っていないと、具体物の操作で終わってしまうこともある。算数・数学科だけではなく、国語力も関連してくる（カリキュラム・マネジメントの視点）。
・題材や教材・教具として何を使うのか。例えば、数を扱う対象として犬を使うのか、ボールにするのか、半具体物にするのか等。それによって、生活と学びが結びつき、実感を伴った理解につながる子もいるので、一人一人に応じて教材・教具を最適化していくことが重要。
・生徒自身が自分で発見できることが学びの実感につながり、応用していくことにつながる。
・数学科に限ったことではないが、何を学ぶかだけではなく「学び方を学ぶ」ことが重要である。それは、言い換えれば各教科等の「見方・考え方」を働かせることであり、社会で生きる力ということである。

◇　授業の評価

【どのように学んだか】

・既習事項や前時の復習を取り入れながら学習を進め、加法・減法の基礎を丁寧に学習したことで、解法を理解し自信を持って学習に取り組むことができた。

・お金の模型を使って操作することで計算した答えを確認しながら自分で進めていた。

・全員で同じ活動に取り組み、気付いたことを自由に発言できる場面を設定したことで、友達の考え方を参考にして、計算しようとする姿が見られた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・様々な解き方を考えることができるように、友達と二人で同じ問題を考えるなど、自分一人だけでなく友達とペアになって考える場面を設定する。

・計算に取り組む中で、自分一人で計算を進めるための手立てが必要である。

・筆算の解き方を学習したことで、生徒たち自身が生活の中にどのように生かすことができるか、更に検討が必要である。

◇　対象生徒の単元における個別の指導目標の評価

目標
（１）・２位数や３位数の加法及び減法の計算の仕方について知る。 ・加法及び減法に関して成り立つ性質について理解することができる。 （２）文章を読んで加法や減法のどちらを使うか判断して解くことができる。 （３）加法や減法を筆算で解く良さを感じながら学習に取り組む。
評価(学習の様子と評価)
（１）・加法・減法の計算では、一、十、百の位を分けたマス目に書くようにしたことで、位をそろえて筆算することができた。 ・計算カード（１桁＋１桁）を並べて同じ答えになるカードを探す学習をした。「３＋４」と「４＋３」が同じというように気付いた友達の発言を聞き、他のカードはどうかと確認し、式の順序を入れ替えても答えが同じになるという性質に気付いた。 （２）文章問題から加法・減法どちらかを使って答えを求める学習では、「合わせて」、「足して」の場合は加法、「残りは」、「ちがいは」の場合は減法と重要な言葉に注目することで、加法・減法の使い分けができた。 （３）駄菓子を二つ選んで合計を出す学習では、筆算を活用して合計を出すことができた。筆算で計算すれば、問題が解ける良さを感じながら学習に取り組んだ。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・取り扱う内容のまとまりは「加法・減法」であるが、２位数や３位数の加法、減法の計算の仕方を学ぶだけでなく、生活の中で買い物の時に合計金額を求めたり残金を確認したりするときに生きる力につながると考えた。そのことで、加法の意味や加法を使う状況について理解することにつながった。

・段階の異なる生徒が学んでいる学習集団であり、生徒によって異なる二つの段階の内容のまとまりを扱った。個別の指導目標を生徒一人一人の学習内容の習得状況を踏まえて設定したが、同じ学習活動で学ぶ中で、扱う数字が簡単なものになったり、繰り上がりや繰り下がりのない計算になってしまったり、中学部２段階の内容のまとまりを踏まえたものになっていたかに課題が残った。

・学習活動については、既習事項や前時の復習を取り入れながら学習を進めることで、「できた」、「分かった」という自信を持ち学習に取り組んだ。その中で、「お金模型がなくても筆算できそうです。」と具体物なしで挑戦しようとする姿が見られ、実際に具体物が無くても計算できたことに達成感を持つ生徒もいた。

・お金を用いて学習することで、加法のイメージはしやすかった。計算については１０のまとまりを理解している生徒には有効だったが、そうでない生徒には逆に混乱する要因になった。

授業実践 ②	中学部１年　職業・家庭科 「衣服の着方と手入れの仕方」【中１段階B　ウ(ア)(イ)、ウ】

授業者	山科友理恵
授業検討者	加藤ちひろ　柴田雄一郎　渡辺一恵

◇　生徒の実態

中学部１年は、男子生徒２名、女子生徒１名計３名の学級である。「職業・家庭科」に関する学習状況等を踏まえた段階については、特別支援学校学習指導要領中学部職業・家庭科における各段階の内容を参考に、中学部１段階を学習している。

「職業・家庭」では、４月に「Ｂ衣食住の生活」における「ア　食事の役割」の内容を取り扱い学習した。栄養群のイラストをもとに、バランスのよい食事を考えたり日々の食生活を見直したりする活動に取り組むとともに、給食の時間に栄養群のイラストを掲示し話題にすることで、「この食材は黄色のグループだ。」等と、学習したことと食材を結びつけて考えたり、「この食べ物はどの色のグループでしょう。」と互いにクイズを出し合ったりする姿が見られるようになり、学習したことを日々の生活に生かしながら食事を楽しむ場面も見られるようになった。

「ウ　衣服の着用と手入れ」に関しては、今回が初めての学習となる。日々の生活の中では、暑さや寒さを言葉にしたり、体感温度に応じて衣服を調整したりできる生徒もいれば、衣服の選び方がパターン化している生徒もいる。また、そのときに着たいと思った衣服を選んだり一緒に更衣室で着替える友達を見て、同じ衣服の組み合わせをまねて選んだりする生徒がいる。

家庭での様子としては、日常着を自分で選ぶことはできるが、最低気温と最高気温の寒暖差を意識した服装選びは難しい生徒がいる。また、家庭で毎日靴下のもみ洗いを行っている生徒もいる。

学習集団としては、友達や教師と一緒に活動することで、相手の意見を取り入れ、よりよい考えを思考し実践する生徒もいる。学級としても友達の意見を受け入れる力も少しずつ伸びてきており、今後も日々の学習の中で、互いの意見を尊重し合う機会を大切にしていきたいと考えている。

◇　何を学ぶか

本単元では、年間指導計画を踏まえ中学部職業・家庭科の「Ｂ衣食住の生活（１段階)」の「ウ　衣服の着用と手入れ」の内容を取り扱う。生徒にとって「衣服」は、普段の学校生活で、毎日運動着や給食着への着替え、作業学習での作業用エプロンなど、学習や生活場面によって着用するものがいろいろある身近な対象であると共に、週末は洗濯をするため家庭に持ち帰る習慣がある。また、生徒にとってこの時期は衣替えの季節であり、生活の中でも気温に合わせて衣服を着たり、衣服を調整したりすることも多い。身近な対象である衣服に関する関心が高まっているこの時期に、本単元を通し、季節や気温によって着用する衣服が異なることや、衣服の素材の違い、役割の違い、また、手入れの仕方に関して意欲的に学び、日々の生活に生かせるようになることを期待する。また、生徒によっては、日常着の使い分けや目的に応じた服装への気付きも踏まえて指導・支援をしていく。季節や気温によって、着る服が異なることに実感を伴って気付けるよう、異なる素材の衣服を複数用意し、衣服の素材の違いに気付けるよう、実際に衣服を触り、特徴を視覚的にまとめる活動を取り入れ、それらと衣服の着方、手入れの仕方を関連させて指導していく。また、洗濯に関しても、衣服を洗濯することの意味や目的を知るとともに、素材の違いに注目しながら、自分で考え、試しながら実感を持って学べるようにしていく。

◇　目標と評価規準

（単元の目標）中学部１段階

知識及び技能	・場面に応じた日常着の着方や手入れの仕方などについて知り、実践しようとすることができる。
思考力、判断力、表現力等	・日常着の着方や手入れの仕方に気付き、工夫することができる。
学びに向かう力、人間性等	・家族や地域の人々とのやりとりを通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫しようとする。

評価規準　※(1)知識･技能　(2)思考･判断･表現　(3)主体的に学習に取り組む態度

（１）場面に応じた日常着の着方や手入れの仕方などについて知り、実践しようとしている。
（２）日常着の着方や手入れの仕方に気付き、工夫している。
（３）家族や地域の人々とのやり取りを通して、よりよい生活の実現に向け、生活を工夫しようとしている。

（対象生徒の個別の指導目標）

生徒名	実態	目標
Ａ男１さん	（１）あらゆる素材の衣服に関して、素材に注目するというよりは「半袖」か「長袖」だけで分類しようとする。活動で衣服が汚れたときには「(洗えないから)そのままいい。」と言うことがあった。	（１）日常着の機能や素材や、洗うことの目的を知る。
	（２）季節に応じて着る服を、「半袖」、「長袖」など袖の長さだけで選ぼうとするため、薄手でも長袖であれば冬物と考える。また、自分が選んだ袖の長さと異なる服を着ている相手に、着替えるよう声を掛けることがある。衣服を洗う際には、素材に関係なく自分がやったことのある方法で力強く取り組もうとする。	（２）日常着の多用な着方や手入れの仕方に気付き、力加減を工夫する。
	（３）少し肌寒い日でも、夏であれば半袖半ズボンで過ごそうとすることがある。また、目に見える汚れがなければ洗濯の必要性を感じずに使用したタオルを持ち帰らないことがある。	（３）教師とのやり取りを通して、生活の中で気温に応じた衣服の調整や汚れた衣服の手入れをしようとする。

◇　どのように学ぶか（単元における主体的・対話的で深い学びの視点）

（関連項目・下線部：ＩＣＴ）

主体的な学び	・動画や写真で汚れを確かめる場面を設定することで、洗濯の必要性を実感できるようにし、興味や関心を持って学ぶ。 ・衣服の写真カードを用意することで、自分や友達の考えを視覚的に振り返ったり、繰り返し操作したりして、学んだことを次の学習につなげる。
対話的な学び	・自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いて参考にしたりして、衣服の特徴や洗い方についてまとめることで考えを広げる。 ・衣服の手入れをする場面で、衣服に合った洗い方を決める際、洗っている様子の動画を見合い、話し合うことで、自分の考えを広げ、深める。 ・季節ごとに衣服に素材の違いがあることを、実際に触って比較し、表にまとめることで、自分で素材の違いに気付けるようにする。 ・ブラックライトを用い、自分で目に見えない汚れがあることを視覚的に確認することで、洗う必要感など新たな考え方に気付けるようにする。
深い学び	・日々何気なく行っている「着替え」や「洗濯」に関して、視覚的教材や体験的な学習を通して、今回学んだことと結び付けたり、その意義を理解したりする。 ・半袖や長袖だけで衣服を分ける活動を通して、多様な視点で衣服を捉え素材で特徴を分けることができると知り、日々の生活に生かそうとする。 ・学習を通して、洗う必要性を感じ、活動の中で進んで汚れを確かめたり、日々の生活の中で洗濯の必要性を自分で判断して洗おうとしたりする。

◇　単元計画

教時	月日（曜日）	学習活動	評価計画
1	6/5(月)	場面と衣服を合わせる。 ・学校で、着替える場面と着替える服を正しく結びつけ、着替える理由を考える。	(1)
2 3	6/6(火)	衣服を季節で分ける。 ・持ち寄った衣服を用い、夏用か冬用かをイラストカードを使って考える。	(1) (2)
4 5	6/7(水) 6/8(木)	衣服の特徴を調べる。 ・持ち寄った衣服を用い、実際に触りながら特徴をまとめる。	(2)
6 7 8	6/12(月) 6/13(火) 6/14(水)	衣服の特徴をまとめる。 ・４～５教時目に調べた特徴をまとめる。	(2) (3)
9	6/19(月)	衣服を洗う目的を知る。 ・見える汚れと見えない汚れがあることを知る。	(1)
10	6/20(火)	衣服を洗う ・洗う際のポイントを考え、洗う。	(2)
11 12	6/21(水) 6/22(木)	洗い方をまとめる。 ・前回の活動を振り返り、ポイントを考えてまとめる。	(2) (3)

１３ 本時	６/２３(金)	衣服を洗う(冬物) ・洗う際のポイントを考え、洗う。	(２)
１４	６/２６(月)	よりよい洗い方を考える。 ・衣服を傷めない洗い方を調べ、まとめる。	(２)
１５	６/２７(火)	衣服の特徴をまとめる。 ・今までの活動で分かったことをまとめる。	(１) (３)

◇　本時

対象生徒の単元目標

知識及び技能	・日常着の機能や素材や、洗うことの目的を知る。
思考力、判断力、表現力等	・日常着の多用な着方や手入れの仕方に気付き、力加減を工夫する。
学びに向かう力、人間性等	・教師や家族とのやり取りを通して、生活の中で衣服の手入れを工夫しようとする。

２　対象生徒について　対象生徒:A男1さん

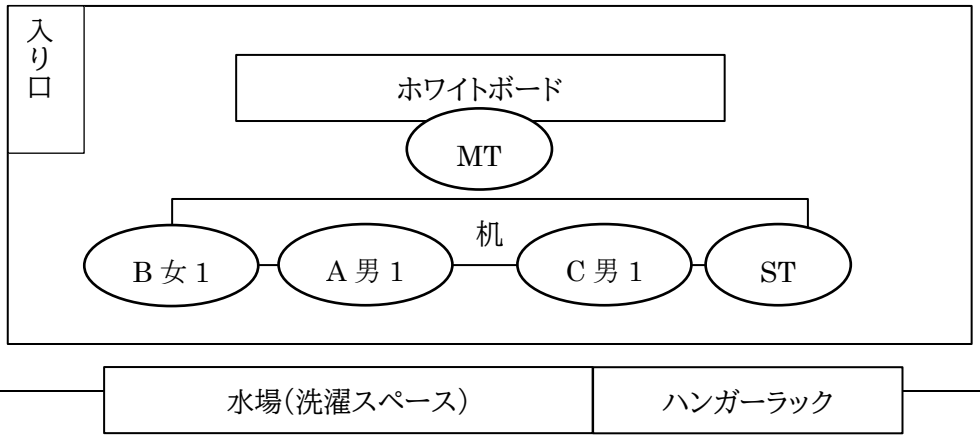
これまでの実態	本時の個別目標	指導・支援
・夏は半袖、冬は長袖と、気温や季節によって着る服を固定化して考える姿があり、衣服の素材に注目して考えることが難しかったが、学習を通して、衣服にはそれぞれ特徴があると分かった。 ・目に見える汚れは洗う必要があり、きれいにしなければいけないという思いがある。 ・目に見える汚れがなければ、洗う必要はないと考えていたが、９教時目に、目に見えない汚れもあり、使ったら洗う必要性があると気付いた。	・衣服の素材に注目し、衣服に合った洗い方を選び、汚れが落ちるように洗うことができる。	・衣服の素材に注目できるよう、実際に衣服を触って考える時間を設け、素材に注目できるような声掛けをする。 ・衣服に合った洗い方や、夏服との素材の違いに注目できるよう、１０～１２教時目でまとめた表を掲示し、適宜確認できるようにする。 ・前時に考えた衣服をきれいに洗うためのポイントを思い出せるよう、板書写真をプリントで配付する。 ・自分の洗い方を客観的に振り返ることができるよう、洗濯の様子を撮影し、次時に確認できるようにする。 ・洗濯時の細かな動きやイメージを適切な言葉で表現できるよう、教師が本人の発言や動きを見ながら、言葉を補い言語化する。

３　本時の学習活動

時間	学習活動	全体にかかわる指導・支援（○）、留意点（・）、評価（☆）
10:40	１　始めの挨拶をする。	
10:41	２　本時の活動について確認する。	○見通しが持てるよう、活動の流れを最初に確認する。
10:43	３　前時に洗濯した衣服を確認する。	
10:50	４　めあてを確認する。	○取り組むべき内容を明確にし、必要に応じて振り返ることで、集中して活動に取り組めるようにする。
10:51	５　衣服に合った洗い方を考える。	○プリントを配付し、自分の考えを記録として残したり振り返ったりできるようにする。 ・教師が持参した冬物の衣服を活用する。 ・実際に洗う前に、生徒が考えたことを確認し、教師が生徒の言葉を表に記す。 ☆「学習活動５」で、衣服の素材に合った洗い方を考えてプリントに記入する。
11:15	６　自分なりに考えたポイントに気を付けながら、実践する。	○適宜、ポイントを振り返るよう言葉掛けする。 ・生徒の様子を録画し、次時に振り返られるようにする。 ・生徒の洗濯の様子をカメラに撮り、必要に応じて生徒のつぶやきや発言を拾って記録する。 ☆「学習活動６」で自分なりにその洗い方を実践する。
11:25	７　まとめ ・自分の考えた洗い方で実践し、どうだったか振り返る。	○本時の活動を振り返り、個別に頑張ったことや気付いたことを言葉や動きを交えて発表し、教師が言葉を補いながら、表やホワイトボードに記していく。 ○生徒に応じて、発表者に注目できるように支援をする。
11:30	８　終わりの挨拶をする。	

◇　場の設定

学習室３



◇　本時の授業の様子

（場の設定）

（学習活動３の場面）

（Ａ男１さんが活用した衣服）

（学習活動５の場面）

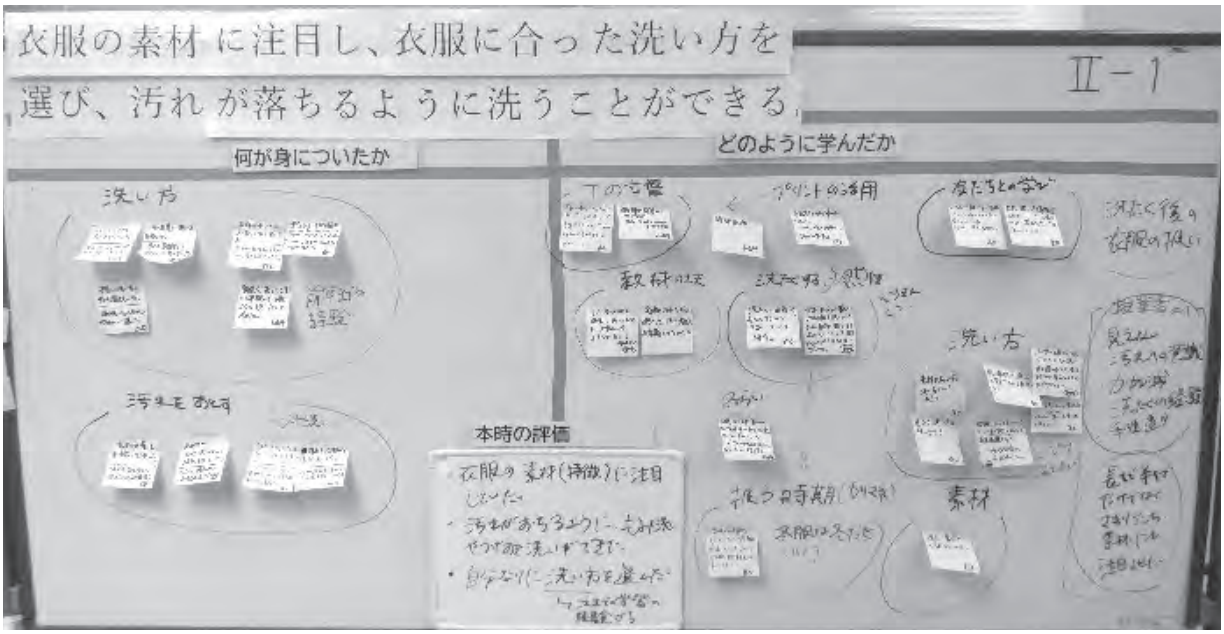
（Ｂ女１さんが活用した衣服）

（学習活動６の場面）

（Ｃ男１さんが活用した衣服）

◇　事後研究会の記録

（1グループの記録）



（各グループのまとめ）

	本時の評価（対象生徒）
1グループ	・衣服の素材（特徴）に注目していた。 ・汚れが落ちるように、もみ洗いやつけおき洗いができた。 ・自分なりに、これまでの学習の経験から洗い方を選んだ。
2グループ	・汚れに注目し、汚れが落ちるような洗い方で洗った。（部分洗い） ・素材の違いは分かった。

（指導・助言）　山形県立上山高等養護学校　教諭　新野　千賀子　先生

・職業・家庭科の特質と、知的障害教育における生活単元学習等の各教科等を合わせた指導で大事にしてきたことは似ている。どちらも実践的・体験的な学びが効果的であり、生徒の生活を基盤に考えることが大切である。生活の中から課題を見出す、学習を生活に生かす、そして生徒一人一人の自立につなげていく。

・学習指導要領の内容を根拠にしながら、生徒一人一人に応じた学習内容の選択・精選が必要である。今回の内容である「汚れた服の始末」をどう扱うかを生徒の実態から検討する。

・季節や行事、生徒の生活から学習内容を扱う時期、タイミングが適しているかという視点から学習内容を設定したり学習計画を検討したりすることが必要である。それがカリキュラム・マネジメントにつながる。

・見えない汚れやにおいをどのように視覚的に見せるか。様々な方法があるので、そういった情報を集めることも教材研究であり、大切である。

・暑がりの人、寒がりの人などその感じ方は一人一人違う。気温に応じた服装を指導する際に留意することは、感覚過敏なのか、こだわりなのか、衣服の調整が難しい要因によっては自立活動との関連が必要になる。家庭科は生活と密接しているからこそ、教科等横断的な指導、計画が大切である。

◇　授業の評価

【どのように学んだか】

・生徒が家庭で実際に着用している衣服を持参してもらって学習することで、日々の生活と結び付けて意欲的に取り組む姿が見られた。

・運動着や給食着などを着用して学習活動に取り組んでいる様子の写真やＶＴＲを活用することで、場面に応じた衣服があることや、着替える必要性についても改めて考えることにつながった。

・衣服を調べる際に触り心地に着目することで、つるつる、さらさら、チクチク、ふわふわなどの素材の違いに気付き、夏服と冬服にグループ分けすることにつながった。
・生地の薄さや触り心地の違いなどに注目する機会を設けることで、日焼け対策に薄手の長袖を着ることもできるなど、多様な着方の考えをすることにつながった。
・汗や皮脂汚れなど、目に見えない汚れがあると学習したことで、目に見える汚れがなくても洗濯する必要性があることが分かった。
・「総合的な学習の時間」の海洋汚染と関連して学習を進めることで、洗剤の使いすぎが海洋汚染につながることを思い出し、洗濯の学習活動の中で、洗剤の使用量を確かめて使うようになった。
・日常生活の中で洗濯する機会を設けることで、使用した汗拭きタオルを洗ったり、畑で使用した軍手を汚れが落ちるようもみ洗いしたりする姿が見られるようになった。

【改善に向けた引き継ぎ事項】
・実態把握の際に、保護者にも家庭での様子の聞き取りをする。
・体験的な学習を多く取り入れる。
・小学部、中学部、高等部におけるねらいの系統性を鑑み、単元計画を立てることが必要。

◇　対象生徒の単元における個別の指導目標の評価

目標
（１）日常着の機能や素材や、洗うことの目的を知る。 （２）日常着の多用な着方や手入れの仕方に気付き、力加減を工夫する。 （３）教師とのやり取りを通して、生活の中で気温に応じた衣服の調整や汚れた衣服の手入れをしようとする。
評価（学習の様子と評価）
（１）夏服と冬服の違いを触って調べると、夏服は肌触りが良く、着ても涼しい素材であること、冬服は着ると暖かい素材だと分かった。また、服には汗や皮脂などの目に見えない汚れがあると知り、見た目にきれいでも使ったら洗う必要があると分かった。 （２）様々な素材の衣服を触り、薄手なら長袖も日焼け対策として夏に着られると考えを広げることができた。教師の手本から、ニットやセーターは力を入れて洗うと伸びると分かり、優しい力で洗ったり、汚れの部分だけを重点的に洗ったりすることができるようになってきた。 （３）生活の中で、使用したタオルや畑で使用した軍手を自分から洗いたいと考え、学習した洗い方で汚れが落ちるまで丁寧にもみ洗いした。乾いた後には、すぐ使えるよう、置き場所を考えるなど自分の生活と関連させて片付けた。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・学校での様子に加えて保護者より家庭での衣服や洗濯に関する実態を聞き、その実態も踏まえて学習内容を設定したことで、衣服の着用に関する課題等も検討して、一人一人の目標をより具体的にして指導することができた。そのことで、各生徒の個別の目標が達成できたとともに、学習したことをすぐに生活に生かそうとする姿も見られるようになった。
・体験的な学習や繰り返しの活動を設定した。実際に衣服を触ったり洗濯したりする学習を繰り返す中で、学習内容が定着していく様子が見られた。また、日々の生活の中で「暑いから、薄いスラックスを選んで履いてきた。」、「今日は少し寒いから長袖を着ます。」など寒暖に合わせて衣服を着ようとしたり、「汚れたから、洗いたい。」、「この汚れが気になるから、きれいにしたい。」と自分から衣服の綺麗に洗濯しようとしたりする様子が見られるようになった。

授業実践 ③	中学部　合同授業　保健体育科 「陸上運動（小型ハードル走）」【中学部１段階　2段階　C 陸上運動】

授業者	佐藤朋大　鈴木貴文　加藤ちひろ　柴田雄一郎　近藤真知子
授業検討者	佐藤朋大　鈴木貴文　山口眞緒　　石山秋子

◇　生徒の実態

中学部の生徒は、１年生３名、２年生６名、３年生５名の、計１４名である。保健体育科に関する学習状況等を踏まえた段階については、特別支援学校学習指導要領保健体育科および体育科における各段階の内容を参考に、中学部２段階、中学部１段階、小学部３段階の生徒が学習している。学習内容に応じて、全体で学習したり、グループに分かれたりして学習している。

今年度初めの学習として、体つくり運動を行った。「手つなぎおに」では、体を動かすことの楽しさを感じたり、鬼に捕まらないために走り方や体の動かし方を工夫したりしながらルールや約束を守って運動するなど意欲的に取り組んできた。

陸上運動の学習について、２・３年生については、昨年度５０m走に取り組んだ。その際、より速く走るために「腕振り」、「足の動き」、「スタートの姿勢」など自分が頑張るポイントを選び、記録会に向けて練習をしていく活動を行っている。自分の走る姿を動画で見ながら改善をしていく生徒、教師とやり取りをしながらポイントを確認して活動する生徒、教師からの働き掛けを受けながら一緒に走る生徒などがおり、陸上運動に関する実態は幅広い。

学習集団としては、教師と一緒に活動することで運動の楽しさを感じる生徒や、より良い動きを求めて思考して実践する生徒などがいる。それぞれが自分の目標の達成に向けて学習に取り組んでいる。

◇　何を学ぶか

本単元では、年間指導計画を踏まえ中学部保健体育科の「C 陸上運動（小型ハードル走）」（中学部１、２段階）の内容を取り扱う。１、２年生は中学部１段階、３年生は中学部２段階の内容を取り扱う。

本単元を通して、小型ハードルを自分に合ったリズムで調子よく走り越すことで走る楽しさや喜びを味わい、今後の生活でも運動を楽しもうとする態度を養えるようになることを期待する。

段階毎のねらいとしては、実態別の段階が小学部３段階の生徒は、教師や友達の動きを見たり、自分で行ったりして、小型ハードルの基本的な跳び方を知ったり、その動きを身に付けたりすることをねらう。その際、考えたことや気付いたことを教師や友達に伝えることができるように、友達の動きがよく見える場を設定したり、タブレット型端末で撮影した動画を見合ったりして、気付いたことや考えたことを表現できるような工夫を行う。また、自信や達成感を持って活動し、走り越す楽しさや調子よく走る心地よさを味わうことができるように、小型ハードルの高さを低いものから徐々に高くしたり、柔らかい素材を小型ハードルとして使ったりして安心して意欲的に運動に取り組むことができるようにする。

実態別の段階が中学部段階の生徒は、小型ハードル走における基本的な体の動かし方を知り、実践を重ねて、その技能を習得すること、またその過程で、自分の課題に気付き、より速く走るためには、どのようにすればよいか考えたり、工夫しながら運動に取り組んだりすることをねらう。走る運動で体を巧みに操作しながら、小型ハードル走に取り組むことの楽しさや喜びを味わうことができるように、小型ハードルの高さを複数設定したり、走る運動の合理的な運動の行い方をポイントで示したりする。自己の能力に適した課題を持ち、適切な運動の行い方を知ることで、自己の目標の達成に向けて試行錯誤しながら軽やかに走ることができるように指導する。

◇　目標と評価規準

（単元の目標）

中学部２段階

知識及び技能	・陸上運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解し、基本的な技能を身に付ける。
思考力、判断力、表現力等	・陸上運動についての自分やグループの課題を見付け、その解決のために友達と考えたり、工夫したりしたことを他者に伝えることができる。
学びに向かう力、人間性等	・陸上運動に積極的に取り組み、きまりを守り、友達と助け合ったり、場や用具の安全に留意したりし、自己の力を発揮して運動をすることができる。

評価規準　※(1)知識･技能　(2)思考･判断･表現　(3)主体的に学習に取り組む態度

（１）陸上運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解し、基本的な技能を身に付けている。
（２）陸上運動についての自分やグループの課題を見付け、その解決のために友達と考えたり、工夫したりしたことを他者に伝えている。
（３）陸上運動に積極的に取り組み、きまりを守り、友達と助け合ったり、場や用具の安全に留意したりし、自己の力を発揮して運動しようとしている。

中学部１段階

知識及び技能	・陸上運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方が分かり、基本的な動きや技能を身に付けることができる。
思考力、判断力、表現力等	・陸上運動についての自分の課題を見付け、その解決のための活動を考えたり、工夫したりしたことを、他者に伝えることができる。
学びに向かう力、人間性等	・陸上運動に進んで取り組み、きまりを守り、友達と協力したり、場や用具の安全に留意したりし、最後まで楽しく運動しようとする。

評価規準　※(1)知識及び技能　(2)思考力、判断力、表現力等　(3)主体的に学習に取り組む態度

（１）陸上運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方が分かり、基本的な動きや技能を身に付けている。
（２）陸上運動についての自分の課題を見付け、その解決のための活動を考えたり、工夫したりしたことを、他者に伝えている。
（３）陸上運動に進んで取り組み、きまりを守り、友達と協力したり、場や用具の安全に留意したりし、最後まで楽しく運動しようとしている。

小学部３段階

知識及び技能	・走・跳の基本的な運動の楽しさを感じ、その行い方を知り、基本的な動きを身に付けることができる。
思考力、判断力、表現力等	・走・跳の基本的な運動の楽しみ方を工夫するとともに、考えたことや気付いたことなどを他者に伝えることができる。
学びに向かう力、人間性等	・きまりを守り、自分から友達と仲よく楽しく走・跳の基本的な運動をしたり、場や用具の安全に気を付けたりしようとする。

評価規準　※(1)知識及び技能　(2)思考力、判断力、表現力等　(3)主体的に学習に取り組む態度

（１）走・跳の基本的な運動の楽しさを感じ、その行い方を知り、基本的な動きを身に付けている。
（２）走・跳の基本的な運動の楽しみ方を工夫するとともに、考えたことや気付いたことなどを他者に伝えている。
（３）きまりを守り、自分から友達と仲よく楽しく走・跳の基本的な運動をしたり、場や用具の安全に気を付けたりしようとしている。

※生徒の実態に応じて、中学部２段階の内容を扱う生徒でも、中学部１段階や小学部３段階の内容も参考にすることもある。同様に、中学部１段階の内容を扱う生徒で、小学部３段階の内容も参考にする。

（対象生徒の個別の指導目標）

生徒名	実態	目標
H男２さん	（１）長距離走のポイントについての動画を見て、教師とやり取りすることで、走るときの歩幅を小さくする、腕を振る、一定の速さで走るなどの走り方のコツを知ることができた。	（１）小型ハードル走の楽しさや喜びに触れ、小型ハードルの越え方など、基本的な体の動かし方が分かり、走り続けながら小型ハードルを走り越えることができる。
	（２）５０メートル走では、動画を見ながら自分の動きを確認した。動画の動きを模倣した教師を見て「ちがう。もっとこう。」と言いながら腕を大きく振り、自分の頑張ることを考え、伝えながら運動することができた。	（２）小型ハードル走での自分の課題を見付け、その解決のためにどのように体を動かしたら良いか考えたり、工夫したりしたことを教師や友達に伝えることができる。
	（３）長距離走では、ゆっくり同じペースで走ることを確認してから走り始めるようにした。まだ、一定のペースで持続して走ることは難しいが、友達と一緒に走り始め、時間いっぱい走ろうとした。	（３）小型ハードル走に進んで取り組み、用具の準備や片付けを友達と一緒に行ったり、小型ハードルを走り越えてゴールまで走り切ろうとしたりする。

◇　どのように学ぶか（単元における主体的・対話的で深い学びの視点）

（関連項目・下線部：ＩＣＴ）

主体的な学び	・単元の中で小型ハードル走のタイムを測定したり、単元の最終日に発表会を設定したりすることで、単元を通して、小型ハードル走への興味や関心を持ちながら学習に取り組む。 ・異なる高さの小型ハードルを複数設定することで、自分に合った高さを見付けて、積極的に運動に取り組めるようにする。
対話的な学び	・小型ハードルを走り越える際の自分や友達の動きを見合うことで、体の動かし方の違いについて互いの気付いたことを発表し合ったり、自分の動きの改善につなげたりする。 ・小型ハードルを走り越える動きをタブレットで撮影した動画を見ることで、自分の動きや友達の動きを見て、自分と友達の走り方の違いに気付き、自分の走り方の改善につなげられるようにする。
深い学び	・走る基本的な動きを身に付けることで、日常の運動場面などと学習を結び付けて生活に生かそうとする。 ・走る運動を通して、運動の楽しさや喜びを体験し、 運動に関心を持ち、「する・みる・支える・知る」などの多様な関わり方を見いだそうとする。

◇　単元計画

教時	月日（曜日）	学習活動	評価計画
1	５／２２（月） 〈グラウンド〉	・４０メートル走をする。 ・４０メートル小型ハードル走をする。 ・走って気付いたことを伝え合う。	（３）
2	５／２４（水） 〈中庭〉	・前時よりも高い小型ハードルを走り越える。 ・気付いたことを伝え合う。	（１）
3	５／２９（月） 〈中庭〉	・前時の振り返りを思い出し、生徒の課題について解決方法を考える。 ・共有したポイントを基に、様々な高さの小型ハードルを走り越える練習をする。	（１） （２）
4	５／３１（水） 〈グラウンド〉	・自分で選んだハードルの高さで４０メートル小型ハードル走をする。	（１）
5	６／２（金） 〈教室〉	・２グループに分かれて前回走った際の動画を見る。 ・自分や友達の走りを見たり、各自の気付いたポイントを伝え合ったりして、より速く走るための自分の課題を考えて練習する。	（１） （２）
6 7 8	６／５（月） ６／７（水） ６／９（金）	・前時に考えた自分の課題をもとに、小型ハードル走に取り組む。	（１） （２）
9	６／１２（月） 本時〈体育館〉	・これまでの学習の成果のまとめとして、小型ハードル走の発表会を行う。	（２） （３）

◇　本時

対象生徒の単元目標

知識及び技能	・小型ハードル走の楽しさや喜びに触れ、小型ハードルの越え方など、基本的な体の動かし方が分かり、止まらずに小型ハードルを走り越えることができる。
思考力、判断力、表現力等	・小型ハードル走での自分の課題を見付け、その解決のためにどのように体を動かしたら良いか考えたり、工夫したりしたことを教師や友達に伝えることができる。
学びに向かう力、人間性等	・小型ハードル走に進んで取り組み、用具の準備や片付けを友達と一緒に行いながら最後まで楽しく運動しようとする。

２　対象生徒について　対象生徒:H 男2さん

これまでの実態	本時の個別目標	指導・支援
・前年度の跳び箱では、教師と一緒に手の位置や足の踏み切り方を確認したりすると、「手を真ん中に付ける」と話したり、ロイター板を使って両足で跳びはねて見せたりして教師に考えたことを伝えることができた。 ・２教時目に、「小型ハードルの前で止まってしまう。」と自分の課題に気付いた。小型ハードルの高さを徐々に高くすることで、止まらずに走り越すことができるようになってきた。	・助走を付けて止まらずに小型ハードルを走り越すために、どのように足を動かせばよいか考えたり、動きや言葉で教師や友達に表現したりする。	・どのように足を動かせばよいか考えたり、工夫したりできるように、友達の考えや意見を聞く場面を設定する。 ・細かな足の動きやハードルを走り越えるイメージを表現することができるように、教師が生徒の発言や動きを見ながら、言葉を補って言語化したり、動き方の手本を示したりする。

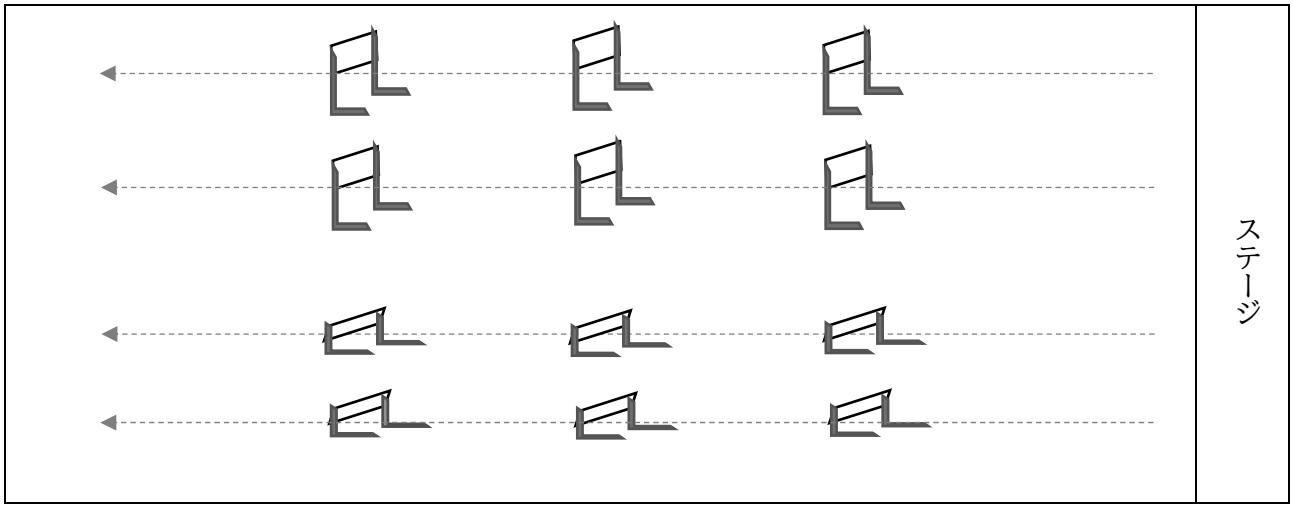
・５教時目に、グループに分かれて自分の動画を見た際には、自分や友達の動きを見る中で、「両足で跳んだ。だめ。」と発言した。教師にどのように跳べば良かったか問われると、試行錯誤して繰り返し体を動かしながら片足で踏み切って走り越えようとした。		

３　本時の学習活動

時間	学習活動	全体にかかわる指導・支援（○）、留意点（・）、評価（☆）
13:15	１　始めの挨拶をする。 ２　本時の活動についての確認をする。 ３　準備運動をする。	当番の生徒に挨拶を依頼する。 ○本時の活動の流れを確認し、自分がどのグループで活動するかの確認も行う。 ○動きがよく見えるように、Ｔ１は正面に立って体操をする。
13:25	４　グループ別練習をする。 ○全員で小型ハードルの準備をする。 ○グループごとに小型ハードル走に取り組む。	○小型ハードルを設置する位置が分かるように、レーンの端に５メートル間隔に印がつけられたロープを置く。 ○本時でどのようなことを頑張るのか、カードを見たり教師とやり取りをしたりしながら個別に目標を確認する。 ○生徒の意欲を引き出したり、自分の動きを客観的に見たりして自分の動きに反映させるために、必要に応じてタブレットで動きを撮影する。 ○生徒の思いを引き出すために、教師が生徒の発言や動きを見ながら、言葉を補って言語化したり、動き方の手本を示したりする。 ○グループごとに練習を終えた後に、本時の活動を振り返り、個別に頑張ったことや気付いたことを言葉や動きを交えて発表する。 ☆「学習活動４　グループ別練習」で、助走を付けて止まらずに小型ハードルを走り越すために、どのように足を動かせばよいか考えたり、動きや言葉で表現したりする。
13:40	５　学習のまとめをする。 ○自分の小型ハードル走の発表をする。	○発表する生徒は、スタート前に、自分の頑張りたいことや工夫するところを、教師や友達に伝えてから走る。 ○友達が小型ハードルを走り越える姿を見たり応援したりすることができるように、走る生徒以外はレーンの横に集合する。
14:00	６　後片付けをする。	○生徒同士が協力しながら片付けに取り組むことができるように、必要に応じて教師が仲介したり一緒片付けたりする
14:05	７　終わりの挨拶をする。	○手洗い、うがい、汗の始末、水分補給を促した後、当番の生徒を確認し、挨拶の役割をお願いする。

◇　場の設定

体育館



◎ハードルについて

　支柱は、牛乳パックに砂を入れて重くすることで倒れにくくしている。

　バーは、バルーンアート用の風船を使用して、恐怖心をもたず、安全に取り組むことができるようにした。

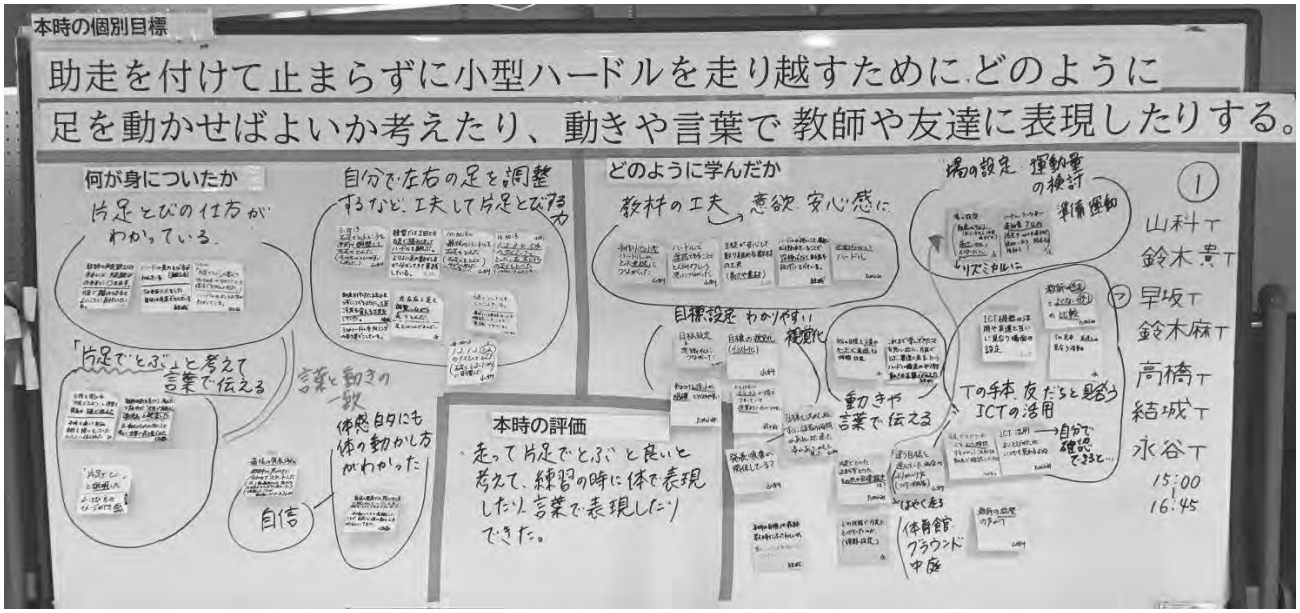
◇　本時の授業の様子

学習活動４　目標を考える場面

学習活動５　学習のまとめの発表場面

◇　事後研究会の記録

（１グループの記録）



（各グループのまとめ）

	本時の評価（対象生徒）
１グループ	・走って片足で跳ぶと良いと考え、練習の時に体で表現したり言葉で表現したりできた。
２グループ	・自分の目標や歩幅を意識するなど、今まで学んだことを出し切って走った。
３グループ	・タイミング良く片足で跳ぶ動きが感覚として身に付いた。 ・片足で跳ぶことに慣れ、片足で跳ぶことで速く走れるようにもなることに気付いて教師に伝えた。
４グループ	・片足で跳んでも「気持ちよく」跳べないことがあると感じ、「もうちょっと」という言葉で表現したり、もう一度取り組もうとしたりした。

（指導・助言）山形県教育センター　特別支援教育課　課長　古澤　智　先生

・障害物を越すことは、生徒によっては恐怖心を伴う。地面に置いた風船を跳ぶことから始め、段階的にバーの高さを設定したことにより、恐怖心の軽減、技能の向上や自信につながった。踏み切り位置に注目させることで視点が変わり、恐怖心が軽減することもある。
・前時の自分と比較し自己の伸びを実感するために、タイムを測るという方法もある。タイムが伸びない場合は改善点を考えることにつながる。タイムが下がると自己評価が低下する生徒がいるので、注意も必要である。
・生徒がどのように跳ぶかについて、「ピョン」「速く」などと教師が言語化して全体へ伝えており良かった。感覚的な動きが伝わる言語表現だった。
・ハードルの幅が狭く感じた。教材を改良し、幅を広くすることで、足がぶつかる恐怖心が薄れる。
・ハードルはリズム走という特性があるため、生徒の実態に応じて、１、２、３、４…とリズムを刻むことに取り組んでも良かったのではないか。
・ハードル走の動機付けをする際、オリンピック選手の動画など、単元の最初に完成されたイメージを提示することも有効である。主体的な学び、モチベーションにつながる。
・体育は全ての領域を取り入れると学習指導要領に記載があるが、学校行事や現場実習などがあると、体育の時数確保が難しい時期がある。そのため、年間指導計画では、２、３年サイクルで全ての領域を網羅すると考えても良い。単元に時間を掛けられることで、運動効果も期待できる。
・日常の中でハードル走の動きをすることはないが、学習を通して、運動の楽しさや面白さ、魅力を伝えてほしい。

◇　授業の評価

【どのように学んだか】

・小型ハードルの高さを徐々に高くしたり、高さを複数設定したりしたことで、自分ができそうな高さやもう少しで跳べそうな高さのハードルを選択しながら意欲的に学習に取り組むことができた。
・タブレット型端末で撮影した動画で、自分や友達が走っている姿を見ることで、走り方の違いやどうすればよりよい走り方になるか考えて、目標設定をしながら繰り返し取り組むことができた。
・小型ハードルの材料を牛乳パックとバルーンアート用の風船にしたことで、自分たちで準備や片付けをしたり、安全に小型ハードル走に取り組んだりすることができた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・前回よりも自分がどのように変わったか知るための基準として、タイムを測定するとよかった。
・ハードル走は、走る運動と跳ぶ運動が組み合わさった運動である。跳ぶ運動に関しては、これまで体育で取り扱っていないことから、走る運動・跳ぶ運動をしてからハードル走に取り組むとよかった。
・ハードル走は、リズム走であることから、自分なりのリズムを生徒自身がもつことができるように支援していくことが必要だった。

◇　対象生徒の単元における個別の指導目標の評価

目標
（1）小型ハードル走の楽しさや喜びに触れ、小型ハードルの越え方など、基本的な体の動かし方が分かり、止まらずに小型ハードルを走り越えることができる。 （2）小型ハードル走での自分の課題を見付け、その解決のためにどのように体を動かしたら良いか考えたり、工夫したりしたことを教師や友達に伝えることができる。 （3）小型ハードル走に進んで取り組み、用具の準備や片付けを友達と一緒に行いながら最後まで楽しく運動しようとする。
評価(学習の様子と評価)
（1）小型ハードル走の学習では、小型ハードルを１台だけ設置して、歩きながらまたぎ越すことから取り組み、少しずつ走るスピードやハードルの台数を多くしたことで、止まらずに小型ハードルを走り越えることができるようになった。 （2）友達の走る姿と自分の走る姿の動画を見比べる学習をしたときに、片足で踏み切って走り越えるとよいことが分かった。練習する際に、教師と一緒に片足で踏み切るときの体の動きを確認することで、片足を上げながら「こう（動かす)。」と、自分の工夫する動きを動作を交えながら教師に伝えて運動することができた。 （3）片足で踏み切って走ることができるように、納得するまで繰り返し練習する姿が見られた。練習の中で、「ちょっと違う。」、「もう少し。」などと言いながら、体の動かし方を考える姿が見られた。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・陸上運動でどんな力を身に付けたり、体験したりしてほしいかを、生徒一人一人について、実態や学習指導要領解説による例示を参考に検討した。本単元では走る動きと跳ぶ動きを関連させた動き方を身に付けたり、障害物を跳び越えながら走る楽しさを味わえるよう、小型ハードルを設定した。生徒一人一人の姿をイメージして、個別の指導目標を設定することで、目標を明確にして取り組み、目標を達成することができた。一方で、ハードル走はリズム走であること等、内容のまとまりを理解して指導内容を設定することには課題が残った。体育科だけでなく、音楽科等と教科等横断的に関連させながら学習を進めていきたい。
・柔らかい素材のハードルを作成し、ハードルの高さを複数設定したことで、自分の挑戦したい高さのハードルを選び意欲的に取り組んだり、達成感を得ながら学習したりすることができた。
・上手な友達の動きを見て、踏み切る位置やフォームを改善しようとすることができた。
・教師が手本を示したり、一人一人頑張るポイントを考えて取り組む活動を設定したりしたことで、自分の目標を達成するために、試行錯誤しながら取り組む姿が見られた。
・動画で撮影して、自分の動きを見たり、友達の動きを見比べたりしたことで、自分の目標を考えることができた。友達の走り方をまねて自分の走るフォームに取り入れたり、自分の課題に気付いて改善しようとしたりする姿が見られた。

授業実践 ④	小学部　音楽科 「はっぴょうかいをしよう」【小１段階　Ａア（イ）（ウ）㋑】

※令和４年度の授業実践のため、内容のまとまりの取り扱いや表記が他の実践例とは異なる部分があります。

授業者	早坂美紀　鈴木希菜
授業検討者	志鎌知弘　柴田雄一郎　山科友理恵　鈴木麻理奈　山口孝夫　有川夕葵 協働参画者２名

学習集団について	
・小学部１年生２名、２年生３名の計５名。指導教員は２名。	
取り扱う内容　【小１段階　Ａア（イ）（ウ）㋑】	
単元目標	（１）・音や音楽に注意を向けて気付く。（知識） ・音や音楽を感じて楽器の音を出す技能を身に付ける。（技能） （２）音や音楽遊びについての知識や技能を得たり生かしたりしながら、音や音楽を聴いて、自分なりに表す。 （３）思いに合った表現をすることに興味をもち、教師と一緒に音楽活動を楽しみながら主体的、協働的に音楽遊びの学習活動に取り組む。
評価規準	音楽【小１段階】 （１）・表現する音や音楽に気付いている。（知識） ・思いに合った表現をすることに興味をもち、音や音楽を感じて楽器の音を出す技能を身に付けている。（技能） （２）音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じとったこととの関わりについて考え、音や音楽を聴いて、自分なりに表そうとしている。 （３）思いに合った表現をすることに興味をもち、教師と一緒に音楽活動を楽しみながら主体的、協働的に音楽遊びの学習活動に取り組もうとしている。

具体的な指導内容の検討

①　取り扱う内容に関連して、児童の実態によって参考にする段階の内容を確認する。
今回の学習では、全員が小学部１段階の内容で学習を行う。

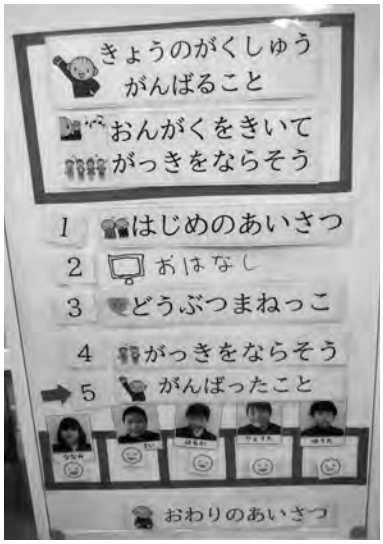
②　一人一人の具体的な指導内容を検討する。

Ａ男１さん	・様々な楽器に触れることを楽しみながら楽器を選択し、メロディーが鳴ったら楽器を鳴らして表現することを楽しむ。
Ｂ男１さん	・様々な楽器を鳴らすことを楽しみながら楽器を選択し、選んだ動物のメロディーが鳴ったら教師と一緒に楽器を鳴らして表現することを楽しむ。
Ｃ女２さん	・様々な楽器を鳴らすことを楽しみながら楽器を選択し、選んだ動物のメロディーが鳴ったら楽器を鳴らして表現することを楽しむ。
Ｄ女２さん	・様々な楽器を鳴らすことを楽しみながら楽器を選択し、選んだ動物のメロディーが鳴ったら楽器を鳴らして表現することを楽しむ。
Ｅ男２さん	・様々な楽器に触れることを楽しみながら楽器を選択し、メロディーが鳴ったら教師と一緒に楽器を鳴らして表現することを楽しむ。

③　学習活動を検討する。
・絵本「まねっこ　ぴたっ！」に出てくる動物の様々な動きを教師と一緒にまねる。
・動物をイメージした数種類のメロディーを聴きながら、動物の動きをまねて体を動かす。
・様々な楽器を鳴らして楽しさを感じながら、自分の好きな楽器を選ぶ。
・単元の後半は、動物のメロディーを聴いて楽器を鳴らして表現する。

個別の指導目標

A男１さん	（１）・メロディーに注意を向け、好きなメロディーか鳴ったことに気付く。（知識） ・メロディーを聴いて教師と一緒に楽器を鳴らすことができる。（技能） （２）教師と一緒に様々な楽器を鳴らしたことを生かして、選んだ楽器を教師と一緒に鳴らして表現する。 （３）動物のメロディーに気付いて、教師と一緒に楽器を鳴らす楽しさを感じながら、楽器演奏の活動に取り組む。
B男１さん	（１）・様々なメロディーに注意を向け、何の動物のメロディーか気付く。（知識） ・メロディーを聴いて教師と一緒に楽器を鳴らすことができる。（技能） （２）教師と一緒に様々な楽器を鳴らしたことを生かして、選んだ楽器を教師と一緒に鳴らして表現する。 （３）好きな動物のメロディーに気付いて、教師と一緒に楽器を鳴らす楽しさを感じながら、楽器演奏の活動に取り組む。
C女２さん	（１）・様々なメロディーに注意を向け、何の動物のメロディーか気付く。（知識） ・メロディーを聴いて楽器を鳴らすことができる。（技能） （２）動物のメロディーを聴いて楽器を鳴らしたことを生かして、選んだ楽器で自分なりに表現する。 （３）動物のメロディーに気付いて、教師と一緒に楽器を鳴らす楽しさを感じながら、楽器演奏の活動に取り組む。
D女２さん	（１）・様々なメロディーに注意を向け、何の動物のメロディーか気付く。（知識） ・メロディーを聴いて楽器を鳴らすことができる。（技能） （２）動物のメロディーを聴いて楽器を鳴らしたことを生かして、選んだ楽器で自分なりに表現する。 （３）動物のメロディーに気付いて、教師と一緒に楽器を鳴らす楽しさを感じながら、楽器演奏の活動に取り組む。
E男２さん	（１）・メロディーに注意を向け、好きなメロディーが鳴ったことに気付く。（知識） ・メロディーを聴いて教師と一緒に楽器を鳴らすことができる。（技能） （２）教師と一緒に様々な楽器を鳴らしたことを生かして、選んだ楽器を自由に鳴らして表現する。 （３）好きなメロディーに気付いて、教師と一緒に楽器を鳴らす楽しさを感じながら、楽器演奏の活動に取り組む。



（学習の流れと評価）

（使用した楽器）

（動物カード）

単元計画

教時	月日	学習活動	評価計画
1	１２／５（月）	・絵本「まねっこ　ぴたっ！」の読み聞かせをする。 ・動物まねっこクイズをする。教師の動きを見てまねている動物（生き物）を当てる。 ・教師の鳴らす動物のメロディーを聞く。 ・動物のメロディーを聴きながら、教師と一緒に動物（生き物）の動きをまねする。 ・いろいろな動物の動きをまねして、自分なりに体を動かす。（ぞう、ごりら、うさぎ、カエル、チーターなど。） ・教師や友達の動きを見てまねたり、自分なりに手足を動かしたりする。	（１）知
2	１２／６（火）		
3	１２／７（水）		
4	１２／８（木）	・動物まねっこクイズをする。教師や友達の動きを見てまねている動物を当てる。 ・動物の曲を聴き、いろいろな動物の動きをまねして、自分なりに体を動かす。（ぞう、ごりら、うさぎ、カエル、チーターなど。） ・様々な楽器を自由に鳴らす。 ・教師が楽器を鳴らして動物を表現する。 ・どの動物を楽器で表すか考える。	（１）技 （２）
5	１２／９（金）		
6	１２／１２（月）	・教師の鳴らす動物のメロディーを聞く。 ・動物のメロディーを聴きながら、教師と一緒に動物（生き物）の動きをまねする。 ・いろいろな動物の動きをまねして、自分なりに体を動かす。 ・教師や友達の動きを見てまねたり、自分なりに手足を動かしたりする。※タブレット型端末で動画を撮影する。 ・自分が選んだ動物を楽器で表現する。※タブレット型端末で動画を撮影する。 ・１５日、１６日は友達の演奏を聴く時間を設ける。	（２）
7	１２／１３（火）		
8	１２／１４（水）		
9	１２／１５（木）		
１０	１２／１６（金）		
１１	１２／１９（月）	・教師や友達の動きを見てまねたり、自分なりに手足を動かしたりする。 ・自分が選んだ動物を楽器で表現する。（一人ずつ前に出て行う） ・友達の演奏を聴く。	（３）
１２	１２／２０（火）		
１３	１２／２１（水）	・プレイルームで「はっぴょうかい」の流れを確認する。	
１４	１２／２２（木）	「はっぴょうかいをしよう」 ・これまで取り組んだ楽器演奏の発表会をする。（小学部の友達の前で発表する。）	（３）

毎時間の主な流れ
・手遊び
１．始めの挨拶
２．今日の学習、頑張ること
３．どうぶつまねっこがっきをならそう
４．頑張ったこと
５．終わりの挨拶

授業の様子

（教師と一緒に選んだ楽器を鳴らす様子）

（選んだ楽器を鳴らす様子）

授業の評価

【どのように学んだか】

・動物の動きに興味を持って教師や友達とまねっこすることを楽しむ児童、楽しい雰囲気の中で繰り返し続ける中で気に入った動物の動きを見つけて楽しむようになった児童がいた。
・メロディーと動物の動きをペアにして提示したことで、メロディーを聴いて動物の動きをした。
・５種類のメロディーと動物を学習したが、発表会に向けてどの児童も自分の気に入った動物、好きな動物を選ぶことができた。
・扱いやすい楽器に限定するとともに、楽器を自由に鳴らす時間を設けたことで、ほとんどの児童が様々な楽器に触れることができ、気に入った楽器を見つけ、鳴らすことができた。
・教師が、児童が選んだものと同じ楽器を鳴らすことで、真似て鳴らそうとした。
・メロディーに注目できるように音源の音量を調整することで、より音を聴こうとする児童もいた。
・繰り返すことで、動物のメロディーを聴いて、その動物の動きを楽しむ様子が見られるようになった。
・学習の流れや今日の目標を提示したことで、見通しを持って学習に臨める児童もいた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・もっとじっくり楽器に自由に触れる時間を設ける。
・個別の目標をもっと具体的な姿にする必要がある。
・音楽の楽しさや良さを活用した、場の作りや教材を考えていく。

単元における指導目標の評価（N男２さんの例）

目標
（１）・様々な曲に注意を向け、何の動物の曲か気付く。（知識） ・曲を聴いて楽器を鳴らすことができる。（技能） （２）動物の曲を聴いて楽器を鳴らしたことを生かして、選んだ楽器で自分なりに表現する。 （３）動物の曲に気付いて、教師と一緒に楽器を鳴らす楽しさを感じながら、楽器演奏の活動に取り組む。
評価(学習の様子と評価)
（１）・動物に関連する５種類の曲を聴いて何の動物の曲か当てたり、その曲を聴いて動物のまねをしたりする学習に取り組んだ。教師が「何の動物の曲でしょう？」と質問し、クイズ形式にしたことで曲に注意を向けて聴き、うさぎやカエル、チーターの曲と分かった。（知識） ・動物の曲を聴き、楽器を鳴らす学習に取り組んだ。教師が楽器の鳴らし方の手本を示したり、一緒に取り組んだりしたことで、カスタネットやギロ、ウッドブロックなどの楽器を鳴らして表現した。（技能） （２）動物の曲を聴いて、様々な楽器を鳴らす学習に繰り返し取り組んだ。動物の中からうさぎを選び、楽器は数種類の中からギロを選んだ。順番を決め、みんなの前で発表したことで、うさぎの曲に合わせて楽器を鳴らした。 （３）動物の絵カードを提示し、どの動物の曲か考えながら学習したことで、様々な動物の曲に気付いた。また、教師が隣で楽しみながら楽器を鳴らしたことで、教師と一緒に鳴らす楽しさを感じながら活動に取り組んだ。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・取り扱う内容のまとまりを基に、児童の実態やこれまでの学校生活の様子も踏まえて個別の指導目標を設定し、学習計画を検討した。前半は絵本の読み聞かせや動物まねっこなどの学習活動を設定することで、音楽に合わせて体を動かすことを楽しみながら学習するとともに、音に注意を向けることができるようになった。単元後半は、前半の学習の流れで動物を題材にして楽器を鳴らす学習を設定したことで、動物のメロディーから楽器に関心を持って自由に鳴らしたり、自分なりに動物のイメージを持って楽器で表現したりするなど、概ね個別の目標を達成することができた。一方で、表現の仕方や音楽へ気付く姿は児童一人一人で異なることから、個別の指導目標を設定する際にどのように表現してほしいかなどもっと具体的にイメージして設定する必要があると感じた。
・動物の動きをイメージしてまねたり、その動物のメロディーを聴いたりする学習を通して、音に注意を向けて聴くことができた。また、楽器に自由に触れ、思い思いに楽器を鳴らす時間も十分にとったことで、自分の気に入った楽器を選んで鳴らすなど、音楽や楽器を楽しむ姿が見られた。

授業実践 ⑤	小学部　算数科 「　ならべよう　」

授業者	鈴木希菜　山口孝夫　志鎌知弘
授業検討者	八鍬洋祐　早坂美紀　藤本沙織 協働参画者２名

学習集団について	
・小学部２組（３年生３名　４年生２名）の５名。指導教員は３名。	
取り扱う内容　【小学部　２段階　Aア（ア）㋕】	
単元目標	（１）数の系列が分かり、順序や位置を表すのに数を用いることができる。 （２）数詞と数字、ものとの関係に着目し、数の数え方や数の大きさの比べ方、表し方について考え、それらを学習や生活で興味をもって生かすことができる。 （３）数量に関心をもち、算数で学んだことの楽しさやよさを感じながら興味をもって学ぼうとすることができる。
評価規準	算数【小学部２段階】 （１）数の系列が分かり、順序や位置を表すのに数を用いている。 （２）数詞と数字、ものとの関係に着目し、数の数え方や数の大きさの比べ方、表し方について考え、それらを学習や生活で興味をもって生かしている。 （３）数量に関心をもち、算数で学んだことの楽しさやよさを感じながら興味をもって学ぼうとしている。

具体的な指導内容の検討

①　取り扱う内容に関連して、児童の実態によって参考にする段階の内容を確認する。
今回の学習では、全員が小学部２段階の内容で学習を行う。

②　一人一人の具体的な指導内容を検討する。

Ｆ女３さん	・何番目と、何個の違いが分かって、言葉で答える。 ・自分の欲しいものを「○番目」「○個」で表現する。 ・指示された場所に物を置く、座る。
Ｇ女３さん	・何番目と、何個の違いが分かって、言葉で答える。 ・自分の欲しいものを「○番目」「○個」で表現する。 ・指示された場所に物を置く、座る。
Ｈ男３さん	・手掛かりを基に、指示された場所に物を置く、座る。 ・集合数の理解「○個ちょうだい。」
Ｉ男４さん	・手掛かりを基に、指示された場所に物を置く、座る。 ・集合数の理解「○個ちょうだい。」
Ｊ男４さん	・何番目と、何個の違いが分かって、言葉で答える。 ・指示された場所に物を置く、座る。

③　学習活動を検討する。

・導入でイラストを見ながらお話を聞いたり、手掛かりを基に順番や位置を考えたりする。
・バスを想定した活動では、数字や数詞を見聞きし順番や位置を考え、１列に並んだ座席に座ったり、立ったりする。
・お店屋さんの活動では、小グループに分かれ、自分の欲しいものを「○番目」「○個」で表現して注文したり、それを見聞きし具体物を操作したりする。
・単元の後半では、授業のはじめに個別にプリントや具体物を使って前時の学習を振り返る。

個別の指導目標

Ｆ女３さん	（１）数を使ったものの位置や順番の表し方を知り、ものの数を表す表現との違いに気付き、順序や位置を見聞きして並んだり、手に取ったりする。 （２）「○番目」という表現に着目し、ものの位置を表す方法を考え、数詞や数字を使って表現する。 （３）数を用いてものの位置や場所を表現する良さを感じ、自分から数詞や数字を使った表現で教師とやり取りしようとする。
Ｇ女３さん	（１）数を使ったものの位置や順番の表し方を知り、指示された場所に並んだり、手に取ったりする。 （２）「○番目」という表現に着目し、伝えたい事柄に応じて、表現の仕方を考える。 （３）数を用いてものの位置や場所を表現する良さを感じ、自分から順序や位置について気付いたことを教師に伝えようとする。
Ｈ男３さん	（１）数がものの位置や順番を表すことに気付き、数字や数詞を手掛かりに物を取る。 （２）数とものの位置や順番との関係に着目し、物の位置を数を使って表す。 （３）数が位置や順番を表すことの良さを感じ、自分からもの位置を数を使って表そうとする。
Ｉ男４さん	（１）数がものの位置や順番を表すことに気付き、数字や数詞を手掛かりに物を取る。 （２）数とものの位置や順番との関係に着目し、物の位置を数を使って表す。 （３）数が位置や順番を表すことの良さを感じ、自分からもの位置を数を使って表そうとする。
Ｊ男４さん	（１）数を使ったものの位置の表し方を知り、指示された場所に並んだり、手に取ったりする。 （２）「○番目」という表現に着目し、伝えたい事柄に応じて、表現の仕方を考え、数詞や数字を使って表現する。 （３）数を用いてものの位置や場所を表現する面白さを感じ、自分から伝えたいことを数詞や数字を使って伝える方法を考えて活動しようとする。

単元計画

教時	月日	学習活動	評価計画
1 2	７／３ （月） ７／４ （火）	みよう・きこう ・バスのお話を見聞きし、登場人物の人数やものの数、その順番を考え、順序数に触れる。【主】 かいものをしよう ・教師の活動の手本を見聞きし、「○個」（集合数）の意味を確認するとともに、活動の仕方を知る。 ・「○個」という表現で、お客さんから注文されたものの数分だけ手に取る。【主】	（１）
3	７／５ （水）	みよう・きこう ・バスのお話を見聞きし、登場人物の人数やものの数、その順番を考え、順序数に触れる。【主】 かいものをしよう ・並んでいる商品を見て、今までのお店屋さんと違いを考える。 ・教師の活動の手本を見聞きし、気付いたことを伝え合うことで、「○番目」（順序数）の意味を知るとともに、今までの「○個」という表現との違いに気付く。 ・並んでいるものを数え、「○番目」という表現でお客さんから注文されたものを手に取る。	（１）
4	７／６ （木）		（２）

5	7／11 （火）	みよう・きこう ・バスのお話を見聞きし、登場人物の人数やものの数、その順番を考える。【主】 ばすにのって ・切符に書かれた数字を見て、座席を数えて座る。 ・「バスにのってゲーム」をして、座席や友達の順序を数える。【主】 かいものをしよう ・２～３人のグループに分かれて、数字カードを選んだり、数字を書いたりしながら、欲しいものの位置を数字や数詞を使って表現する。【対】【深】 ・お客さんの注文を見聞きし、注文されたものを手に取る。 ばすにのって ・切符に書かれた数字を見て、座席を数えて座る。 ・「バスにのってゲーム」をして、座席や友達の順序を数える。【主】 ※児童が自分から順序や位置を考えて活動できるよう、ストーリーの中で、体を動かして並ぶ機会を多く設定する。【主】	（1）
6	7／12 （水）		（2）
7	7／13 （木）		（2）
8	7／14 （金）	やってみよう ・前時の学習を振り返ったり、確認したし、本時の学習につなげる。【主】 みよう・きこう ・バスのお話を見聞きし、登場人物の人数やものの数、その順番を考え、具体物を操作する。 ばすにのって ・切符に書かれた数字を見て、座席を数えて座る。 ・「バスにのってゲーム」をして、座席や友達の順序を数える。【主】 かいものをしよう ・２～３人のグループに分かれて、数字カードを選んだり、数字を書いたりしながら、欲しいものの位置を数詞や数字を使って表現する。【対】【深】 ・お客さんの注文を見聞きし、注文された物を手に取る。 ばすにのって ・切符に書かれた数字を見て、座席を数えて座る。 ・「バスにのってゲーム」をして、座席や友達の順序を数える。【主】 ※児童が自分から順序や位置を考えて活動できるよう、ストーリーの中で、体を動かして並ぶ機会を多く設定する。【主】	（2）
9	7／15 （土）		（3）
10	7／18 （火）		（1）
11	7／19 （水）		（2）
12	7／20 （木）		（3）

授業の様子

（「バスのおはなし」で使用した教材）

①　　②　　③

（①　数字を見て順番に座っている様子）
（②　○番目、○個の表現を使って自分の欲しいものを伝える様子）
（③　○番目、○個の表現の違いを考えイラストを選ぶ様子）

授業の評価

【どのように学んだか】

・生活場面を想定した体験的な活動を複数行うことで、児童が主体的に学習した。
・児童にとって興味関心のある題材や教材により、すすんで学習しようとした。
・児童や場面に応じ、教材を通した教師の発問を工夫することで、既習の知識を関連付けながら学習した。
・授業の始めに前時の振り返りを個別に行うことで、学習内容の理解を深めることにつながった。
・実態や学習のペースに合わせ、グループに分かれて学習したことで、個別の目標の達成には近付けたが、教師とのやり取りが多くなってしまった。児童同士の対話的な学びを促す活動や、児童の新たな考えに気付くきっかけを作る教師の言葉掛けが必要である。
・実態に応じ、位置や方向を表すときに使う右、左、上、下などの言葉に触れながら活動したが、児童が位置や方向を理解し言葉を使うには、他領域との関連や、時数を多く設定することが必要だった。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・右、左、上、下など位置を表すときに使う言葉の学習との関連も検討する。
・本単元で扱わなかった内容をいつ扱うかの計画の検討をする。
・対話的な学びを促す、ＴＴの役割を検討する。

単元における個別の指導目標の評価（G女３さんの例）

目標
（１）数を使ったものの位置や順番の表し方を知り、指示された場所に並んだり、手に取ったりする。 （２）「〇番目」という表現に着目し、伝えたい事柄に応じて、表現の仕方を考える。 （３）数を用いてものの位置や場所を表現する良さを感じ、自分から順序や位置について気付いたことを教師に伝えようとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）「バスのおはなし」を見聞きし、数字や数詞を使ったものの位置や順番の表し方を知った。数字を見たり、数詞を見聞きし、前から順番に並んで座ったり、パンのイラストを手に取ることができた。 （２）お店屋さんで買い物をする活動では、並んでいるパンのイラストを見ながら教師とやり取りし、「(全部で）〇個（欲しい)。」、「〇番目（のパンが欲しい)。」などと自分が欲しいものに応じて表現の仕方を考えて、使い分けて伝えることができた。 （３）様々な生活場面を想定した体験的な活動をする中で、数を用いてものの位置や場所を表現する良さや面白さを感じ、日常生活の中でも「〇番目」の表現に触れると、それが表す位置や場所を考えたり、自分から順序や位置について気付いたことを数詞を使って表現したりしようとした。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・児童一人一人の学習内容の習得状況を踏まえて個別の指導目標を設定し、興味・関心や生活経験などを踏まえて学習活動を検討することで、ストーリー性があり、かつ実際の生活場面に即した学習活動の設定につながった。生活場面に即しながら体験的な学習活動を繰り返す中で、数を見聞きし順番に並んだり、商品の位置を数で表現したりするなど、各自の個別の目標を概ね達成することができた。また、生活の中でも、一列に並んで移動するときに自分は「〇番目」なのかを考えて並ぶなど、学習したことを生かす姿が見られた。
・本単元では、年間指導計画をもとに全１１教時での学習計画を設定したが、「右から〇番目。左から〇番目。」などの方向を基準に順番や位置を考えたり、「前から〇個。」など順序数と集合数を同時に活用したりする学習も必要であることから、年間指導計画を検討する際に、取り扱う内容についてよく理解し、その内容の指導に必要な時数まで考える必要があると感じた。

授業実践 ⑥	小学部　体育科 「はしろう　とぼう」

授業者	志鎌知弘　鈴木希菜　山口孝夫　鈴木麻理奈　八鍬洋祐　近藤真知子
授業検討者	足原純子　鈴木麻理奈　高橋京子

学習集団について

・小学部２組５名（３年生３名　４年生２名）と小学部３組６名（５年生３名　６年生３名）。指導教員は６名。

取り扱う内容　【小学部２段階Ｃ、小学部３段階Ｃ】

単元目標	体育【小学部２段階】　※小学部３年生、４年生 （１）教師の支援を受けながら、楽しく走・跳の基本的な運動をすることができる。 （２）走・跳の基本的な運動に慣れ、その楽しさや感じたことを表現することができる。 （３）簡単なきまりを守り、友達とともに安全に楽しく、走・跳の基本的な運動をしようとすることができる。 体育【小学部３段階】　※小学部５年生、６年生 （１）走・跳の基本的な運動の楽しさを感じ、その行い方を知り、基本的な動きを身に付ける。 （２）走・跳の基本的な運動の楽しみ方を工夫しているとともに、考えたことや気付いたことなどを他者に伝えることができる。 （３）きまりを守り、自分から友達と仲よく楽しく走・跳の基本的な運動をしたり、場や用具の安全に気を付けたりしようとすることができる。
評価規準	体育【小学部２段階】 （１）教師の支援を受けながら、楽しく走・跳の基本的な運動をしている。 （２）走・跳の基本的な運動に慣れ、その楽しさや感じたことを表現している。 （３）簡単なきまりを守り、友達とともに安全に楽しく、走・跳の基本的な運動をしようとしている。 体育【小学部３段階】 （１）走・跳の基本的な運動の楽しさを感じ、その行い方を知り、基本的な動きを身に付けている。 （２）走・跳の基本的な運動の楽しみ方を工夫しているとともに、考えたことや気付いたことなどを他者に伝えている。 （３）きまりを守り、自分から友達と仲よく楽しく走・跳の基本的な運動をしたり、場や用具の安全に気を付けたりしようとしている。

具体的な指導内容の検討

①　取り扱う内容に関連して、生徒の実態によって参考にする段階の内容を確認する。
今回は、小学部２組児童は小学部２段階の内容を、小学部３組児童は小学部３段階の内容で学習を行う。

②　一人一人の具体的な指導内容を検討する。
※　人数が多いため、各学級２名ずつの例を記載。

Ｈ男３さん	・長い距離を走る。（ゴールを意識して、一定の距離を走り続ける。） ・片足ふみきりで跳ぶ。
Ｊ男４さん	・長い距離を走る。 ・走り方を知る（自分で速く走れる走り方を知る）。 ・勢いを付けて遠くに跳ぶ。
Ｍ女５さん	・スタートが分かって、ゴールまで走る。 ・ケンパー跳びができる。
Ｐ男６さん	・走る姿勢を意識して走る。（腕の振り方、足の出し方） ・両足ふみきりで跳ぶ。

③　学習活動を検討する。
・実態から走る動きと跳ぶ動きを焦点化するために、活動を明確にして構成する。
・児童のイメージから競争にならないように、ピッチをゆっくりにした音楽を流し一定のペースで走ることができるようにする。
・時間や距離を把握しやすいように、タイマーを用いたり教師がペースを設定して走って周回数を伝えたりする。
・跳ぶ動きでは、体の動かし方を意識しやすいように、ビデオ撮影をしてスロー再生ですぐに振り返る。
・個々の実態に応じた動きができるよう、撮影するときにその動きができるようにする。（連続跳びや助走を付けた跳び方など）
・友達となかよく楽しく基本的な運動ができるよう、ペアでの運動やグループごと、発表の場面、駅伝の活動を設定する。

個別の指導目標

※　各学級２名ずつの例を記載。

Ｈ男３さん	（１）ゴールを意識して一定の距離を走り続けたり、片足で踏み切って前方や上方に跳んだりする。 （２）走ったり跳んだりすることを通して感じたことを表す。 （３）走る順番やルールなどを守り、友達と安全に運動しようとする。
Ｊ男４さん	（１）ゴールを意識して一定の距離を走り続けたり、低い障害物を跳び越えたりする。 （２）走ったり跳んだりすることを通して感じたことを表す。 （３）走る順番やルールなどを守り、友達と安全に運動しようとする。
Ｍ女５さん	（１）走る合図や終わりが分かって一定の距離を教師と一緒に楽しく走ったり、連続で前方に跳んだりする。 （２）走ったり跳んだりする運動に慣れ、楽しさや感じたことを教師に伝える。 （３）走る方向や順番などを守りながら、教師や友達と安全に運動しようとする。
Ｐ男６さん	（１）走る姿勢を意識して、教師と同じペースで長い距離を走りきったり、両足ジャンプで前方や上方に跳んだりする。 （２）走ったり跳んだりすることを通して感じた運動の楽しさを表したり、走り方や跳び方で工夫したことを教師に伝えたりする。 （３）走る順番やルールなどを守り、友達と安全に運動しようとする。

単元計画

教時	月日	学習活動	評価計画
1	６／１ （木）	ラジオ体操 補強運動 ・片足・両足跳び（上方・前方）、障害物またぎ、跳び越す動き。 ３分間走 ・一定の速さでゆっくり歩いたときと、走ったときの自分の動きや疲れ具合の違いを体験する。【主・深】 ジャンプ ・片足ジャンプ、両足ジャンプで上方、前方に跳ぶ。 振り返り、話し合い ・時間いっぱい走り続けるにはどうしたらよいか、より前に、高く跳ぶにはどうしたらよいかを話し合い、巧みな体の動かし方を身に付ける。【主・深】	（２）
2	６／６ （火）		（１）
3	６／７ （水）		（２） （３）

4	６／１４ （水）	ラジオ体操 補強運動 ・片足・両足跳び（上方・前方）、ペアでのストレッチ。 ３分間走 ・一定の速さで走ることで疲れずに走れることを体験する。【主・深】 ・一定の速さ（ペース）を意識して走る。 跳ぶ ・上方、前方に跳ぶ。※跳ぶ様子を動画で撮る。 見合う ・跳ぶときにどのような体の動かし方かを見合ったり、工夫した点を発表し合ったりして、その動きを試してみる。【対・深】 ☆２７日は跳ぶ動きの発表会を行う。 より前に、高く跳べるように工夫した点を発表し、実演する。 ラジオ体操 駅伝 ・一定の速さ（ペース）を意識して走る。【対】 ・児童の走力に応じて、距離を設定する。（１５０m～３００m） 振り返り ・感想を発表し合うとともに、運動する心地よさを共有する。【深】	（２）
5	６／１５ （木）		（１）
6	６／２２ （木）		（２） （３）
7	６／２７ （火）		（２）
8	６／２８ （水）		（２）
9	６／２９ （木）		（３）

授業の様子

①　②　③　④

（①　動きで使う部位を意識した準備運動）　（②　ペースメーカー役の教師について走る様子）
（③　友達と動きを合わせて跳ぶ様子）　（④　自分の跳ぶ姿を確認する様子）

授業の評価

【どのように学んだか】

・最初は走る＝競走（短距離）というイメージをもっており、長い距離（時間）を走ると途中で座り込む児童が多く見られたが、「①走る時間を音楽で示しながら３分間歩く、②ゆっくりと疲れないくらいの速さで走る」という学習に取り組んだことで、約３分間止まらずに走り続けることができる児童の姿が多く見られた。走り終わった後には心地よい疲労感を伝える児童の姿も見られた。

・両足跳びではなく片足跳びになったり、連続跳びが難しかったりして苦手意識を持っている児童がいたが、「①学級集団で楽しい雰囲気で跳ぶ、②ＩＣＴ機器を活用して動画を撮影し、スロー再生ですぐに自分や友達の動き（足や腕）を確認する、③即時に振り返って自己評価や他者からの称賛を得られるようにする」ことで、友達や自分の動きから腕の振りや膝の曲げ方などの体の使い方に気付き、両足踏み切りで跳んだり、連続で跳んだりできるようになった児童の姿が多く見られた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・運動を苦手と感じている児童への支援の工夫について。
　→今回は勝敗にこだわらないようにしたこと、学級集団や友達との活動、ＩＣＴの活用を取り入れたことが有効だった。

・実態差のある集団に配慮した指導法について。
　→取り扱う学習内容による学習集団、体の使い方がぎこちない児童への支援についての検討が必要。

・自己の学びを実感する手立てについて。
　→メタ認知が難しい（小学部段階の児童）場合に、どのように支援するとよいかの検討が必要。

単元における個別の指導目標の評価（Ｊ男４さん、Ｐ男６さんの例）

J男4さん

目標
（１）一定の距離を走り続けたり、両足で踏み切って前方や上方に跳んだりする。 （２）走ったり跳んだりすることを通して感じたことを表す。 （３）走るコースを守ったり合図を聞いて走ったり、楽しく運動しようとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）３分間走では、体育館をゆっくり周回するペース走を行った。ペースメーカー役の教師の後ろを走ったり、ゆっくりとした音楽に合わせてゆっくりのペースで走ったりし、約３分間歩かずに走り続けることができた。また、動画を見て自分の跳び方を振り返り、手の振り方に気付くと、より遠くへ、高く跳べるように手を振って跳んだ。 （２）ゆっくり走ると疲れにくいことに気付き、一定のペースで走るようになった。また、走った後に感想を聞かれると、疲れていないことを、手を挙げて伝えた。 （３）単元の始めはスタートすると勢いよく走ったりコースを短く走ったりすることが多かったが、コースを守って一定のペースで走るようになった。

P男6さん

目標
（１）走る姿勢を意識して、教師と同じペースで長い距離を走りきったり、両足ジャンプで前方や上方に跳んだりする。 （２）走ったり跳んだりすることを通して感じた運動の楽しさを表したり、走り方や跳び方で工夫したことを教師に伝えたりする。 （３）走る順番やルールなどを守り、友達と安全に運動しようとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）走る運動では、教師のアドバイスを受け入れて背筋を伸ばしたり地面に踵を着いて走ることを意識したりして走るようになった。一定のペースで走ることで長い距離を走れることが分かり、教師と同じペースで３分間走りきることができた。また、繰り返し跳ぶ活動に取り組む中で両足で踏み切る感覚をつかみ、両足で踏み切って前方や上方に跳ぶことができるようになった。 （２）走る運動で決まった時間を走りきった達成感や、新たに両足で踏み切って跳ぶことができるようになった喜びを表情で表した。また、運動の様子を動画で撮って振り返ることで、友達や教師の様子を真似て腕を振り上げて跳ぶなど、工夫しながら運動した。その本人の動きを「腕を上げるといいんだね。」などと教師が言葉で表現することで、「そうだよ。腕を上げたよ。」と言って工夫したことを教師に伝えた。 （３）走る運動では、駅伝を行った。自分達で決めた走る順番を意識し、自分の番になるとリレーゾーンに出てきたり、友達とぶつからないように周囲の様子を確認しながら運動したりする様子が見られた。また、走る運動ではこれまでよりも長い時間、長い距離を走ることができるようになったことや、跳ぶ活動では両足で跳ぶことができるようになったことに達成感を感じ、「もっと高く跳べるようになりたい。」などさらなる意欲をもつ姿が見られた。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・２学級（４学年）合同の学習であったが、それぞれの学級において取り扱う内容のまとまりを確認し、その内容のまとまりを基に各児童の実態も踏まえた個別の指導目標を設定した。そのため、学習活動によっては全体で行ったり、場を分けて行ったりしたことで、同じ学習活動ではあるが、一定の速度で走る、その場で跳ぶ、連続して跳ぶなどの各自の指導目標を達成することができた。

・取り扱う内容の段階が異なる集団ではあったが、合同で学習することで集団での運動の楽しさを感じたり、その中でお互いに刺激を受けて自分も「やってみたい」、「できるようになりたい」という意欲につながる姿が見られたりした。

・学習活動では、教師と一緒に走ったり音楽を手掛かりにしたりして一定のペースで走る中で、速いペースで走ると疲れることに気付いて、ペースを意識して走る児童の姿が見られた。また、ジャンプする様子を動画で撮影し、スロー再生で即時に振り返るようにすることで、自分や友達の体の動きを見てどのように動かしたらよいか考えて試してみる姿につながった。その中で、両足跳びができるようになったことに自信を持ち、繰り返し両足跳びをして楽しさを表した。

授業実践 ⑦	中学部　音楽科 「音楽で世界を旅しよう～日本編～」

※令和４年度の授業実践となるため、内容のまとまりの取り扱いや表記が他の実践例とは異なる部分があります。

授業者	小山友子　加藤ちひろ　渡辺一恵　足原純子　近藤真知子
授業検討者	石山秋子　足原純子　　協動参画者３名

学習集団について	
・中学部１年生６名、２年生５名、３年生６名の計１７名。指導教員は５名。	
取り扱う内容	
単元目標	【中２段階】知・技　Ａウ（イ）㋐㋑（ウ）㋑　　思・判・表　Ａウ（ア）㋑ （１）・いろいろな音の響きやその組み合わせの特徴を理解する。（知識①） ・リズム・パターンのつなぎ方や重ね方の特徴を理解する。（知識②） ・発想を生かした表現、思いや意図に合った表現をするために必要な、音楽の仕組みを生かして、音楽をつくる技能を身に付ける。（技能） （２）音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、音を音楽へと構成することについて思いや意図をもつ。 （３）主体的に楽しく音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、音楽づくりの学習活動に取り組もうとする。 【中１段階】知・技　Ａウ（イ）㋐㋑（ウ）㋐　　思・判・表　Ａウ（ア）㋑ （１）・いろいろな音の響きの特徴に気付く。（知識①） ・リズム・パターンのつなぎ方の特徴に気付く。（知識②） ・発想を生かした表現にするために、設定した条件に基づいて、音を選択したり組合わせたりして表現する技能を身に付けている。（技能） （２）音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、音を音楽へと構成することについて思いや意図をもつ。 （３）進んで音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、音楽づくりの学習活動に取り組もうとする。 【小３段階】知・技　Ａウ（イ）㋑（ウ）㋐　　思・判・表　Ａウ（ア）㋑ （１）・簡単なリズム・パターンの特徴に気付く。 ・気付きや発想を生かした表現をするために必要な、音を選んだりつなげたりして表現する技能を身に付ける。 （２）音楽を形づくっている要素を聞き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聞き取ったことと感じ取ったことの関わりについて考え、どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつ。 （３）音や音楽に楽しく関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、音楽づくりの学習活動に取り組もうとする。
評価規準	【中２段階】 （１）・いろいろな音の響きやその組み合わせの特徴を理解している。（知識①） ・リズム・パターンのつなぎ方や重ね方の特徴を理解している。（知識②） ・発想を生かした表現、思いや意図に合った表現をするために必要な、音楽の仕組みを生かして、音楽をつくる技能を身に付けている。（技能） （２）音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、音を音楽へと構成することについて思いや意図を持っている。 （３）主体的に楽しく音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、音楽づくりの学習活動に取り組もうとしている。 【中１段階】 （１）・いろいろな音の響きの特徴に気付いている。（知識①） ・リズム・パターンのつなぎ方の特徴に気付いている。（知識②）

	・発想を生かした表現にするために、設定した条件に基づいて、音を選択したり組合わせたりして表現する技能を身に付けている。（技能） （２）音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、音を音楽へと構成することについて思いや意図を持っている。 （３）進んで音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じながら、音楽づくりの学習活動に取り組もうとしている。 【小３段階】 （１）・簡単なリズム・パターンの特徴に気付いている。（知識） ・気付きや発想を生かした表現をするために必要な、音を選んだりつなげたりして表現する技能を身に付けている。（技能） （２）音楽を形づくっている要素を聞き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聞き取ったことと感じ取ったことの関わりについて考え、どのように音を音楽にしていくかについて思いをもっている。 （３）音や音楽に楽しく関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、音楽づくりの学習活動に取り組もうとしている。

具体的な指導内容の検討

① 取り扱う内容に関連して、生徒の実態によって取り扱う段階の内容を確認する。

② 一人一人の具体的な指導内容を検討する。※２名の例を記載。

Ｆ女１さん （中１段階）	・太鼓を打つ位置や打ち方によって音の響きが違うことに気付くとともに、自分の好きな音やリズム・パターンを選んだりつなげたりして音楽をつくって表現する。
Ｍ女３さん （中２段階）	・太鼓のいろいろな音の響きやリズム・パターンの特徴を理解し、音をつないだり重ねたりしながら音楽をつくったり、音楽を形づくっている要素の面白さを感じながら友達と協同してよりよい音楽をつくって表現したりする。

③ 学習活動を検討する。

・リズム・パターンについて教師の手本やカードを見て打つことを繰り返し、音の特徴を捉える。
・教師の手本を見聞きすることで、リズム・パターンのつなぎ方によって音の印象が変わることやその面白さに気付き、自分で好きなリズム・パターンを選んでつなぎ、音楽をつくる。
・友達とリズム・パターンをつなげたり、音楽の要素を取り入れたりしながらお囃子をつくる。
・それぞれのグループのお囃子の発表会を行う。

個別の指導目標（Ｍ女３さんの例）

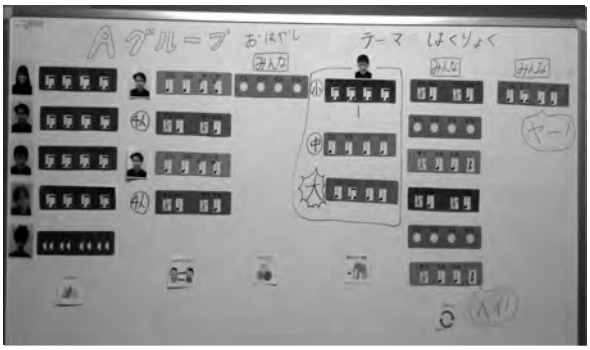
M女3さん	(1)・太鼓を打つ部位や打ち方の違いによって音の響きが変わることや、違う音の響きを組み合わせることのよさや面白さを理解する。（知識①） ・自分や友達が表現した、リズム・パターンのつなぎ方や重ね方のよさや面白さを理解する。（知識②） ・自分がつくりたいおはやしにするために、リズム・パターンのつなぎ方や重ね方を表現する技能を身に付ける。（技能） (2) 自分の思いと音楽の仕組み（反復、呼びかけとこたえ、変化）を関連付けて考え、リズム・パターンのつなぎ方や重ね方を工夫して表現する。 (3) 進んで太鼓の音の響きやいろいろなリズム・パターンに関わり、友達と音をつなげたり重ねたりしておはやしを演奏する楽しさを感じながら、音楽づくりに取り組もうとする。

単元計画

教時	月日	学習活動	評価計画
1	1／17 （火）	○音楽で世界を旅しよう～日本編～ ・日本の楽器の音色を聴こう（こと、尺八、太鼓） 映像を見たり、実際に太鼓の音色を聴いたりすることで、日本の楽器に興味をもち、その音色のよさや美しさに気付く。 ・太鼓のばちをつくる。	(1)知①

2	1／19 （木）	○太鼓のリズムとパターンを感じよう（全体での活動） ・教師の演奏（複数のおはやしの演奏）を聴く。 リズムやパターンについて、分かりやすい音にのせたり、視覚で表したりすることで、リズムやパターンについて気付く。 ＜口唱歌（例）＞ 『すっとん　すっとん』『すっとんとん』『どんどん　カッカ』 など ・自分で作ったばちを使い、全体で一つ一つのリズムを打って確認する。 また、太鼓の種類や素材、たたく位置によって音が違うことを感じ取る。	(1)知① (1)知②
3	1／24 （火）	○オリジナルのおはやしをつくろう（グループ毎の活動） ・A、B、Cの3グループに分かれ、リズムカードを並べたり組み変えたり、音を出したりしながら一人一人がオリジナルのおはやしをつくる。【主】 ＜リズム・パターンの例＞ すっとん　すっとん＿すっとんとん＿どんどんどんどん＿どんどんカッカ ・生徒の実態によっては、つくる音楽の長さ等の条件に合わせて音楽をつくったり、教師とのやりとりを介して教師と一緒に音楽をつくったりする。 ・つくったおはやしをグループ内で一人一人発表する。発表を聴き、友達がつくったおはやしの良さや面白さを伝え合う。【対】	(1)技 (2)
4	1／26 （木）	○グループのおはやしをつくろう①（グループ毎の活動） ・前時の学習を振り返り、面白いと感じたリズム・パターンを取り入れながら、グループのみんなでリズムカードを並べたり組み変えたり、音を出したりしながらグループのおはやしをつくる。【対】【深】 ・練習している様子を ICT 機器で撮影し、自分たちの演奏の様子を動画で振り返る。 ・全体で発表会をすることを知る。	(1)技 (2)
5	1／31 （火）	○グループのおはやしをつくろう②（グループ毎の活動） ・前時で撮影した演奏をみて、自分たちの演奏の様子を動画で振り返ったり、発表会に向けて練習を重ねたりする。【深】	(2) (3)
6	2／2 （木）	○発表しよう（グループ毎練習→全体で発表） ・体育担当の先生方などを招待して学習の成果を披露する。	(3)

授業の様子



（生徒がつくったおはやしと発表会に向けて練習する生徒たち）

授業の評価

【どのように学んだか】

・繰り返しリズム・パターンを打つ中で、口唱歌を唱えたり、口唱歌に合わせて太鼓を打ったりすることで、自分のイメージする音を表現しやすくなった。

・単元の最後に発表会を設定することで、生徒にとってゴールが分かりやすくなった。発表に向けて意欲的に練習に取り組む動機付けとなり、練習の中で友達と協働する姿が見られた。

・リズム・パターンを表す視覚支援カードやホワイトボード、マイばちなどの教材が一人に一つずつあることで、主体的に学習に取り組むことができた。

・ＩＣＴ機器を活用し自分たちの姿を振り返ることで、良い点や改善点に気付き、おはやしの改善につなげることができた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】
・実態差のある学習集団であるため、個別の目標をもとにグループ編成の工夫が必要。グループ学習では、友達から刺激を受けながら学習する姿も見られた。
・本物の太鼓に触れる時間や、音楽を形作っている要素について深める時間（工夫したいことを表現するための時間）をもっと多く設定できるとよかった。

単元における個別の指導目標の評価（M女３さんの例）

目標
(1)・太鼓を打つ部分や打ち方の違いによって音の響きが変わることや、違う音の響きを組み合わせることのよさや面白さを理解する。(知識①) ・自分や友達が表現した、リズム・パターンのつなぎ方や重ね方のよさや面白さを理解する。(知識②) ・自分がつくりたいおはやしにするために、リズム・パターンのつなげ方や重ね方を表現する技能を身に付ける。(技能①) (2)自分の思いと音楽の仕組み(反復、呼びかけとこたえ、変化)を関連付けて考え、リズム・パターンのつなぎ方や重ね方を工夫して表現する。 (3)進んで太鼓の音の響きやいろいろなリズム・パターンに関わり、友達と音をつなげたり重ねたりしておはやしを演奏する楽しさを感じながら、音楽づくりに取り組もうとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）・教師の手本を見たり、自分で打ってみたりしたことで、太鼓の打つ部分によって音が変わることや、面の真ん中を打った方が音が響くことが分かった。グループでおはやしをつくる活動では、最初はふちを打つ音が少ないおはやしをつくった。２曲目のおはやしをつくるときに、面を打つ中にふちを打つリズムやパターンが組み合わさった手本を見たことで、いいアクセントになることに気付き、組み合わせる面白さが分かった。(知識①) ・９つのリズム・パターンの中から、選んで組み合わせてオリジナルのおはやしをつくる活動をした。ミニホワイトボードにリズム表を貼り、それを見ながら発表を聞いたことで、それぞれの組み合わせ方の違いが分かり、印象的なリズムやつなぎ方を友達に伝える姿が見られた。(知識②) ・自分で打つときに上手く打てなかったり、グループで演奏するときにそろわなかったりすることがあった。他のグループで口唱歌をしたことで上手くいった例を聞いたことで、口唱歌をするようになりリズムに合わせて打つことができるようになった。また、タイミングを合わせるために声掛けをすることもあり、グループでの演奏がそろうようになった。(技能) （２）グループのおはやしづくりでは、迫力のあるおはやしをつくりたいという思いを持った。おはやしを作る際のポイントとして、「音の大きさ」「重なり」「呼びかけとこたえ」「くりかえし」の４つが提示されたことで、迫力があるおはやしにするためにはどのポイントを取り入れるといいかを考えることができた。「重なり」でも全員が一斉に打つパターンと追い掛けて段々重なっていくパターンがあり、聞き比べたことで、追い掛けるパターンの方が徐々に迫力が出てくるというイメージに合っていることに気付き、追い掛けるパターンの「重なり」を取り入れて表現することができた。 （３）グループのおはやしづくりでは、グループで１つのテーマを考えて取り組んだ。みんなで、リズム・パターンを組み合わせたり並べ替えたりして、おはやしが形になってくると「迫力あるね。かっこいいね。」と友達と演奏する楽しさを感じたり期待感をもったりして取り組もうとした。練習中は、「口唱歌をやってみよう。」や「ここ、そろってないかも。声出そう。」とグループの演奏がまとまるように率先してみんなに声を掛ける姿も見られた。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・中学部合同の学習であり、取り扱う内容のまとまりの段階が複数あったが、生徒の実態や学びの履歴の習得状況、興味・関心などを踏まえながら生徒一人一人の個別の目標を設定し、学習活動として「おはやしをつくる」という学習を設定した。一人一人の姿をイメージしながら具体的に個別の指導目標を設定することで、教員間で共通理解しながら一人一人の目標を達成することができた。
・学習計画では、「いろいろな音を味わう、自分の好きな音を見つける、つなげて自分のおはやしをつくる」という活動に十分に取り組んだことで、一人一人が音楽をつくる楽しさに触れることができた。発表会に向けて期待感と目的意識を持っておはやしづくりに取り組み、録画した練習の様子を見返す中で、自分の音が友達と合っていないことに気付いて練習したり、口唱歌の良さに気付いて積極的に声を出そうしたりする生徒の姿が見られた。発表会を通して達成感を味わい、「太鼓楽しい。」、「もっと太鼓したい。」、「もう一回発表したい。」などと話す生徒の姿が見られた。

授業実践 ⑧	高等部　国語科 「　生活に生きる言葉『ことわざ』　」

※令和４年度の授業実践のため、内容のまとまりの取り扱いや表記が他の実践例とは異なる部分があります。

授業者	八鍬洋祐　山平亮太
授業検討者	髙橋僚子　荒井亜矢子　舩山美貴子　結城ちひろ　阿部友幸　髙橋未紗季　青木ひ鶴 協働参画者３名

学習集団について

・高等部２年生３名、高等部３年生２名の計５名。指導教員は２名。
・学習状況等から、高等部１段階の内容に加え、３名は中学部２段階の内容の一部を取り入れて学習内容や個別の目標を設定している。

取り扱う内容　【高等部１段階】

単元目標	（１）生活に身近なことわざや慣用句などを知り、使う。 （２）書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける。 （３）言葉がもつよさを認識するとともに、言葉を大切にして思いや考えを伝え合おうとする。
評価規準	（１）生活に身近なことわざや慣用句などを知り、使っている。 （２）「書くこと」において、書こうとしたことが明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合い、文章のよいところを見付けている。 （３）言葉を通じて積極的に人と関わったり、学習課題に沿って考えを広げたりしながら、言葉を使おうとしている。

具体的な指導内容の検討

①　取り扱う内容に関連して、生徒の学びの履歴に基づく段階の内容を確認する。
　Ｏ男２さん、Ｕ男２さん、Ｅ男３さんは以下の中学部２段階の内容を一部取り入れる。
（１）生活に身近なことわざを知り、使うことにより様々な表現に親しんでいる。
（２）「書くこと」において、文章に対する感想や意見を伝え合い、文章のよいところを見付けている。
（３）言葉を通じて積極的に人と関わったり、学習課題に沿って考えをまとめたりしながら、言葉を使おうとしている。

②　一人一人の具体的な指導内容を検討する。

Ｎ男２さん	知っていることわざを増やし、それらのことわざが使えそうな場面を探したり、それらのことわざを使って文章を作ったりする。
Ｏ男２さん 中２段階も参考	生活に身近なことわざを知り、それらのことわざの意味を調べたり、それらのことわざを使って文章を作ったりする。
Ｕ男２さん 中２段階も参考	生活に身近なことわざを知り、それらのことわざの意味を調べたり、それらのことわざを使って文章を作ったりする。
Ｂ男３さん	知っていることわざを増やし、それらのことわざが使えそうな場面を探したり、それらのことわざを使って文章を作ったりする。
Ｅ男３さん 中２段階も参考	生活に身近なことわざを知り、それらのことわざの意味を調べたり、それらのことわざを使って文章を作ったりする。

③　学習活動を検討する。
・学校生活に関連することわざを１５個に絞って提示し、学習する。
・ことわざの意味や用例を調べた後に、校内を回ってそれらのことわざが使えそうな場所や場面を探す。

・学習のまとめとして、見付けた場所に掲示することわざポスターを作る。ことわざポスターには、ことわざと、そのポスターを見た人に伝えたいメッセージを書く。
・ことわざポスターは、小グループで発表し合って、自分の伝えたいことが相手に伝わるかという視点から意見を出し合う。

（ことわざポスターの例）

ことわざ	掲示場所	メッセージ
「塵も積もれば山となる」	体育館のバスケットゴールの下	毎日練習するとシュートが上手くなる。

個別の指導目標

N男２さん	（１）知っていることわざを増やし、それらが生活の中で用いられる場面が分かる。 （２）書こうとしたことが明確になっているか文章を読んで確認したり、文章を書いたきっかけについて説明したりする。 （３）ことわざの面白さを認識し、自分から学習に取り組んだり、生活の中でことわざを使ったりしようとする。
O男２さん	（１）身近なことわざが分かり、それらが生活と結び付いていることに気付く。 （２）友達の意見を受けて文章を考え直したり、文章のよいところを見付けたりする。 （３）ことわざの面白さに気付き、自分から学習に取り組んだり、考えたことを伝えたりしようとする。
U男２さん	（１）身近なことわざが分かり、それらが生活と結び付いていることに気付く。 （２）文章のよいところや改善案について友達に意見を伝えたり、友達の意見を受けて文章を考え直したりする。 （３）ことわざの面白さに気付き、自分から学習に取り組んだり、考えたことを伝えたりしようとする。
B男３さん	（１）身近なことわざや、それらが生活の中で用いられる場面が分かる。 （２）書こうとしたことが明確になっているか文章を読んで確認し、友達の文章のよいところや改善案について伝える。 （３）ことわざの面白さを認識し、自分から学習に取り組んだり、生活の中でことわざを使ったりしようとする。
E男３さん	（１）身近なことわざが分かり、それらが生活と結び付いていることに気付く。 （２）文章のよいところや改善案について友達に意見を伝えたり、友達の意見を受けて文章を考え直したりする。 （３）ことわざの面白さに気付き、自分から学習に取り組んだり、考えたことを伝えたりしようとする。

単元計画			
教時	月日	学習活動	評価計画
1	1／16 （月）	・ことわざについて知る。 ・教師が出題することわざクイズに答える。【主】 ・教師が出題したことわざについて、タブレット型端末や辞典を使って調べる。	（1）
2	1／17 （火）	・教師が提示したことわざの中から興味を持ったものについて、タブレット型端末や辞典を使い意味や使い方を調べる。【主】	（1）
3	1／30 （月）	・前時に調べたことわざの意味や使い方を確認する。 ※ことわざが使えそうな場面についても考える。（例：早起きは三文の徳・・・遅くまで寝ている人に使えそう。など）	（1）
4	1／31 （火）	・学習したことわざを使って、学校生活に関するポスターを作ることを知る。 ・校内を回り、学習したことわざが使えそうな場面を探す。【対】 ・ポスターに載せる言葉を考える。（例：備えあれば憂いなし。備蓄リュックの中身を確認しよう。など）【深】	（1） （3）
5	2／ 6 （月）	・前時に考えた言葉を紹介し合い、感想や意見（改善案など）を交換する。【対】 ・必要に応じて言葉を考え直し、ポスターを完成させる。	（2）
6	2／ 7 （火）	・完成したポスターを紹介し合い、言葉のよいところを探して伝え合う。【深】 ・ポスターを校内に掲示する。	（2） （3）

授業の様子

（ことわざの意味や用例を調べる様子）

（作ったポスターを校内に掲示している様子）

（ことわざが使えそうな場所を、校舎図を見ながら発表している様子）

（生徒が作成したポスター）

授業の評価

【どのように学んだか】

・導入でことわざクイズを行うことで、生徒が関心を持って学習に取り組んだ。
・生活に関連する１５個のことわざに絞ることで、意味を覚えたり理解を深めたりすることができた。
・ことわざの意味や使い方を学習する際、関連するイラストや写真を提示することで、自分の経験と重ね合わせて考える生徒がいた。
・小グループに分かれ、教師も一緒に話し合うことで、生徒が友達の意見について考えたり、自分の意見を伝えたりすることができた。一方で、教師対生徒のやり取りが多くなってしまった。タブレット型端末等を用いて意見を共有したり、教師の発問を吟味したりする必要がある。
・ことわざを使えるようになった生徒もいたが、使う（アウトプットの）ためには、インプットの時間の確保が必要。
・ＩＣＴ機器を使うことで、情報の正確さを見極めることが難しく、生徒の間違った認識につながる場合がある。意味調べの際は辞書を使った方がよい。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・単元の時期や期間を検討する。
・ＩＣＴ機器のメリットやデメリットを基に、有効な活用の仕方について検討する。

単元における個別の指導目標の評価（N男２さんの例）

目標
（１）知っていることわざを増やし、それらが生活の中で用いられる場面が分かる。 （２）書こうとしたことが明確になっているか文章を読んで確認したり、文章を書いたきっかけについて説明したりする。 （３）ことわざの面白さを認識し、自分から学習に取り組んだり、生活の中でことわざを使ったりしようとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）学校生活に関連する１５個のことわざの意味や用例を知ることができた。校内を回って学習したことわざを使える場所や場面を探す学習では、備蓄リュック置き場に「備えあれば憂いなし」ということわざが使えることに気付き、生活で使える場面が分かった。 （２）ことわざポスターの作成では、ことわざの意味をもとにポスターを掲示する場所と見る人へのメッセージを考えた。メッセージの言葉について小グループで意見交換をする中で、自分の伝えたいことが相手に伝わったかという視点から文章を見直し、自分の意図したことが明確になるように書いた。 （３）様々なことわざについて調べたり学習したりする中で、ことわざを使うことで短い文でその状況や教えを伝えることができる面白さに気付き、覚えたことわざをすぐに日常生活の中で使おうとする姿が見られた。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・生徒一人一人の生活の様子やこれまでの学びの履歴、学習内容の習得状況などを踏まえて「ことわざに関心を持ち、身近なことわざを知る」、「ことわざを使える場面を探す」など具体的な指導内容を設定したことが、一人一人の目標を明確にして指導することにつながった。その結果、一人一人の目標を達成するとともに、学習に満足感を得る生徒の姿も見られ、本学習集団、生徒に適した学習内容だった。
・本単元では取り扱う内容のまとまりをもとに、ことわざポスターの作成という学習活動を設定したが、特に国語科においては、生徒にとって不自然な流れや内容の学習とならないようにするため、知識及び技能、思考力、判断力、表現力等の取り扱う内容のまとまりを押さえ、ある程度の題材のイメージを持った上でのカリキュラム・マネジメントを行う必要性を感じた。
・学習したことわざを使える場面を探す学習をしたことで、生活の中で「先生、それはまさしく備えあれば憂いなしですよ。」と覚えたことわざを使ったり、ことわざが好きになって他にも自分から進んで調べたりする生徒の姿が見られた。

授業実践 ⑨	高等部　国語科 「伝える力『私の実習』」

授業者	青木ひ鶴
授業検討者	小山友子　髙橋未紗季　結城ちひろ

学習集団について	
・高等部１年生１名、高等部３年生３名の計４名。指導教員は１名。	
取り扱う内容　【高等部１段階、２段階　知・技能　ア（イ）、思・判・表　Ａエ】	
単元目標	国語【高等部２段階】 （１）話し言葉と書き言葉に違いがあることに気付くことができる。 （２）「聞くこと・話すこと」において、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができる。 （３）言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。 国語【高等部１段階】　※１年生は高等部１段階の内容を扱う。 （１）相手を見て話したり聞いたりするとともに、間の取り方などに注意して話すことができる。 （２）「聞くこと・話すこと」において、相手に伝わるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫することができる。 （３）言葉がもつよさを認識するとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。
評価規準	国語【高等部２段階】 （１）話し言葉と書き言葉に違いがあることに気付いている。 （２）「聞くこと・話すこと」において、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫している。 （３）言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとしている。 国語【高等部１段階】 （１）相手を見て話したり聞いたりするとともに、間の取り方などに注意して話している。 （２）「聞くこと・話すこと」において、相手に伝わるように、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫している。 （３）言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつよさを認識するとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとしている。

具体的な指導内容の検討

①　高等部１年生徒Ｅ男１さんは高等部１段階の内容を、高等部３年生徒Ｑ女３さん、Ｓ女３さん、Ｔ男３さんは高等部２段階の内容のまとまりを扱う。それぞれの内容に関連して、生徒の実態によっては中学部１段階、２段階の内容の一部を取り入れる。

②　一人一人の具体的な指導内容を検討する。

Ｅ男１さん	聞き手に伝わる話し方を意識しながら、実習について聞き手を見て話したり聞いたりする。
Ｑ女３さん	実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付き、自分の現場実習について写真や画像を使って説明したり、伝えたい内容を整理したりしながら、聞き手に伝わるようにまとめる。

Ｓ女３さん	実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付き、自分の現場実習について伝えたい内容を絞り、写真や画像を使って説明したり、文字の大きさで強調したりしながら、聞き手に伝わるようにまとめる。
Ｔ男３さん	実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付き、自分の現場実習について伝えたい内容を選択したり、写真や画像を使ったりしながら、聞き手に伝わるようにまとめる。

③　学習活動を検討する。

・直前まで行っていた校内実習や産業現場等における実習を取り上げ、旬な題材を用いる。
・表現の工夫の仕方についてイメージを膨らませることができるように、イラストや画像などの資料を活用したり、文字を強調したりしてまとめたものを数種類、タイミングを見ながら例示する。
・発表の仕方（視線、話し方など）を意識できるように、ＩＣＴを活用し、自己の発表の仕方をすぐに見返す機会を作る。
・発表会では、お互いにカードを記入し合い、聞き手に伝わりやすいように工夫できたかを振り返ることができるように、感想カードを活用する。

個別の目標

Ｅ男１さん	（１）書くことによって聞き手に伝わることが分かり、聞き手を見て話したり聞いたりする。 （２）聞き手に伝わるように考え、丁寧な言葉遣いを使ったり、聞き手に視線を向けたりしながら、発表する。 （３）聞き手に伝わることを意識しながら、文章をまとめたり、発表したりしようとする。
Ｑ女３さん	（１）実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付く。 （２）自分の現場実習について、伝えたい内容を選択したり、順番を決めたりし、どのように工夫したら聞き手に伝わるのかを考えて写真や画像を用いながら聞き手に伝わるようにまとめる。 （３）聞き手に言葉で伝わったことを実感し、自分から伝え合う学習に取り組もうとする。
Ｓ女３さん	（１）実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付く。 （２）自分の現場実習について、伝えたい内容を絞り、どのように工夫したら聞き手に伝わるのかを考えて、写真や画像を用いたり、文字の大きさを変えて強調したりしながら聞き手に伝わるようにまとめる。 （３）聞き手に言葉で伝わったことを実感し、自分から伝え合う学習に取り組もうとする。
Ｔ男３さん	（１）実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付く。 （２）自分の現場実習について、どのように工夫したら聞き手に伝わるのかを考え、伝えたい内容を選択したり、写真や画像を用いたりしながらまとめる。 （３）聞き手に言葉で伝わったことを実感し、自分から伝え合う学習に取り組もうとする。

単元計画

教時	月日	学習活動	評価計画
1	６/１３(火)	・この学習で何を学ぶか(文章を整えたり、表現を工夫したりして伝える力を付ける)について知る。 ・実習場面を取り出した実例を見たり、体験してきた場面を実演したりしながら、話し言葉と書き言葉に違いがあることに気付く。【対】	（１）

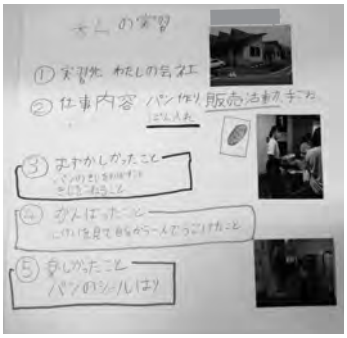
2	6/14(水)	・実習場面を取り出した実例を見たり、体験してきた場面を実演したりしながら、話し言葉と書き言葉に違いがあることに気付く。【対】 ・これからの学習計画(最後に、発表会を設定していること)を知る。	(1) (2)
3	6/20(火)	・聞き手に伝わりやすいように、伝えたいことを強調したり、例示を見ながら実物や画像など資料を活用したりする良さについて知る。 ・聞き手が知りたい情報を予想し、書く内容を考えたり、選んだりする。	(1) (2)
4・5	6/26(月) 6/27(火)	・資料などを活用しながら、自分の伝えたいことが伝わるように発表会に向けて工夫してまとめる。【深】 ・友達が取り組んでいる様子を見聞きするなかで、表現の仕方を考える。	(2)
6・7	7/3(月) 7/4(火)	・資料などを活用しながら、自分の伝えたいことが伝わるように発表会に向けて工夫してまとめる。【深】 ・発表の仕方（話し方や強調の仕方、資料を見せるなど）を意識しながら、発表会に向けて練習する。【主】	(2) (3)
8	7/11(火)	・発表会で、資料などを活用しながら、発表する。 ・伝わりやすいように工夫されていた点について、感想カードを使って友達と伝え合う。【対】 ・聞き手に伝わるように工夫し、できたことなどを振り返る。【深】	(3)

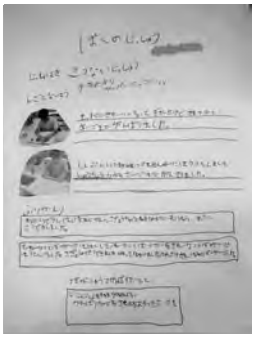
授業の様子

（実演しながら話し言葉で説明している様子）

（メモを書きながら伝えたい内容を整理している様子）

（メモを手掛かりに報告書を作成している様子）





（完成した報告書）

授業の評価

【どのように学んだか】

・自分の意見を出し合ったり、話し合ったりする学習では、机を移動して円になり、話しやすい環境を整えることで、友達の表情を見ながら、ざっくばらんに発言する生徒が多く見られた。

・教師も一緒にロールプレイに加わることで、教師からの例示を手掛かりに、生徒からの発言が増えた。

・毎時間、授業の初めに、この単元で学ぶことを確認することで、生徒自身が「伝える力」を高めることに意識を向けて取り組む姿が見られた。

・プリントにメモを書く活動を通して、伝えたい内容を選択・整理したり、聞き手に伝わるように、資料の活用や文字の強調などを考えて工夫したりしながらまとめた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・本単元では、国語科の思考力、判断力、表現力等の「書くこと」活動が多くなったため、「聞くこと・話すこと」「書くこと」「読むこと」の内容を踏まえた指導内容の設定ができるように工夫する。

・授業で学んだことや分かったことなどを適宜、生徒同士で言葉に出してアウトプットし、振り返りができる機会を設ける。

個別の単元の評価（Ｓ女３さんの例）

目標
（１）実習中のやり取りは話し言葉、お礼状は書き言葉であることに気付く。 （２）自分の現場実習について、伝えたい内容を絞り、どのように工夫したら聞き手に伝わるのかを考えて、写真や画像を用いたり、文字の大きさを変えて強調したりしながら聞き手に伝わるようにまとめる。 （３）聞き手に言葉で伝わったことを実感し、自分から伝え合う学習に取り組もうとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）実習場面を取り出した教師の実例を見たり、実習で体験した場面を自分で実演したりする活動を通して、実習中に交わした言葉のやり取りは話し言葉で、実習先に贈るお礼状は書き言葉であるという使い分けがあることに気付いた。また、話し言葉は、伝わるスピードが速いこと、書き言葉は、繰り返し読んだり確認したりすることができるといった特性を知った。 （２）自分の実習について、プリントに伝えたいことをメモしたり、教師とやり取りしたりすることで、伝えたい内容を絞ることができた。数種類の例示を手掛かりにしながら、どのように工夫したら聞き手に伝わるのかを考え、写真貼付の他に、パンの絵を描いて表現を工夫した。項目と内容を区別するために、文字の大きさに気を付けたり、文字を囲んだりして強調しながらまとめた。 （３）机を移動して円になり、実習の様子を会話で伝え合う活動をしたときに、友達や教師の発表に感想を述べたり、質問したりした。情報を付け足しながら説明するなど、自分から伝えようと学習に取り組んだ。単元の最後に、自分が作成した報告書を基に発表する活動を通して、聞き手に伝えたいことが伝わったことを実感した。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・今回の単元では、知識及び技能では「言葉の特徴や使い方」の中の「話し言葉と書き言葉」の内容を扱った。生徒一人一人の普段の生活の様子や学習内容の習得状況を踏まえて、「〇〇さんにとって『話し言葉と書き言葉に違いがあることに気付くことができる』とはどのような姿なのか。」など、一人一人具体的に指導内容を検討し、実際に言葉の違いを感じながら、生活に結び付けて考えることができるように、学習計画の中に産業現場等における実習の報告会を設定した。学習を進める中で、実際に話す言葉と、紙面等に書く言葉には違いがあることに気付き、報告するときには、相手に聞き取りやすいように意識して話をする姿が見られた。

・その後の学校生活の中で発表を行うときには、本単元の学びを生かし、相手に伝わりやすいように発表をしたり、提示する資料やポスターに写真やイラスト付けて、伝わりやすくする工夫をしながら発表したりする姿が見られるようなった。

授業実践⑩	高等部　数学科 「分数」

授業者	阿部友幸
授業検討者	荒井亜矢子、石川大輔、柳生百香、岩井大知、協働参画者１名

学習集団について	
・高等部１年生１名、高等部３年生３名の計４名。指導教員は１名。 ・学習状況等から、高等部１、２段階の内容に加え、４名とも中学部２段階の内容の一部を取り入れて学習内容や個別の目標を設定している。	
取り扱う内容　【高等部１段階　ケ（ア）㋐㋑㋒　（イ）㋐】	
単元目標	（１）・等分してできる部分の大きさや端数部分の大きさを表すのに分数を用いることについて理解することができる。また、分数の表し方について知る。 ・分数が単位分数の幾つ分かで表すことができることを知る。 ・簡単な場合について、分数の加法及び減法の意味について理解し、それらの計算ができることを知る。 （２）数のまとまりに着目し、分数でも数の大きさを比べたり、計算したりできるかどうかを考えるとともに、分数を日常生活に生かすことができる。 （３）数量について数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用したりしようとすることができる。
評価規準	数学【高１段階】 （１）・等分してできる部分の大きさや端数部分の大きさを表すのに分数を用いることについて理解している。また、分数の表し方について知っている。 ・分数が単位分数の幾つ分かで表すことができることを知っている。 ・簡単な場合について、分数の加法及び減法の意味について理解し、それらの計算ができることを知っている。 （２）数のまとまりに着目し、分数でも数の大きさを比べたり、計算したりできるかどうかを考えるとともに、分数を日常生活に生かしている。 （３）数量について数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用したりしようとしている。
取り扱う内容　【高等部２段階　イ（ア）㋐　（イ）㋐】	
単元目標	（１）整数及び小数を分数の形に直したり、分数を小数で表したりすることができる。 （２）数を構成する単位に着目し、数の相等及び大小関係について考察することができる。 （３）数量について数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用したりしようとすることができる。
評価規準	【高２段階】 （１）整数及び小数を分数の形に直したり、分数を小数で表したりしている。 （２）数を構成する単位に着目し、数の相等及び大小関係について考察している。 （３）数量について数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり、数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用したりしようとしている。

具体的な指導内容の検討

① 取り扱う内容に関連して、生徒の実態によって学びの履歴に基づく段階の内容を確認する。
４名とも、以下の中学部２段階の内容の一部を取り入れる。

（1）１／2、１／4 など簡単な分数について知っている。
（2）数のまとまりに着目し、数の表し方の適用範囲を広げ、日常生活に生かしている。
（3）数量に進んで関わり、数学的に表現・処理するとともに、数学で学んだことのよさを理解し、そのことを生活や学習に活用しようとしている。

② 一人一人の具体的な指導内容を検討する。

E男１さん	分数の表し方や簡単な加法及び減法の計算の仕方を知り、実際にパンや飲み物などを数人分に等分する。
Q女３さん	分数の表し方や簡単な分数を小数の形に直す方法を知り、実際にパンや飲み物などを数人分に等分する。
S女３さん	分数の表し方や簡単な分数を小数の形に直す方法を知り、実際にパンや飲み物などを数人分に等分する。
T男３さん	分数の表し方や簡単な分数を小数の形に直す方法を知り、実際にパンや飲み物などを数人分に等分する。

③ 学習活動を検討する。

・折り紙を折ったり色水の量を目盛りに合わせたりして、１／２と１／４という簡単な分数の表し方を学習する。
・細い折り紙を４等分したものを自作して、単位分数の幾つ分かで分数を表す。
・数直線やイラストを使って、１／１０と１／５という簡単な分数を小数で表す。
・１学期お疲れ様会を実施し、ペットボトル飲料とパンを一人１種類５等分し、飲食する。その際、パンは同じ種類を２本準備し、分数の加法の計算を行う。

個別の指導目標

E男１さん	（1）・等分してできる部分の大きさを表すのに分数を用いることを理解し、分数の表し方について知る。 ・分数が単位分数の幾つ分かで表すことができることを知る。 ・同分母で、和が１までの真分数どうしの加法及び減法を理解する。 （2）数のまとまりに着目し、実物の数量を分数で表せるか考えたり、実際に物を分ける場面で分数を使ったりする。 （3）数の表し方に興味を持ち、進んで物を分けたり、数の表した方に分数を活用したりしようとする。
Q女３さん	（1）１０等分した小数を分数の形に直したり、分数を小数で表したりする。 （2）数のまとまりに着目し、１つのものを数人で分けたときの数を分数で表す。 （3）数の表し方に興味を持ち、等分に気を付けながら物を分けようとする。
S女３さん	（1）１０等分及び５等分した小数を分数の形に直したり、分数を小数で表したりする。 （2）数のまとまりに着目し、実物の数量を分数で表したり、分数で計算できるか考えたりする。 （3）数の表し方に興味を持ち、自分から様々な数を分数で表したり物を分けようとしたりする。
T男３さん	（1）１０等分した小数を分数の形に直したり、分数を小数で表したりする。 （2）数のまとまりに着目し、１つのものを何人かで分けたときの数を分数で表す。 （3）数の表し方に興味を持ち、等分に気を付けながら物を分けようとする。

単元計画			
教時	月日	学習活動	評価計画
1	7／　6 （木）	・折り紙を折ったり、切り貼りしたりして、分数を使った数の表し方を知る。（１／２と１／４）【対】	（１）
2	7／13 （木）	・色水と透明なコップを使って、１／２や１／４が表す量に水量を調整する。 ・透明なコップに入れた色水を他のコップに移したりして、１／４が表す量を足して２／４や３／４にしたり、減らして１／４にしたりする。	（１）（２）
3	7／19 （水）	・細長く切った折り紙を２回半分に折り、折り目に線を引いて４等分する。その紙を操作し、単位分数の幾つ分かで分数を表す。 （１／４が２コ分で２／４など） ・パンの写真を印刷した紙を１／２や１／４にする方法を考えて折り目を付けて切り、切ったパーツを合わせて、合わせていくつになるか求める。（簡単な分数の加算）	（１）（２）
4	7／20 （木）	・色水や図等を使って、ジュースを飲んで量がどのくらい残ったか求める。（簡単な分数の減算） ・プリントで簡単な分数の加算と減算の式を解く。その際、分子のみ計算して分母はそのままにすることを確認する。 ・分数と小数の関係を数直線に表す。（１０等分、５等分の２パターン） ・既習の「小数」の単元で扱ったテープの長さや水の量を、分数で表す。【深】	（２）
5	7／21 （金）	・グループの１学期お疲れ様会を行う。（ペットボトル飲料とパンを一人１種類５等分し、飲食する。）【主】 ※ペットボトル飲料２種類をそれぞれ透明なコップに５等分。長いパン１種類２本を５等分。 ・自分の手元にある飲み物やパンの量を、分数と小数で表す。【深】 （飲み物は１／５＝０．２）（パンは１／５＋１／５＝２／５＝０．４）	（２）（３）

授業の様子

（折り紙を半分に折っている様子）

（目盛りに合わせてパンを切り分けている様子）

授業の評価

【どのように学んだか】

・毎回の授業での大切なポイントを１つに絞って簡潔な言葉でプリントに明記し、授業冒頭で確認したことで、一人一人がその授業のゴールを意識し、達成感を得ながら学習を進めることができた。

・折り紙を半分にする折り方や、同じ大きさに切れたことの確かめ方など、生徒同士でお互いの様子を見合って、相手のやり方を参考にしながら考える姿が見られた。しかし、様々なパターンで実物を分けたり、何度も試行錯誤したりしながら考える時間の確保が難しかった。

・一つ前の単元で学習した小数のプリントに、同じ数量を表す分数を記入したことで、既習の小数を分数で表すこともできることを実感する様子が見られた。

・１学期お疲れ様会で実際にパンやジュースを分けてみることで、同じ大きさや量になるよう水量を調整したり、切る位置に気を付けたりする姿が見られた。しかし、「一本分」という基準の理解が曖昧な様子も見られた。

【改善に向けた引き継ぎ事項】

・様々なパターンで繰り返し物を分けながら等分の仕方について考えたり、分ける前の「１つ分」という基準を十分に理解したりするための時数が足りなかったため、単元の期間を検討する。

単元における個別の指導目標の評価（Ｅ男１さんの例）

目標
（１）・等分してできる部分の大きさを表すのに分数を用いることを理解し、分数の表し方について知る。 ・分数が単位分数の幾つ分かで表すことができることを知る。 ・同分母で、和が１までの真分数どうしの加法及び減法を理解する。 （２）数のまとまりに着目し、実物の数量を分数で表せるか考えたり、実際に物を分ける場面で分数を使ったりする。 （３）数の表し方に興味を持ち、進んで物を分けたり、数の表した方に分数を活用したりしようとする。
評価(学習の様子と評価)
（１）・折り紙を半分に折って折り目で切り、２つが同じ大きさになっていることを確かめた上で一つ分を１／２枚と分数で表した。その後、折り紙を２回半分に折り、４つに分かれたうちの一つ分について、等分した数と分母に着目して１／４枚と表すことができた。 ・初めに複数の透明なグラスに１／４杯ずつ色水を入れ、１つのグラスから別のグラスに色水を移してかさを増やし、目盛りに着目して「１／４が２個で２／４」など単位分数の幾つ分かで分数を表すことができた。 ・実際に２本の長いパンをそれぞれ５等分して、生徒４名と教師１名の計５名で均等に分けた。手元に１／５本のパンが２つあることを確認し、加算で２／５と答えを求めた。また、ジュースを飲んで量が減る様子が分かる図を見て、８／１０－５／１０の減算ができた。 （２）１本のペットボトル飲料を五人分のグラスに分ける活動では、全員が分け隔てなく同じ量になるように細かく量を調整し、「５等分」という数に着目して一人分の量を１／５本と表すことができた。 （３）一つの実物を実際に分け、１に満たない数の表し方に興味を持ち、自分で思いついた数の表し方をいくつも発言したり、同じ大きさや量になるように気を付けながら丁寧にジュースを分けたりした。

◇　振り返り「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿」

・取り扱う内容のまとまりをもとに、生徒たちが「分数」を日常の生活の中で使う場面を想定しながら具体的な指導内容を考えて学習活動を設定したことで、「分数」の意味を理解することにつながった。

・生徒一人一人の生活の様子や学習内容の習得状況等を踏まえて具体的に指導内容・指導目標を検討することで、一人一人のねらいを明確にして授業をすることができた。

・学習活動としては、単元の最後に１学期お疲れ様会を設定した。パンやジュースなどを実際に生徒と教師の人数で等分して飲食したことで、「みんな同じ量になるようにしないと。」と等分を意識してグラスに入ったジュースの量を何度も確かめながら調整し、前時までの学習を生かしながらその量を分数で表す姿が見られた。

Ⅲ　研究のまとめ

◇　成果と課題

研究のまとめ

１．４年次の成果と課題

「授業づくりのサイクルの活性化」と「どのように学ぶか」の工夫と発信・共有を重点として、日々の授業実践及び、各学部での授業研究会を行った。

成果として、授業づくりのサイクルの活性化については、単元シートを授業構想で活用し、学習指導要領に基づき、授業のねらいを明確化したことで、教員間で目標を共有した授業実践につながった。また、一人一人の指導内容を意識して授業づくりを行うことで、身に付けるために必要な適切な時数についてなども振り返りで話題になるなど、カリキュラム・マネジメントにつながる視点を新たに持つことができた。単元シートの活用では、担任個人ではなく組織的に取り組むことで指導目標の妥当性が高まったこと、個別の指導内容を明確化することで、単元計画の検討や個に応じた授業づくり（教材・教具づくりを含む）につながり、児童生徒が自己の学びを実感できるための手立てを考えられるようになった、などの成果が挙げられた。

課題としては、子供の実態を踏まえた授業づくりのために評価の在り方を考えていくこと、単元期間内の授業改善を充実させるために、次の Ｐ（計画の改善）に生かせる主体的・対話的で深い学びの視点からの振り返りと共有の仕方について検討が必要であること等が挙げられた。

以上の成果と課題に加え、各授業実践への外部講師からの助言を踏まえて、今後へ向けた課題を整理した。4年次内の実践に生かせる内容と、来年度へ向けて生かせる内容に整理した上で、大きく「授業づくり」と「教育課程」において改善していける部分に整理した。

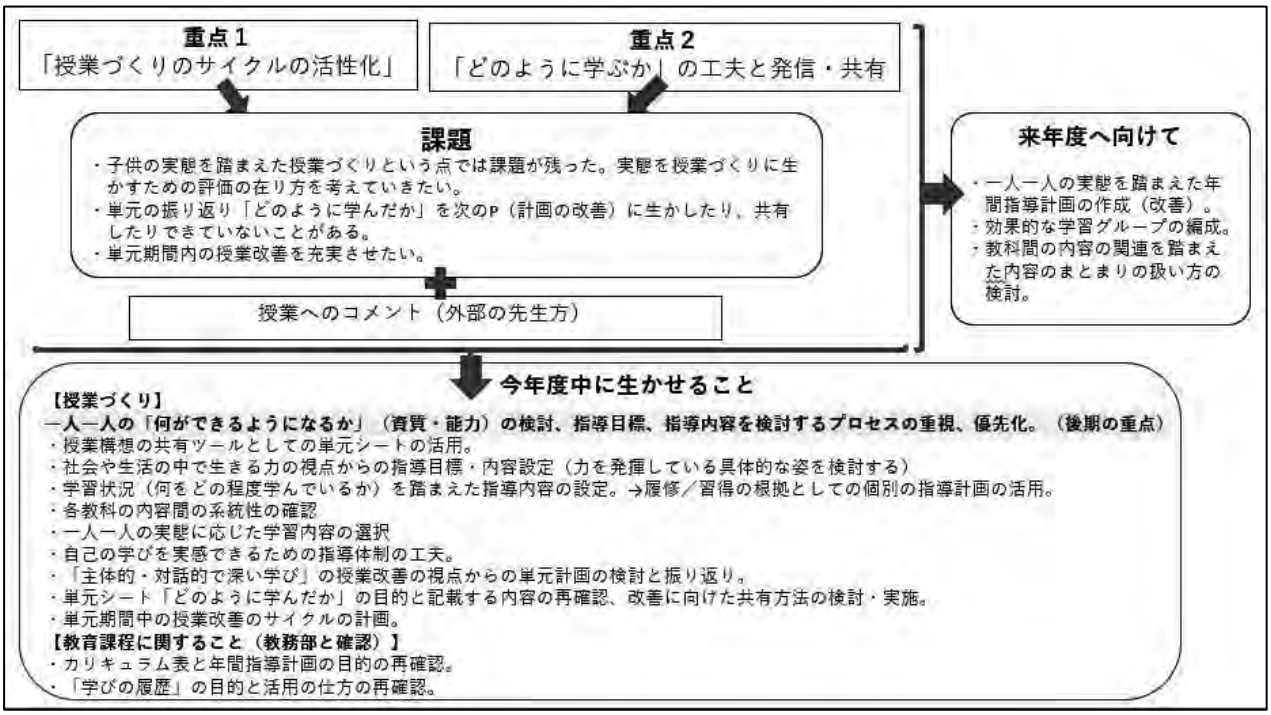


図１０　４年次の成果と課題

２．本研究のまとめ

一人一人が自己の学びを実感できる指導・支援はどうあればよいか、そして学んだことがその授業だけではなく、他の学習や生活に生かしていく力を育むためにはどのような授業づくりをしていけばよいか。研究対象の授業だけではなく、日々の授業づくりから、教員全員で取り組み、実践を積み重ねることで研究主題に迫ってきた。これまでの本校の実践の成果である子供の視点からの授業づくりや教師の見取りを

生かしつつ、主体的・対話的で深い学び、学習評価における指導と評価の一体化といった学習指導要領の趣旨を授業づくりにおいてどのように具現化していくか、毎日の授業実践を積み重ねる中で探究してきた４年間の取り組みとなった。

研究内容である「知的障がい教育における主体的・対話的で深い学びの在り方を探る」については、主に授業力の向上につながる授業づくりの過程や手順と、その際に必要な教師の専門性の向上について迫ることができたと考える。授業づくりの過程や手順については、本校では「授業づくりのプロセス」として、より具体的には「単元シート」を活用した授業づくりとして整理することができた。主体的・対話的で深い学びを考える際に、最も重要になってくるのが一人一人の「資質・能力」を考えるプロセスである。教師が、授業を通して児童生徒一人一人の「何ができるようになるか」（資質・能力）を考え、その視点を踏まえて児童生徒にとっての「何を学ぶか」を考えることで、授業のねらいが明確になる。授業のねらいが明確になれば、そのためにどのような指導・支援が必要かを検討しやすくなることが、実践を通して確かめられた。

授業では、児童生徒が自己の学びを実感できるような学習活動、教材・教具や教師の関わりを工夫していくことで児童自身が興味・関心を持って学び、学ぶ楽しさやよさを実感する姿、達成感や満足感を得ながら学習する姿も実践を重ねるごとに見られるようになった。児童生徒一人一人の育成を目指す資質・能力や指導目標及び指導内容を検討する過程で、実態を捉えて具体的な指導・支援を考えていく際に必要なのが教師の専門性である。児童生徒の実態は一人一人異なるため、教師によって捉えがそれぞれ違っていたのでは、一人一人の付けたい力の育成にはつながらない。大切になってくるのは、複数の教員で対話を通して多面的に児童生徒を捉えることである。今回の実践において、授業者が一人で考えるのではなく、対話を通してチームや組織で協働して考えることが指導目標及び内容の妥当性を高めていき、授業の振り返りではそれぞれの教師の視点を生かし多面的に児童生徒の学びや指導・支援を振り返ることで、授業の質の向上につながることが確かめられた。

「授業実践と学習評価の手続きを明確化する」については、「授業づくりのプロセス」に加えて「授業づくりのサイクル」として全体像を整理することができた。本研究では、教務部との連携を図りながら、学校全体の教育課程と連動させ、組織的に実践から評価への手続きについて検討、実践してきた（PDCA サイクルの C→A の部分）。実践を通して、学習評価の目的を理解するとともに、日常的な評価の重要性が考えられた。これにより、適切な学習評価は、より一人一人の指導計画を充実させ、よりよい単元づくりに生かされるものになると考える。

４年間の取り組みを振り返ると、研究当初は、まずは学習指導要領の趣旨の理解や文言の共通理解をすることから始まった。現在でも授業づくりをする際は学習指導要領に立ち返り、何を児童生徒に指導していくのか教員同士が対話しながら取り組む姿は日常的なものとなっている。授業づくりの実践を積み重ねることを通して、一人一人の児童生徒が「何を学ぶか」ということについての教師の意識が高まっていった。さらに、学年や学部にとどまらず、学部を越えた学びの連続性や系統性について視野を広げ、個々の授業のみにとらわれず各教科等や教科間、年間を見通した視点から、授業やカリキュラムについて考えるようになった。今後も、より多様な児童生徒の実態を丁寧に的確に捉え、授業づくりに生かしていきたいという意見も聞こえてきている。これからもより一人一人の実態を捉えた指導計画や学習計画を基にした授業実践に取り組み、学習集団や学習形態などより効果的な学びの実践について新たな視点も取り入れながら実践していきたい。また、授業づくりの成果を教育課程の改善に生かし、一人一人が自己の学びを実感し、生き生きと生活していく姿を求め、実践を積み重ねていきたい。

（文責　柴田雄一郎）

Ⅳ　特別寄稿

◇　共同研究者より

山形大学大学院　教育実践研究科　　教授　　三浦　光哉　先生
「　授業づくりの PDCA サイクルとカリキュラム・マネジメント　」

山形大学　地域教育文化学部　　教授　　大村　一史　先生
「　自己の学びの実感は教員にも！　」

山形大学　地域教育文化学部　　准教授　池田　彩乃　先生
「　研究の成果と今後に向けて　」

山形大学大学院　教育実践研究科　　准教授　川村　修弘　先生
「　研究と発信の両輪　」

「授業づくりのPDCAサイクルとカリキュラム・マネジメント」

山形大学大学院　教育実践研究科　教授　三浦　光哉

本校が「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」を研究主題とする４年間の学校研究が今年度で最終となりました。この研究の成果は、同時に「P→D→C→A」サイクルとカリキュラム・マネジメントが機能していることになります。その結果として、児童生徒にとって「より良い成長の姿が見られた」と共に、教員にとっても「指導技術が確実に向上した」と言うことになるでしょう。

４年間の研究の振り返ってみますと、学習指導要領で改訂のポイントにも示されている「主体的・対話的で深い学び」の授業づくり、「学習評価」の在り方、「指導と評価の一体化」などが主な取り組みでした。

「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりでは、前研究でも取り組んだ内容でありますが、本校が全国に提案した授業改善のための“before”&“after”の方式は、今や当たり前のこととなっています。本研究では、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の３つの学びについて、児童生徒の学びの姿を追求していきました。このことにより、更なる授業改善が深化したものと言えます。

次に、「学習評価」の在り方と「指導と評価の一体化」です。今回の学習指導要領で初めて示された指導目標の３観点（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って児童生徒一人一人に明確に設定されるようになりました。１年次や２年次では、３観点の中で特に「思考・判断・表現」の設定が不備なこともありましたが、研究授業で指導案を何度か書く中で改善することができました。学習評価については、児童生徒が「学んだ」といった根拠・証拠（evidence－based）を示すことが重要となります。具体的には、①子供が示す普段の「言語（外・内）や行動等」の記録を蓄積し共通性や特徴を見出していく、②行動変容の証拠を明確にしていく、③評価規準と評価基準を示していく、ことなどが考えられます。この点については、授業をビデオ撮影して振り返ったり、教員同士の話し合いを重ねることで、確かな証拠を見出していきました。これまでの学習評価では、“児童生徒の評価”に偏りがちでしたが、本研究では“教員側の評価”も同時に実施しました。つまり、「単元・題材の評価」（構成内容、指導時間数、指導体制、場の設定など）と「学習指導の評価」（３観点の目標、教材・教具、指導技術など）です。

最後に、児童生徒が生き生きと活動している姿を見るにつけ、４年間の研究の成果が着実に見られ、教員の資質・能力の向上が浸透してきているものと感じています。また、本研究が大学との共同研究と共に、特別支援教育総合研究所、山形県教育委員会、山形県教育センターなど多くの先生方に支えられての成果に感謝いたします。

「自己の学びの実感は教員にも！」

山形大学　地域教育文化学部　教授　大村　一史

一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿をテーマに進めてきた研究は、それを実践する教員一人ひとりにとってはどのような意味をもたらしているであろうか。指導と評価を一体化させる枠組みを用意した研究部はもちろんのこと、実践を行う個々の教員にとっても様々な学びがあったのではないだろうか。これまでも伝えてきたように「主体的・対話的で深い学び」は、普段から教員が取り組んできた活動と大きく異なるわけではない。実践を行うに際して、その過程を正しく把握する枠組みのあり方が重要になるのである。研究活動を通じたこの過程の顕在化は、子どもたちへの効果的な教育にとどまらず、教員一人ひとりの成長にとっても寄与しているはずだ。

今年度は、小学部の授業（算数、体育）を中心に校内授業研究会に参加させて頂いた。授業者からはこれまでテーマとしてきた実行機能の視点からアドバイスを求める声もあったが、研究部が大局的に展開しているメインテーマに沿って、授業を組み立てるように返した。共同研究者ごとの考えにとらわれるより、附属特別支援の教員として進めていきたい方向性が明確な場合は、余計な口を挟まない方が、教員の主体性に沿う形になると考えたからだ。結果として、これは良い判断だと思っている。

体育の授業では、楽しく体を動かすことを基本として、児童自身が体のコントロールを習得していく過程で、「できた」という感覚を実感できる工夫を上手く取り入れていた。心身が未分化な段階では、体のコントロールは、心のコントロールにもつながっていく。算数の授業では、始めの数回は、数量、数詞、数字を有効に関連させて展開できていなかったが、徐々に基数と序数の認知を促す工夫が盛り込まれるようになっていた。児童自身も数の使用に積極的になっていったように見受けられた。どちらも授業回数を重ねる毎に、確かに教授内容は良くなっていったと思う。これは本校が掲げる指導と評価を一体化した授業づくりの賜と言えるであろう。

研究活動を通じて、子どもたちは自己の学びを実感できていたはずだ。教員自身も捉えるべき対象を明確に絞り、必要な指導を実践することができた。実践の振り返りを他の教員と議論し、整理することは自身の教授能力向上にも役立つ。まさに、子どもたちへの教育が自分自身への教育として循環しているのである。計画は実践と振り返りを伴ってはじめて意味を持つ。ソクラテスの名言のように内省があってこそ続く人生が進歩していくのである。本校は県内特別支援学校の目指すべき理想の姿（ベストプラクティス）であってほしい。子どもたちが学びを実感できるだけにとどまらず、教員自身の学びにとっても実りある山形大学附属特別支援学校を探求していこう。

「研究の成果と今後に向けて」

山形大学　地域教育文化学部　准教授　　池田　彩乃

現行の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を通して、各教科等における「何ができるようになるか」という資質・能力を確実に育成することが求められており、各学校において、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る、カリキュラム・マネジメントの実現が進められています。特に、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科（以下，知的障害各教科）等の目標や内容については、教科ごとの系統性や小・中学校等の各教科とのつながりが重視されたかたちで整理され、それらを授業としてどのように具現化していくのかが学校現場においては重要な課題となっています。ところが、個々の児童生徒の実態は多様であり、学習指導要領に示される目標や内容が、知的障害各教科を学ぶ児童生徒の個々の実態を的確に把握し、適切かつ具体的な指導目標を設定する際の十分な指標となりきれず、授業者が悩む現状が指摘されていることも事実です。

附属特別支援学校における「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」を主題とした研究においては、知的障害各教科における授業プロセスを整理し明示したとともに、実施した授業において児童生徒が「何が身についたか」「どのように身についたか」を検討する事後研究会を通して、指導と評価の一体化を実現する授業改善の在り方を提案しました。知的障害各教科の目標や内容の系統性を整理し、実践を積み重ねるこれらの取り組みは、学習指導要領が求めるカリキュラム・マネジメントの実現において、重要な示唆を与えるものです。一方で、これらの取組みを通して、対象授業として取り上げた指導のみでは解決しえない児童生徒の課題も見られたことと思います。それらは他の授業等との関連（教科横断的な視点）や自立活動の指導との関連の必要性を私たちに教えてくれるものであったのではないかと考えます。

本研究のさらなる発展、またその発信とともに、本研究が導き出した新たな課題について引き続き教職員一丸となって取り組んでいかれることを期待します。

「研究と発信の両輪」

山形大学大学院　教育実践研究科　准教授　川村　修弘

校内研究は学校の根幹をなすものであると考えています。４年間にわたって山形大学附属特別支援学校は「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」という研究主題を掲げ大学と附属学校の連携及び協働により取り組んできました。この４年間は山形大学附属特別支援学校で働く皆様に多くの学ぶ機会を提供したのではないでしょうか。

さて、山形大学附属特別支援学校の授業改善による取組の質は、大変高く全国レベルにあると考えます。教員の皆様は、校内研究をとおして自分たちの実践や研究の質が、全国的に見て高いことを感じていますでしょうか。もし、感じていないのであれば、自分たちが現在立っている位置を知るために他の国立大学附属特別支援学校の公開研究会に足を運び校内研究について学ぶことをしてみてはいかがでしょうか。また、皆様の高いレベルの実践や研究を山形県内だけに発信するのではなく、日本教育大学協会研究集会や日本特殊教育学会等で、全国に発信していきましょう。全国の方から助言を得ることでさらに充実した実践が展開されていくと考えます。４年間にわたる校内研究が一区切りを迎える現在だからこそ、これまでの取組を端的にまとめエッセンスを発信することを提案いたします。

今後は、校内研究を「研究と発信の両輪」で捉え、全国に発信していただけることを期待しています。全国各地の志の高い教員の皆様と学友となり、大きく、広く、共に学ぶことをとおして、教員としてさらに高い境地を目指していただければと思います。山形大学附属特別支援学校に勤務する皆様一人一人が、学び続けることによって、次の研究や日々の実践はさらなる高みへと進んでいくことでしょう。そして、結果として、山形大学附属特別支援学校の研究は、山形県の知的障害特別支援教育の発展に寄与することに繋がっていきます。大学としては、山形大学附属特別支援学校の研究、そして日々の実践がさらに高まるよう専門的知見からの助言をするとともに取り組んだことを全国に発信することができるように連携及び協働体制の教化に努めて参りたいと考えています。

最後に、山形大学附属特別支援学校が、全国の知的障害教育をリードしていく存在になる日はもうすぐそこまで来ています。ともに邁進していきましょう。

Ⅴ　4年間の研究のあゆみ

◇　ご指導いただいた先生方、
研究リーフレットの紹介

本研究は、年次ごとに研究報告リーフレットとしてまとめ、本校ホームページに掲載しております。
※ ご指導いただいた先生方の所属・役職は、その年度当時のものとなっております。

<table>
<tr><td>1年次

研究報告2020リーフレット</td><td>

http://www.yamagata-u.ac.jp/shien/kenkyu/rifretto02.pdf</td></tr>
<tr><td colspan="2">【指導・助言者】 山形県教育センター特別支援教育課 指導主事 森 豊 先生
【共同研究者】 山形大学 大学院教育実践研究科 教授 三浦 光哉 氏
地域教育文化学部 教授 大村 一史 氏
准教授 本島 優子 氏
講師 池田 彩乃 氏</td></tr>
<tr><td>2年次

研究報告2021リーフレット</td><td>

http://www.yamagata-u.ac.jp/shien/kenkyu/r3leaflet.pdf</td></tr>
<tr><td colspan="2">【指導・助言者】 山形県教育庁 特別支援教育課 主任指導主事 伊東 達 氏
山形県教育庁 特別支援教育課 指導主事 飯沼 恵 氏
山形県教育センター 特別支援教育課 課長 森 豊 氏
【共同研究者】 山形大学 大学院教育実践研究科 教授 三浦 光哉 氏
地域教育文化学部 教授 大村 一史 氏
准教授 本島 優子 氏
講師 池田 彩乃 氏</td></tr>
</table>

3年次 研究報告2022リーフレット	 http://www.yamagata-u.ac.jp/shien/kenkyu/leaflet2.pdf			
【研究アドバイザー】 【共同研究者】	国立特別支援教育総合研究所　研究企画部 山形大学　大学院教育実践研究科 地域教育文化学部	総括研究員 教授 教授 准教授 准教授	横尾　俊 氏 三浦　光哉 氏 大村　一史 氏 本島　優子 氏 池田　彩乃 氏	
4年次　研究実践16号				
【研究アドバイザー】 【指導・助言者】 【共同研究者】	国立特別支援教育総合研究所　研修事業部 山形県教育センター　特別支援教育課 山形県立米沢養護学校　長井校 山形県立上山高等養護学校 山形大学　大学院教育実践研究科 地域教育文化学部	主任研究員 課長 教頭 教諭 教授 教授 准教授 准教授	真部　信吾 氏 古澤　智 氏 森　豊 氏 新野千賀子 氏 三浦　光哉 氏 大村　一史 氏 池田　彩乃 氏 川村　修弘 氏	

あとがき

主題を「一人一人が自己の学びを実感し生活していく姿を求めて」と設定し、新学習指導要領の具現化と授業改善を目指した研究も最終年度となりました。

「子どもたちが自己の学びを実感する姿とは」「主体的・対話的で深い学びの実現とは」「学習評価の在り方とは」・・・多くの議論を重ね授業実践を通してこの研究を進めてきました。

くしくも、本研究の時期は新型コロナウィルス感染症の流行とも重なり、新しい生活様式が求められる時期となりました。今まで当たり前に行っていた活動は中止や縮小を余儀なくされ、子どもたちの学びをどうするかと心配な日々が続きました。しかし、その中で生み出された知恵や工夫は私たちの実践をさらに深めるきっかけにもなりました。

参集型の研究協議会ができない中、オンラインを活用し、授業づくり研修会を開催しました。令和３年度からは、「協働参画者」を募集し、本校のプロセスに沿った授業づくりを外部の方々にも体験していただきました。授業検討の段階から参加いただき、新たな気づきを得て共に授業を創る楽しさやよさを実感できました。

また、昨年度からは、副題に「指導と評価の一体化のための授業づくりのプロセス」を掲げ、国立特別支援教育総合研究所の協力を得て研究を進めてきました。「単元シート」を活用し、学習指導要領に基づき「何を学ぶか」を明確にした授業づくりに取り組み、今年度は授業づくりのサイクルの活性化と主体的・対話的で深い学びの視点から、「どのように学ぶか」の授業改善に努めました。こうした取り組みの積み重ねは、子どもたちの学びだけでなく、私たち自身の教師としての学びの実感となり、日々のよりよい授業づくりを追い求める姿となりました。

今年度は、学習指導研究協議会において研究の発信と共有する場を設けることができました。参加いただいた皆様からご助言をいただいたり、他校の先生方と意見交流したりすることでまた新たな気づきが生まれます。これまで積み重ねてきた日々の実践を大切にしながらさらなる授業改善そして、この研究から導かれる新研究へ生かしていきます。

最後になりますが、国立特別支援教育総合研究所、山形県教育局並びに山形県教育センターの皆様より適切なご指導、ご助言を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。今後も附属学校として大学との連携を生かし、地域のみならず全国に発信していくことができる研究を推し進めていく所存です。今後とも皆様方のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

教頭　鈴木　晶子